
ネギの兄を始めよう！

表裏一体

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギの兄を始めよう！

【Nコード】

N2793U

【作者名】

表裏一体

【あらすじ】

一人の似非オカルト好きの青年は車に引かれて死亡。元々転生する予定だった青年は、他のチート能力に優るも劣らない能力を携えて転生。しかし転生先はネギの兄だった！ この小説は不定期更新、見切り発進の更新の問題の他、チート、アンチ要素、魔改造、キャラ崩壊、原作崩壊等の問題も数多くあります。それでもよろしければ是非読んで下さい。\$¥?題名を変えました。旧題は『ネギの兄だけど何か?』です。

プロローグだけど何か？（前書き）

初めまして、多くの素晴らしいSSに感化されこの小説を書くことにした表裏一体です。

この小説は不定期更新、見切り発進の更新の問題の他、チート、アンチ要素、魔改造、キャラ崩壊、原作崩壊等の問題も数多くあります。

……それでもok？

okならばどうぞ！

プロログだけ何か？

皆さんは輪廻転生というものを知っているだろうか。

最近では一次、二次創作問わずによく使われるネタだが、知らない人に説明しよう。

輪廻転生。仏教で使われる用語で、生物が死んで別なものに生まれ変わる過程を永久に繰り返すことをいう。この際、記憶や才能と言ったものは一旦リセットされてしまう。更に言えば上記にあるように別なものに生まれ変わるのであって、転生する時に人間であったものは人間に転生するとは限らない。

まあ、書かれる一次、二次創作のほとんどが人間に転生されるものだ。加えて書けばネタに使われるもののパターンは『神様が「間違っ
て殺しちゃった、てへ☆」』パターン、『いつの間にか転生してるー！？』パターンの二種類が多く、亜流の『暇つぶしに逝ってこい』パターン等があるが、これらについてはいつか別の場所で語ろう。

さて、これをここまで長ったらしく話したのはちゃんと訳がある。

つい先ほど俺は死んだ。車に引かれてグチャグチャだ。内蔵が飛び出てるし、腸ってあんなに長いんだなー。

そして幼女だ、目の前に金髪幼女がいる。

よくあるパターンで真っ白い空間に少女と半透明の俺がいる。

分かってくれただろうか、諸君。これは転生前のテンプレだ。略して転プレ。転生後は「俺TUEEE!」が出来るであろうと予測できる。俺はしたくないが。所詮傍観者気取りをしたいんです。傍観者ですが何か（キリッ。言ってみたかったです、サーセン。

「あのー、大丈夫ですか？」

大丈夫なわけ無かろう。今もまだ車に引かれた痛みが残っているんだからビクンビクン（注…痛みに悶えています。別に気持ちいいわけではありません）。

「初めまして、天使です」

……はあ？

「魂番号897369013729470271で合ってますね。よかった、死神さんまた間違えて殺すところでした」

……状況を教えてほしい。

「……おい、少女」

「少女じゃありません、天使です！ 貴方なんかよりずっと年上なんですよ！ 一体何なんですかこの世界。私を見たらみんな幼女幼女って……グスン」

じゃあ、まず見た目を大人にしろ。

「泣くのは後にしてこの状況を説明しろよ。よく分かんないんだけど」

「そうでしたね。まず貴方は死にました。ここまではいいですね？」

「ああ」

「うわ、随分アツサリしてますね。えっと本題なんですけど、貴方には転生してもらいます。神命令なんで拒否権はありません」

「どうということだおい。」

○

「と言うことで説明してもらった。少女の「少女じゃないです！」説明がよく分からないところがほとんどだったので俺が代わりに説明する。」

まず俺は生まれる前から転生することは確定事項だったらしい。このあたりはよく分からない理論がごちゃまぜで、極端に要約すると世界のバランスを保つためらしい。音で表現すると不思議パワーがどーンでばーンでずーンになるから俺というずごごごを入れてしーん、らしい。

「そーいや俺がいく世界ってどんな所なの？」

ここ重要。希望としては魔法がある世界。

「えーとですね、魔法があります」

おお、これは素直に嬉しい。こういうのって夢がある。厨二できるし。

「亜人とかいます」

よくあるな、そういうの。

「貴方の住んでいた世界に類似しています」

へー、それも嬉しい。常識とかそういうのを一から学ばなくてもいいからな。

「ああ、こちらの世界では物語として書かれていますね。名前は」

おお、どんな世界だろうか。それもちょっと嬉しいぞ。原作知識を使って無双とかできるし。する気はないけど。

「『魔法先生ネギま!』、ですね」

……えー。

正直俺はあのマンガが嫌いだ。まず主人公のネギがウザい。あの非常識度にはマジ腹が立つ。人がいないのに家に入るなよ。次にあの自称・正義の魔法使い（笑）共。二次創作とかでもアンチされているけど、正直仕方がないと思うくらいだ。あの屑共め、ああいう奴らのせいでネギが歪んだと思う。というか2-Aの生徒が本気で

可愛そうっす。更にスプリングフィールド夫妻。子供を置いていくなよマジ。どうしても置いて行かない事情とかあったとしてもネカネに頼むなよ。爺に頼め爺に。という理由であの世界に行くのはマジ勘弁。

「他の所はー？」

「あー、無理です。もう決定されているんですけどどうしても嫌だっというのなら次の会議までここにいてください」

「げ、まじかよ。その会議っていつ？」

「人間の体感時間で約5万年後ですかね」

無理っす、そんなに待てません。

「なら我慢してください」

「もーヤダだわ、まじ」

「もー、駄々こねないで下さいよ。他の人は結構喜んでましたよ、ネギをアンチできるとか、ハーレム作れるとか、エヴァたんハアハアとか」

そう、それがネギまの二次の醍醐味だろう。正直それ以外無いと思います、はい。しかし煩惱丸出しだな、その転生者。

「ん、待て。と言うことは俺以外にも転生者っているのか？」

「そうですね、パラレルワールド毎に送るんですがたまに重なって

いたり、過去に送った転生者の世界の延長上に送られたりするんで、もしかしたらいるかもしれないし、いないかもしれないって辺りですかね。後々送られたりするかもしれませんね」

……これは厄介だ。もし送られても他の転生者に殺される可能性もある。こういうのは二次創作上でもよくあることだ。そういうのはやだだな。

「時間も押してますし、能力を3つあげますからどんな能力が欲しいか言って下さい」

おお、これこそ転生ものの醍醐味。この能力次第では転生後の生活が決まると言っても過言ではない。

さてさて、どんな能力がいいかな。

「不老不死、魔力無限、魂創造、死者甦生、時間操作は禁止されています。神様レベルですからね、これ」

まあ、予測はしていた。しかしマジどうしよう。無論ネタに走る気は更々ないが。

「じゃあ、まず『ソロモンの指輪』が欲しい」

「……まー随分マニャクで凄いものを要求してきましたね。他の人たちはアニメとかの能力を要求する人が多いんですけどね。ソロモンの再来にでもなるつもりですか？」

『ソロモンの指輪』。古代イスラエルの王、ソロモンが所有していたとされる鉄と真鍮の指輪である。

伝承では、かの天使ミカエルから授かった指輪で、72柱の悪魔を召喚し操る能力を持ち、さらには鳥や動物とも言葉を交えることができるという。

「ま、伝承と実物はちよつと違います。『ソロモンの指輪』の真の能力は、『魔を支配する能力』です。ソロモンさんは魔術王とも呼ばれていましたが、その所以がこの指輪なんですよ」

……ちよつとチートじみてきたぞ。

「悪魔のみではなく、魔獣、世界上の神や天使——私たちがみたいな根元の神や天使ではなく、決められた世界のみで行動できる神や天使のことです——、魔力、気を操ることができます。魔力は全生命にありますから動物を操れますね。さすがに人間は操れません」

ちよつとどころか、かなりチートじゃないカ。

「そうですね、こんなもの要求してきたのは貴方が初めてですよ。ああ、それと形状も大分違って。あれ魂に組み込まれるものなんですよ」

……どゆこと？

「盗まれませんし、殺されない限り壊れません。さらに『ソロモンの指輪』を組み込まれたことによって魂に惹かれて体が頑丈になります。人間じゃないですよ、すでに」

うわー、まじかよ。

「寿命も長くなりますね。アダムとかイヴレベルになるから、大体800年位?」

指輪を要求しただけでこれかよ、おい。

「それともう組み込んだので、もう変えられませんよ?」

「いつの間にだし!?」

「はい、次は何ですか?」

大分チートじみてきたけど、俺は更に上を目指す!

「『賢者の石』が欲しい」

「……次は第五元素を要求してきましたか。神になるつもりですか貴方は」

『賢者の石』。俺が求めたのは『鋼の錬金術師』の『賢者の石』ではなく、伝承上のものだ。

中世ヨーロッパの錬金術師たちが追い求め、その製造を夢見た万能の石。鉛を黄金（正確には貴金属）へ変える、人間を不老不死にする、空を飛べる、姿を消せると言ったあらゆる力を持つこの石。

その形態は様々で、固形、粉末、液体等があげられており、通説では赤色の石と言われている。

この正体、実は四大元素を包容する第五元素と言われており、その材料は硫黄と水銀と言われている。

またこの第五元素の考えは古代ギリシャでもあった。エーテルである。哲学者アリストテレスが提唱したこの第五元素は、人間を世界の中心と考え、土、水、空気、火の順に領域がバウムクーヘン状に重なり、その外にエーテルがあり、それで構成された界が天界と言われている。

この考えに類似したものが古代インドの思想にもあり、これをアカシャと言う。ここでの考えは虚空、空間を表しているという。

魔法なんて曖昧なものだ。見解を加えてやれば様々な力を得るのだから、『賢者の石』を使えば天界に存在する物質で武器を作れるし、空間をねじ曲げることも可能。頑張れば新たな世界を作ることのできるかもしれない。

「まあ、いいでしょう。これも貴方の考え通り世界を作れますが、もし作るときは私に教えて下さいね。運良く『賢者の石』は天使と交信することも出来ますから。報告なく作ったらその世界を壊さないといけなくなるかもしれませんし。あ、これも魂に組み込んでおきますね」

しかしずいぶんチートになったものだな。

「貴方ほどチートな人はいませんよ。では最後お願いしますね、もういないかもしれませんが」

実際もういないけど、貰えるんだったら貰っておこう。

「そーだなー、『ラジエルの書』が欲しい」

「もーヤダですこの人！ 根元神に至るつもりですか！ ていうかあげられませんか、私だって読んだことないのに！」

『ラジエルの書』。天使ラジエルが著したとされる宇宙の神秘を解き明かした本。つまり全てが書かれた本である。アンサートーカーより使い勝手がいい、戦闘には向いていないけど。

アダムに渡されたこの本、実は天使が人間に嫉妬してしまうほどのものなのである。かの『ノアの箱船』で有名なノアやソロモンも持っていたとされる本で、彼らの奇蹟や偉業はこの本を参照したとされている。

またこの本、天使文字といった天使で使われる文字で書かれている。人の言語で書かれた写本はあるが、所々抜けていたり、間違っていたりする。

「ちょっと待って下さいね。神様に言ってみますから」

えゝ、そこまで重要なものなの……？

「はい、わたしです。例の魂番号897369013729470271が『ラジエルの書』を要求してきたんですが、……はい、……はい、そうですね。……え、そこまでするんですか！ というかいいんですか！ ちょ、笑わないで下さいよ！ ……はい、分かりました。それでは」

……中々愉快そうな会話だな。聞いている限り神様フランクだな。

「……天使文字と言葉の意味、それと原書はさすがに無理だけど写本をあげるとのことです。魂に組み込んでおくので使いたいときは

念じて下さい。他のものも一緒ですから。はあ、でも絶対面白がってるってあの神様。……ああ、そうでした。屈んで下さい。知識を与えるので」

「ん、分かった」

そういつて屈むと、幼女の手が頭に触れる。

「ちょっと痛いですけど我慢して下さいね」

「え、それ聞いてなぎゃあああああああつ!!」

頭に激痛が走り、視界が暗転していく。最後に見たのはにっこり笑って手を振っている幼女だった。

……いつか泣かせるところで言うておこう。

○

やあ、久しぶりだな。俺だ、俺。

……いや、別にオレオレ詐欺な訳ではない。名前が無いんだ、まだ。

名前って言うのはオカルト上、とても重要だ。名前さえ分かれば呪い殺すことも出来るし、操ることも出来る。さらには自分の名前

によって力に相乗効果が出たりするのである（ラジエルの書参照）。
ということで、前世の名前が分からなくなった。まあ、仕方がない
っちゃ仕方がない。まず、輪廻転生の時点で通常とは違うのだし、
生みの親もまた変わる。そうなれば遺伝子や血統特有の能力、魔力
量も変わる。勿論顔も体型も髪の毛の色も声も肌も、体のほとんどの
部分が変わる。故に名前は変わる、というより変わらなくてはな
らない。

さて、というわけで現在赤ん坊なわドゴオン！「だから何でそ
んな名前がでて来るのだー！」けでバリバリバリバリ！「いいじゃ
ねえかよ、ハギで」ねむズザザザッ！「だから一文字変わればハ
ゲになって絶対虐められるであろうが！」って「じゃあ、なんか
他の案あんのかよ。ネギはもう決定だぞ」

……分かっていただけだろうか。年中このようにうるさくて眠
れない。え、問題点が違う？ 現実逃避するなって？

……そうだったな、危うく親のことを否定しようとしていたよ。

そうです。ネギの双子の兄に転生しました。くっそー盛大にアン
チしてやんよ。

え、お前自分の立場理解してんのかって？ 当たり前だろ。

ネギの兄だけど何か？

プロローグだけでも何か？（後書き）

感想をお待ちしております。

悪魔来襲だけど何か？（前書き）

3,000PV越え……だと……!?

どうも興奮気味の表裏一体です。

他の人にはそうでもなくても自分はとても嬉しいです。

……しかしこの駄文がここまで行くとは思わなかった。

悪魔来襲だけど何か？

皆さんは悪魔についてご存じだろうか。

まあ、まず知らない人間はいないだろうと思うが、詳しく知らない人もいるだろうと思うので説明しよう。

悪魔。極端に言えば善と対立する者、悪の体現者である。ここで重要なのは妖怪や魔獣、怪物と言ったもの等とは全く違う別のものであるということである。これらのものは生きるために人を殺したりするからである。

実は悪魔というものは多神宗教ではあまり見られない。自然現象を擬人化した多神宗教の神は、善悪では動かず、気まぐれだったり利害で行動するものがほとんどだからだ。それ故に悪の体現者は必要ないのである。

しかし、一神宗教はどうだろうか。例を挙げるとすれば、そうキリスト教とか。悪魔のオンパレードではないだろうか。これで分かるように一神宗教には悪魔が多い。なぜなら一神宗教の神は唯一絶対で創造主、世界は神という秩序によって構成されているのである。それ故に神Ⅱ正義を成り立たせるために、神Ⅱ絶対の善が成り立たなくてはならない。

では、病気や災害、貧困といったあらゆる負の出来事はどう説明するのか。絶対の善の体現者である神の意図なのだろうか。しかし、それでは負の源は神が善であることと矛盾する。

——故に必要なだったのだ。絶対の善の神を肯定するために、神に

抗うものが。そう、それが悪魔。

さて、これをここまで長ったらしく話をしたのにも勿論訳がある。

悪魔襲来だ。

『ソロモンの指輪』をもつ（というか組み込まれている）俺は魔については一倍感感になった。

当初の俺なら空間を歪めて遠くに逃げるだろうが、今は違う。昔の俺を殴りとばしたい気分だ。

……ネギは女の子だった。つまり、まいしすたー（これで正しいんです）。可愛い、可愛すぎる、貴様は俺を萌え死にさせるつもりなのかと疑いたくなるぐらい可愛い。そして何より村の人はいい人ばかりなのだ。正直原作にあった、あの石像の老若の比率はおかしい。爺さん婆さんばかりなのだ、この村。

年齢的に俺たちは爺さん婆さんから見れば孫位だ。そしてこの村の爺さん婆さん方は子供や孫を先の大戦で亡くした人が多い。だから重ねてしまうのだ、自分の子供や孫に、英雄の子供とか関係なく勝手に家に入っても、逆に喜んでもてなされる。魔法関係者ばかりだから魔法を人の目の前で使っても怒られない。それどころか応援される。ネカネ姉ちゃんが夜遅くって一緒に寝られないときは、爺さん婆さんが一緒に寝てくれる。

こんな生活を幼年期に送り、英雄の子供として見る、それこそ腐った正義の魔法使い（笑）共の温床である学校に行ったら歪んでしまうだろう。まあ、俺がいる限りそんなことはさせないが。

と分かっていたただけただろうが、どうしてもこの村を守りたいのだ。確かにここに住み続ければ、我が儘になるかもしれない、魔法を練習しなくなり原作より弱くなるかもしれない。

でも守りたいのだ、この村を。確かに自分の子供や孫と重ねて見てしまいかもしれないけれど、それでも暖かく育ててくれたのだ。

恩返しとして、この悲劇の結末として終わる原作部分を壊してもいいだろう。故に初めてこの力をもって召喚する、この村を破壊する悪魔を殺す悪魔を。

「にーたん、どーたのー？」

舌足らずな発音で心配そうに俺を見る、俺の可愛い妹が目の前にいる。しかし、かわえー。原作ではちゃんと喋っていたけど、しょうがない。英語を和訳して音声になっているから。

だがしかし、英国人（偽）として育った俺はこのかわえー発音すら理解できるのだ！ どうだ、いいだろう！（今後主人公はさらに重度のシスコンへと昇華していく…ラジエルの書参照）

「ポンポンいたいのー？」

「んー、大丈夫だよ、ネギ」

「よかったー」

「ネギ、今日は天気がいいからお花摘みにいったら？」

「うんー！」

ニパーと笑ってトテトテと扉に走っていくネギを見て、俺の心に18590の萌えダメージ！

いや、かわえーわー。だってあれだけ、原作より親父に依存していないし。描く絵も女の子が描く絵だし。魔法の練習もするけどおままごの方が好きだし。釣りじゃなくてお花摘みのほうが好きだし。もー可愛すぎ！

はっ、さっきまでのシリアスはどこへ！ まーいっか、もう召喚して倒させに行かせたし。というか倒すって言うより従わせに行くの方が正しいのか？

「王よ、ただ今戻りました」

シュタツ、と背後から音がする。振り向けばそこには燕尾服を着たないすばでー（これでただしいんです）な姉ちゃんがいた。

「うんお疲れ、ベル。どうだった、あの悪魔達は」

「はっ、申し訳ありません。配下のものが何人か混じっております。いかなる処罰でもこのベルセブブ、甘んじて受けましょう」

ベルゼブブ。「蠅の王」と呼ばれるこの悪魔は、多くの悪魔達を支配する地獄の君主の一人とされており、悪魔の皇帝とも言われている。他にもルシファーに次ぐ第一階級の悪魔、かつて熾天使の軍団を指揮した智天使とも言われており、階級や実績はかなり高い。

本当のところ、ルシファーの警護兼秘書をやっていた。やっていたというのは現在俺達の警護兼俺の秘書をしているからだ。そんな

にアッサリ辞められるのかというと、『ソロモンの指輪』って本当に便利ダネ！ である。

まあ、警護をやっていたからそれなりの強さであることは確かだ。本人曰く『現界して間もないのでせいぜい三割程度の実力しか出せない』らしい。

……しかし三割であの量の悪魔を倒すって化け物だな。

さて、悪魔を倒したのはいいがいかんせん、召喚者はあの正義の魔法使い（笑）の大頭であるMM老議院だ。何にもなかったらなかったで別の方法で攻めてきそうで恐いので一応襲わせた。数は元の1／3にして、人に攻撃しない、建物を壊すだけ、壊し方は派手にとか色々注文付けてやれ、って命令したらその通りにしてくれた。さらに夜だから恐さ倍。ネギは恐くって泣いちゃっている。

まあ、絶対安全なんだけどね（笑）。

ここで登場するのは我らが父上、ナギ・スプリングフィールドである。

しかし派手にやっちゃって。おかげでネギがビビっちゃってるじゃないイカ。

それで、現在あのシーンである。

ネギはプルプル震えて俺の服にしがみつき、涙目で親父を見ている。俺はと言うと親父って分かっているからビビってないよ？

でも、ネギカワエー、不謹慎だけどカワエー。

「しかし今までどこほつき歩いてたんだよ、親父よ」

「わりいな、色々と野暮用があつてよ」

「くっくく、俺たちよりそっちの野暮用の方が大事なのか？」

「……いじわりいこと言うなよ」

「ごめんなさい、と。んで用事は？」

「ああ、そうだ。ネギには、ってまだ怖がつてんのかよ」

「そうふくれんな、親父よ。普通あんなの見たら大の大人でもビビるぞ」

「くっくく、じゃあお前は普通じゃないのか？」

「……仕返しかよ、大人気ねえ」

「悪い悪い、でこの杖をネギ、お前にやる。俺の形見だ」

「……おとーさん？」

ネギは怖ず怖ずと、片手でその渡された杖を持つ。

「んでクギ、お前にはお前の母さんの剣をやるよ」

ん、やっと俺の名前が出たな。今回でないと思っていたわ（作者もです）。しかし名前が木工道具とは……。

「? どうした?」

「ちょっと電波が。つーかこの剣随分立派だな、おい」

「お前の母さんは金持ちだったんだよ」

「この剣はまるでおお「クギ」ん? まだ秘密ってか? まあ、大
体予測はつくし、親父は答えを言っているようなもんだし」

原作知識です、サーセン。

「もうそろそろ時間だ……悪いな、お前らに何にもできなくて」

親父が夜天へゆっくりと浮き始める。

「……おとーさん?」

ネギの手はゆっくりと俺の服から離れる。

「いいよ、代わりに爺に色々してもらおうから」

俺は笑みを浮かべて嫌みを言う。

「こんなこと言えた義理じゃねえが……元気に育て、幸せにな!」

浮かんでいくスピードが速くなっていく。

「おとーさん!」

ネギは親父を追い、走る。

「騒いでやるよ、盛大にな」

目を細め、その目で親父を追いかける。

ずざざざつ、と音がする。目を向ければ、ネギが転んでいた。

「ネギ！」

俺はネギの元に走る。

「おどーざーん！」

ネギの目からは涙が溢れだし、お父さんお父さん、とそう叫び続けていた。

○

さてそれからというもの、村があった場所はまだ人が住める状態ではなくそのため村人たちは親戚の家か、ウェールズの山奥の街へと引っ越しをしていた。無論俺らはウェールズへ。

……しかしあれだな、MM元老院マジムカつく。爺さん婆さん方とネギと一緒に平和にほのぼのと暮らしていたっていうのに。その邪魔をしやがって。

「そうだ、復讐をしよう」

そうと決まれば行動に移そう。くくく、こういう悪事や汚職にまみれた屑共の証拠集めに適した悪魔がいるんだよ。

ズブズブ、という音と共に床から片手に蛇を持ったローブ姿の男が現れる。

「このアンドロマリウス、我らが王の命より現界いたしました」

アンドロマリウス。『ソロモンの小さな鍵』では第72位を勤める悪魔である。この悪魔、実に悪魔らしからぬ悪魔で、あらゆる悪事を発見し、盗まれた品を取り戻し、その泥棒や悪人を罰するという悪の体言者とは思えない悪魔だ。その所以が片手に持っている蛇から伺える。

「一毒（悪魔）をもって、一毒（悪）を制す」、まさにその通りである。この考えは蛇は毒をもっているため嫌われるが、古代ギリシャでは蛇は医学の象徴とされている。まさに悪にとっての悪の体言者が、このアンドロマリウスなのであろう。

「現MM元老院の悪事と汚職を調べあげてこい。一週間以内にだ」

「はっ、この命にかけて！」

そういつてアンドロマリウスは床に沈んでいく。

くくくMM元老院の屑共め、今のうちにせいぜい笑っておくがいい。

悪魔来襲だけど何か？（後書き）

感想をお待ちしております。

『汚物は消毒だぁ!』 だけど何か? (前書き)

日刊ランキング8位、これって本当ですか?

自分の目とパソコンが信じられなくなった今日この頃……。

『汚物は消毒だあ!』だけど何か？

あれから三日たち、マリウス（アンドロマリウスの愛称）から汚職の証拠を大量に得た。この中には既に悪魔襲来事件の計画提案者の名前も出ている。さて、ここからが問題だ。

生かすか、殺すか。

普通なら殺すのだが、提案者に問題があった。

ターモル・レ・ミントン。先の大戦の英雄の一人で、軍人上がりの政治家だ。政治家としても有能だった彼は、若干30歳でMM元老院へ。今の今まで汚職や悪事の類はしておらず、その性格は厳格で愛国心が強い。

故にこの計画を提案した。彼もまた大戦の真実を知らない人間の一人なのである。

『千の呪文の男』ナギと『災厄の女王』アリカの子。これが彼が知る情報である。『災厄の女王』は実は無実。これが彼が知らない情報。

戦争の発端となり世界を陥れた罪人の子。それだけでも殺す理由は十分なのである。

真実を知らなかったのにその計画に踏み込んだから殺す、なんてことはない。そこまで非情でないし、つい前まで一般市民だったのだ。出来る限りハッピーエンドで終わらせたい。

「ということ、はろー」

「何者だ!？」

来ちゃいました、ミントン宅。しかし和風っていうのには元日本人からすればなかなか嬉しい。

「つーか、三歳の少年少女を殺す計画提案するって結構酷くない、
ワン・フィンッシャー
『一撃の鉄甲士』ターモル・レ・ミントン元老院議員？」

「っ!？　なぜその計画を……!？」

「いやだってねえ、俺襲われた張本人だし。あ、名前言うの忘れていたわ。初めまして、クギ・スプリングフィールドです」

「……なぜ私だと分かった？　そして何をしにここにきた？」

あ、冷静になってきたか。

「まず一つ目の質問はちょい面白い情報源を持ってんだ、俺」

悪魔です、はい。

「そんでもって二つ目は、」

ぐい、と顔を前に押し出し前かがみになる。

「真実を教えに」

○SIDE…ターモル・レ・ミントン

私が殺そうとした黄金の髪を持つ少年が、今日の前にいる。僅か三歳だというのに機密レベルの情報すら知りうる情報源を持ち、自宅にいる警備の者すら出し抜き（もう一度鍛え直す必要があるな）、大人でも持つことがなかり強い意志を瞳に燃え上がらせる。

そしてその小さな口からは私が知らない情報が出てきた。

『災厄の女王』アリカはMM元老院に民衆の不満や憎しみを押しつけるために作られた生け贄だと。

事実は彼女の父王が『完全なる世界』と関与していたのだと。

さらにはMM元老院の汚職の証拠の数々。

開いた口が閉じない、閉じれない。メガロメセンブリアの最高機関、MM元老院の一議員である私ですら知らない事実の多さに呆れて。

いや、MM元老院議員であるが故に知ることが出来なかった情報であるだろう。当時の元老院議員達すら一部を除いて知り得なかった情報でもある。そうでなかったら情報は流出していてもおかしくない。

しかし、悔しい。国のために、と提案した計画は無駄どころか罪

なき人間すら殺そうとし、そして何より今まで心の支えであった柱が間違えであったのだ。

私はオスティアで生まれ育った。父は有名な拳闘士で、その父の教えの元、私は鍛えていた。

父が病で床に伏した頃、ヘラス帝国のアギユレー・シルチス亜大陸侵攻が始まった。

メガロの軍上層部と伝がある私は、父にメガロへの移住を申し出た。しかし父は亡き母と過ごした家を手放すつもりはなく、私の申し出を断った。しつこく言ったが、父は首を縦に振ろうとはしなかった。

その後、メガロから徴兵された私は前線へと出た。何回か出た頃には『一撃の鉄甲士』なんて言う二つ名で呼ばれ始めた。英雄、とも。

しばらくたち、戦争は終わった。兵役が終わり、ひと段落ついて家に帰ろうとした頃のことだった。

オスティア崩落、そして父の死の知らせ。

私は泣いた、父の死を悲しみ。

私は考えた、父の死の原因を。

私は憎んだ、父を殺した姫を。

私は喜んだ、姫が死んだことを。

私はメガロメセンブリアが『災厄の女王』と同じ過ちを歩まないために政治家となり、よりよい政治を目指した。

そしてMM元老議院となった。そして知ったのだ、『災厄の女王』は生き残り、子を作ったことを。

その子供に罪はない。しかし憎んでしまうのだ。家族をちちをころした奪った奴が、なぜ家族をこどもをなしている作っているのかと。

奪われた、だったら奪い返せばいい。

心の底ではそう考えていたのだろう。だからこの計画を作り、悪魔を村に襲わせた。

しかし、真実はどうだ。

父を殺したのは前王だった。本当に悪いのは前王だった。

……勘違いも腹立たしい。

故に悔しかった。間違っていたのは自分だったから。国のためにいいながら復讐に走った自分が醜かったから。勘違いで殺そうとした自分が罪深かったから。

もうでないだろうと思っていた涙が畳を濡らす。嗚咽が漏れる。

「……なあ、あんた」

目の前の少年が、口を開く。

「償いたいのか？」

コクリ、と首が縦に振る。

「なら手伝ってくれないか、あんたにしか頼めないんだ」

それはまるで救いの手であった。

○SIDE…クギ・スプリングフィールド

んで、またあれから三日たった。現在魔法世界、特にメガロは荒れに荒れている。MM元老院議員23名の不正に横領、さらには密輸等の汚職が元老院議員、ターモル・レ・ミントンに摘発されたのだ。

ターモルは元々英雄と讃えられていたため人気がぶり返し、雑誌の取材にテレビのオフア―、元軍人として軍での講義さえも頼まれると、今もつとも注目を浴びている。

「いやー、しかしこんなに引っ張りだこだと疲れんだろう？ 大変だなー、おい」

「はあ、勘弁して下さいよ。あなたのせいでしょ、こうなったのは。あれからまともに眠れていないんですよ」

「CMにも出てるよな、確かスーツの。ギャラってどれくらいなんだ？」

「確認していませんよ。そういうのはあなたから送っていただいた秘書を使っていますから」

あ、悪魔って言うことを彼知っていますよ。

「しっかり有効活用しちゃってんじゃねえか。美人なの送ったんだが、どうだ？ ……そう睨むなよ。しかし警察も凄いな、今まで元老員から圧力が掛かっていて動けなかったのに、お前のお陰で捜査に踏み切ったんだから」

「そのせいでこちらは手が足りません。そちらの言い方では猫の手も借りたい、でしたっけ？」

そう、警察は元老院から——とは言っても一部だが——圧力が掛けられており、自由に動けなかった。例え目の前で違法行為をしていても逮捕できない状態だという。

しかしその元老院の一員である彼が摘発したことにより、「もしかしたらまだ不正がある可能性がある」という名目で、メガロメセンブリア中の国家機関を捜査した。そしてら出るわ出るわとやっていない犯罪を探す方が大変なほど多くの汚職を発見、そして全体（警察も含む）の約1／4が逮捕される始末で、新たに収監所を作らなければならぬほどになった。

そのため現在のメガロはギリギリ国として働いている状態であり、とてもではないが週末の休みが得られる状態ではないのだ。……そのために過労と貧血で倒れる者も少なくなく、さらに追いやられて

いる状態だという。火の車、ここに見たり。ただ言ってみたかっただけです、サーセン。

「じゃあ、もう何人か悪魔を送るか、事務処理が得意な奴。俺は俺で忙しいしな」

「一体何やっているんですか、あなたは？　大体何か碌でもないようなことをしでかしそうで怖いんですが」

失礼な奴だ。三日前は自分から部下にして下さい、って言ってきたのに。

「メガロのフィクサーに、俺はなる！」

「……やっぱり碌でもないことだった」

本当に失礼な奴だな、おい。

『汚物は消毒だぁ!』 だけど何か? (後書き)

感想をお待ちしております。

急展開だけど何か？ 前編（前書き）

夏風邪が一日で治るっという……

今回の話は読む人を選ぶかもです。

急展開だけど何か？ 前編

「にーたん、朝だおー」

ネギがユサユサと体全体を使って体を揺らし、舌足らずな発音で目が覚めるのを促す。

「にーったん、あーさーだーおー！」

……何この小動物、めっちゃ可愛いんだけど。

「うにゅー、おつきしないとネカネおねーたん怒るおー？」

うにゅー、って！ うにゅー、って！！ ハアハア、鼻から愛が止まりません！

「にーたん、血ー！ ネカネおねーたん！」

だだだっ、とネギが部屋を飛び出す。お兄ちゃん、転ばないかが心配です。

そんな心配をしながらフラフラと立ち上がって枕元に置いていたティッシュを一枚半分にちぎる。半分になったティッシュを巻いて血が出ている鼻に突っ込む。

……両方から出ていました。ネギの萌えぱうわー、恐ろしや。

「もう、また鼻血が出たの、クギ？ もう大丈夫？」

そんなことを言いながら部屋に入ってくるネカネ姉ちゃん。いや、いつもすんません。でも仕方がないんです。ネギが可愛すぎるんです、ネギが可愛すぎるんです。重要なことなので2度言いました。

「それは仕方がないわね！」

目をキラキラさせながらブンブンと首を縦に振る。だよー、可愛すぎるよねー。

……ネカネ姉ちゃんってこんなキャラだったっけ？

「にーたん、もう大丈夫ー？」

ネギが心配そうにそう言う、目をうるうるさせながら、しかも上目遣いで。

もう逝っちゃっていいよね？ 構わないよね？ でもその前に一言、

「『何この小動物、食べちゃいたい』」

ネカネ姉ちゃんと共に逝きました、ブバーツ、と。思わず仰け反る位の勢いで。

「にーたん、ネカネおねーたん!？」

○

あれからひと段落落ち着き、やっとのことで朝ご飯——というより既にお昼であったが——ありついた俺たちは、食事をとった後、メルカディアナ魔法学校へと向かっている。

何せ今日はメルカディアナ魔法学校入学試験だ。

元々入学するのは決定されているが、クラス分けの事情で試験をしなくてはならない、ということだ。

「しかしネカネ姉ちゃん、試験ってどんなことすんの？ 全く予備知識がない状態で試験ってのはまずいと思うんだけど」

「よびちちきって何ー？」

かみかみネギ萌えー。

「予備知識よ、ネギ。そうねえ、前もって知っていなければならぬ知識よ、ネギ」

「わかったー！」

本当に分かってんのかよ、って大体の人は思うだろう。だがしかし！ 双子というのは遺伝子のみならず、魂レベルで類似点が多い（ラジエルの書参照）ため、チートは無いものの、準チートな脳味噌を得ているのだ！ デデーン。

元々頭が良かったのに、さらにプッシュ、倍プッシュですね、分

かります。

おお、恐ろしや。

「んで、試験ってどんななの？」

「そうねえ、魔力測定でしょ、ペーパーテストでしょ、後『火^{アールデスカ}よ灯^{ツト}れ』、これくらいかしらね」

「ふーん、そんなもんか」

「そんなものかー」

「ふふつ、そんなものよ」

そんな会話をしている内にメルカディアナ魔法学校の校門が見えてきた。

○

「では、自分の番号を呼ばれたら個室に入ってください」

ローブを纏った職員の男性の声が会堂に響く。

その会堂の中には幼稚園児から中学生位までの、約3,000人。この中から500人が入学でき

る。

まあ、何となく気づいていたけどこって結構倍率高いんだよね。何せ我らが親父、ナギ・スプリングフィールドが通っていた学校だ。逆に倍率が低いわけがない。

……しかし緊張度の個人差ありすぎでしょ。寝てる奴がいれば、緊張しすぎて顔が白を通り越して青になっている奴もいるし。ネギはというと、にこにこしながら鼻歌を歌っている。かわえー。

ネギを見て癒されていると、ネギの番号が呼ばれた。

「ほらネギ、呼ばれたぞ」

「うん、行つてくりゅー」

ああ、もう鼻から愛が……！ 可愛すぎる！

身悶えていると今度は俺の番号が呼ばれた。

「よし、行きますか」

○

受験が終わりました。

へ、受験の時は何していたんだって？ いや、つまらないっすよ。温度計型の魔力測定気握って（勿論手加減しています）、杖振って呪文唱えて、ペーパーテスト中は寝てたんだよ？ 他に書くこともなかったし。

さてと、トイレに行ったネギを待つだ「お前ら、動くんじゃねえ！ 動いたらこいつを殺すぞ！」……もの凄く嫌な予感しかしないんですけど。

ゆっくりと後ろを向けば、覆面を被った一人の男が杖を当てている、ネギの喉元に。

……原作にこんなことがあったことは一切書いていなかったぞ。何故だ、何故こんなことが起こった。

……ああ、分かった。『ラジエルの書』を使えば、一瞬で何事も分かることが出来る。無論、目の前のことが何故、起こっているのかも。

奴はこの前の一掃でクビになった一人だ。やった犯罪は恐喝。

また同じことをするのかよ……。

そう呆れながら、自分を責めた。

あんなことをしたから、ネギが危険な目にあった。ネギだけでは無い。今も世界中でこんなことは起こっているだろう。

全てとは言わないが、その一端を担っているのが、俺だ。

まあ、いい。そんな悩み事は後回しだ。そんなことより今、考えることは一つだけ。

ブ・チ・コ・ロ・ス。

「フラウロス、殺せ」

そう口にした瞬間、覆面を被った男の首は落ちた。首と別れた男の身体は前に倒れ、その奥からは豹が見える。

フラウロス。『ソロモンの小さな鍵』では第64位を勤める豹の半獣の悪魔だ。悪魔は猛獣の姿をしているもののほとんどは、知識を与えるなどといった仕事をする。しかし、このフラウロスは違う。暗殺や護衛と言った、バリバリ戦闘系の悪魔なのである。

とりあえずフラウロスを魔界へ帰す。倒れている男の身体を退かし、ネギを見る。なんというであろうか、もしかしたら泣きつくかもしれない、そう思っていた。

恐怖。

ネギが俺を見るその瞳には、恐怖の色が浮かんでいた。

「いや、こないで」

○

「うわああああ！」

ボタン、と大きな音を立てて椅子が倒れる。

……ちよつと待て。さっきまで俺は立っていなかったか？

「その受験生、今試験中ですよ。座ってください」

ああ、そう言えば思い出した。眠る前に夢予知したんだっけ。

夢予知とは、俺が作ったというかただ単なる予知である。それを夢で映像化、といっただけのものだ。

つまり、さっきのことは未来で起こること、そういうことだ。

夢落ちかよ、おい。

しかし、夢とは言っても本当に起こることなのだから対策を練らなければまずい。

椅子に座り、フラウロスを召還する。皆さんお忘れだろうが、俺の魂には『賢者の石』も埋め込まれている。その中の一つ的能力、『不可視化』を使い、フラウロスを消す。

そして念話の応用でさっきの夢を送り、小さな声で、フラウロス

にしか聞こえないほどの声でこう言った。

「覆面の男を殺せ」

○

間接的とは言えど、初めて殺人を犯した。

別に何か感慨深いものを感じるわけでもないし、人を殺したこと
に罪の意識を感じるわけでもない。

はっきり言ってしまえば、何も感じないのだ。

転生前はごく普通の、どこにでもいる一般人で、転生後だってそれなりに波瀾万丈ながらもそこまで一般人との感性がズレるような生活を送ってきたわけではない。

なのに、人を殺すことを厭わない、人を殺しても何も感じない。
感性がイカレている。

（どうしたものかねえ……）

そう心で呟き、ため息をついた。

『あ、あー。聞こえていますか？』

頭の中に響く、いつぞやの少女の声。

『……おい、結構今シリアスな展開なのに、なんでお前はそう空気を壊せるのかね』

『え、いやいや！　あなたがシリアス感じてても私には分かりませんから！』

……なんだろう、一気に今まで建てていた何かが崩れさった感じがする。

『それで少女、何の用事だ？　まさか空気壊して何もないってわけじゃないだろうな』

『よ、少女じゃな『ええい、黙れ！　空気を読めない少女天使には少女のみで十分だ！』……ぐす、酷いです。というか、それを言ったらあなたはシヨタじゃないですか！　なんでそこまで強気に！？』

『いや、この先成長の余地がないお前には言われたくない』

『今のグサツ、できました……』

いや、そんなことより用事はなんすか？

『うう、しかもなんか冷たいし……用件はですね、あなた、神になれますが、どうします？』

え？

『え？』

何それ怖い。

急展開だけど何か？ 前編（後書き）

感想をお待ちしております。

急展開だけど何か？ 後編（前書き）

今回の話で、今後の、とは言っても原作までですが、方針が決まります。

ではどうぞ。

p.s. 金（とりあえず作者の一人称）は感想を頂けるとテンションが上がります。……なんか寄こせて言ってる感じですね。

急展開だけど何か？ 後編

というわけで、転生前のあの白い空間です。わーぱちぱち。

……ええ、そうですよ、急展開すぎて困っておりますですよ。

「ええっと、もの凄い勢いで頭を抱え込んでいるところ悪いですけど、もうすぐ神様が来ますよ?」

そうです、神様と会うとです。そういう重要なことは最初から言
って欲しかった。つい先ほど突然『あ、うちの担当の神様と話しま
すから』と言われたとき、第五元素収束砲（某全力全壊星光破壊砲
の威力の約30倍）を思わず撃ってしまったのは、悪くない、悪く
なんか無い。

……まあ、幾ら現実逃避したってあの幼女天使は帰ってこない「
死んでませんよ！ 勝手に死んだことにしないでくださいよ!」。
全員、合掌、礼拝をお願（ry）。

「あ、来ましたよ」

頭を上げて、前方を見れば、2つのプリンが浮かんでいた。

……プリン？ では何故、バインバインと効果音が聞こえる？
おや、鼻から血が出てきたぞ。どうということだ？

……前かがみになった俺は悪くない！

——前かがみだと？ まだ俺、三歳児だぞ？ なんで前かがみに

なる必要がある？

よく自分の身体を見れば、転生以前のそれ。そして何故か裸（ver. 誰得？）というか何故転生前の状態？

「私は得よ。それとね、何故転生前の状態かというとね、あなたの魂の本質って転生前のものだからよ」

そう答えたのは目の前にいるプリン。あの名称はプリンだ。以後変更及び異議は認めな（ry）。

「プリンじゃないわよ。あなたが今生きている、と言うよりは住んでいる所の管理神なのだから、一応でいいから敬意は払って欲しいわね」

やはり神と言ったところか、読心術はお手のものらしい。……しかし、この顔はどこかで見たことがあるような。

久しぶりに見た、日本人の顔だ。しかし、その顔はおっとりとしたもので、それに吊られてか、雰囲気も同じものだ。特徴的なものに、左目には泣き黒子がある。赤茶色の髪は長く、腰まである。

どこかで見たことがあるような顔だ。しかし、転生後の記憶にはそんな顔の人物の、というか日本人すら会ったことはない。

ということは、転生前か？ でも、世辞でも友達が多いとは言えなかったし、その中の女友達でもこんな顔の持ち主はいなかった。

うーむ、謎だ。こう言うときは、一何でも解決機（ラジエルの書）
し。……ありし？ 回答拒否って。こんなことは初めてだぞ。

「残念だけと思ひ出すまで悩んでもらうわよ」

うふふふふ、と口を手で隠しながら笑うプリン。……いや、女神
サマ。ねえ、これでいいでしょ？ だから空中に浮いている5つの
俺作第五元素収束砲×5をどうにかして。

「だーめ♪」

「まじかY『ズゴーン！』」

ああ、成る程。これはトラウマになるな。

○

スーパースペック化した俺の身体ですら一瞬、気を失うほどの威
力でした。どれくらいの威力かというと、ご想像にお任せします。

いや、しかし神は全治全能とはよく言ったものだ。何せ俺の第五
元素収束砲の収束時間の効率化を高めて、威力は少々下がったもの
の俺のものより展開の高速化、及び燃費を良くしているのだ。軽く
大陸1つ落とせるぞ、おい。

「いやー、でも流石ねえ。今のなら普通神なら軽く逝っちゃった

のに。流石、僅か3年で根元神に至った人間、いやもう神ね」

え、もう神決定事項？　　というか普通神ってもち世界神だよね？
そうだよ？

「いえ、根元神よ」

既に神すら逸脱していたようです。

「普通ね、根元神っていうのにはステップが2つあって、死後に信仰されて世界神へ、さらにその後信仰され続けたら根元神になるんだけど、あなたって『ソロモンの指輪』を魂に組み込んでるでしょ？」

そうっすねえ。

「信仰って『魔』に属するものなの。それでね、その信仰を無意識に吸収してるのよ、しかも全世界」

うえ？　　どう、ドゥーユーコト？

「つまりね、普通神を飛び級して根元神に、しかも上位神になっちゃったのです、わーぱちぱち」

ぱちぱちじゃねえー！　え、え？　　つまりもう神になってんの？
なれるとか、そう言うの抜きにして？

「そうね。それでね、この件であなたの対偶について緊急会議が開かれたのよ。それであなた、まだあの世界で生きたいでしょ？」

もちです。餅のロンです。

「というわけでちょっとだけ封印を施すわね」

え、なんで？

「だってあなた、気まぐれで世界の1つや2つ、軽く塵も残さず消し去ることなんてお手のものなのよ？ そんなレベルの神に封印を施さないほうがどうかしてるわよ」

ほほう、俺ももうそんなレベルのチートまで来ましたか、自分が怖いっす。

「というわけで、一応封印は掛けるけど以前とはあまり変わらないわね。大きく変わるところは、そうね、第五元素収束砲、とか言っていたわね。あれの威力が半分になるくらいね」

かなり変わるぞ、おい。

「いや、変わんないわよ。たしか『クラテイスデー・アイギス最強防護』、かしら

？ 今のあなたの世界の最高峰の防御力を持つ魔法。あれが軽く吹き飛ばせるんだもの、半分の威力でも」

ハッハッハ、ナンノジョークダイ？ ソレ？

「こーら、現実逃避しないの。まあ、2倍の時間をかければ元の威力になるし、世界を壊そうとしても時間が2倍なら根元天使も2倍出せるわ」

まあ、別に困ることはないから、別にいいか。

「りょーかいっと。んで、最終的に俺は人間？ それとも神？」

「強いて言うなら、神を越えたチート神よ」

おふ、そうでか。

○SIDE…根元神

しかし、今私の目の前にいる青年がとても、とても愛おしくて堪らない。

信仰もされずに既に神格化された彼は、感性までもが人のそれをも逸脱している。

彼はそれをイカれている、と考えているがそんなわけがない。感性が<ruby><rb>イカれている

</rb>><rp>(</rp>><rt>.....</rt>><rp></rp>></ruby>—ことに恐れを抱いている(.....)のだ。もしイカれているとすれば、それに恐れを抱かない。つまり、彼は中途半端に神の感性を受け継いでしまった、しかも魂関係の方向を。

ああ、たまらなく愛おしい。その矛盾した心のあり方に思い悩む彼が、しかしそのジレンマの中で普通に生活できる彼が。

ふふふ、今後の彼がどの様に育つのか、そのジレンマの中どの様に歪むか、とても、とても楽しみだわ。

そうして、世界にいる私の分体を少々、イジらせてもらった。

○SIDE…幼女天使

あわわ、神様が果てしなく怖い笑い方をしています。

どんな具合かというと、「うふふ、うふふフ負負負腐腐腐腐腐……」て感じをエンドレスってます。思わず彼もドン引き、と言うよりは怖がっています。

しかし、なんで私の周りにはおかしい人ばかり集まるのでしょうか。神様から始まり、同僚の多く、さらには私の系の転生者の皆さん。

あはは、もう私の関係者皆さんじゃないですか。

……もうどこにでもなれ……（この7年後、この天使には心、いや魂からの友が出来る…ラジエルの書参照）。

○SIDE…クギ・スプリングフィールド

「あらいけない、時間だわ」

先ほどまでとてつもなく怪しげな笑いをしていた神が突然そんなことを言い出した。

「時間？ 何のだよ？」

「いや、もうそろそろ会議の時間なの。最近転生者に関するイレギュラーというか、なんか好き勝手しちゃって。世界の軸がズレにズレちゃって、もう大変なのよ。パツ、と消しちゃってもいいんだけど、それでも軸がズレちゃうから根元天使を送るんだけど、それでも最近の転生者って根元天使より強かったりしちゃって。下手に送ることも出来ないのよ」

……つまり転生者のせいで色々苦労しているっていうことか？

「はっきり言っちゃえばそうね。それでもう大変で大変で」

「じゃあ、そいつ等を殺してもヨロシ、とそう言うわけ？」

「……あなた、なに考えているの？」

「いや何、ちよっとしたボランティア活動でもしようかなって。…俺が殺^やっちゃってもいいけど、どうなん？」

結果だけ言おう。俺が好き勝手やる転生者を殺すことになりました。

んまあ、殺すことに忌避感はないし。……やっぱり狂ってるのかねえ。

今後の予定というか、戦闘訓練の目処が立ったことだから、別にいいか。

急展開だけど何か？ 後編（後書き）

完璧あの根元神さんはあの人ですね、はい。

というわけで今日はここまで。

感想をお待ちしております。

リンチだけど何か？（前書き）

六話目更新です。

あとがきにアンケートがあるので、答えていただければ幸いです。

ではどうぞ。

リンチだけど何か？

どうも、クギです。今、魔法世界です。殺りましたよ、2名ほど。

いや、『ふはははは、弱い弱い弱い！』な状況に……いや、彼らもチート能力貰ってるはずだね？ 瞬殺だったよ、第五元素収束砲で。

「こんなの訓練じゃない！」って訳で、次の相手は手加減します。手加減を覚えないと毎度毎度スプラッタな状況に——いや、これ以上考えるのはやめよう。

空を飛んで移動していると、ようやく次の敵が見えた。まあ、あれだな。パッキンのイケメン、って感じだな。某赤い外套を身に纏ってるってことは大方型月、しかもFateの弓兵さんだろうな。

お、ようやくこっちに気づいたな。

それじゃあ、狩りを始めようか。

○SIDE…名も無き転生者

俺はその少年を見た。

その背には太陽、6対の純白の翼からは5つの光。赤、青、黄、緑の4色の小さな粒、そしてその隙間から射しこむは陽光。

自分のものとは比べられない黄金の、荒々しくも綺麗に解かれた髪は、正に百獣の王の鬣。

その顔には不敵な笑み、右手に持つ黄白の剣を掲げる、高く、高く、高く。

そして、こう言ったのだ。

「十秒、時間をやる。この攻撃をよけてみな」

○SIDE…クギ・スプリングフィールド

ん、惚けた顔しちゃって。あ、キレた。

「フザケるな……!!」

そう言って投げってくるのは、弓兵お馴染み、干将・莫耶。

「はあ、型月ワールドならまだしも、この世界じゃそんなの雑魚中の雑魚、違う宝具を使えよ」

そう言って、左手を振るう。

左手には、キリスト教内では拒絶、死を表す。それを振るえば、即興の盾が出来るというわけだ。

「ほれ、十秒経ちまったぞ」

お次に右手を下に振るう。勿論ただ、振るったわけではない。魔力と気、つまり感卦法だ。

この考え方は激しく長ったらしいので、略すると二乗ぱうわーなわけですよ。

でも、ここに現代科学の——しかも小学生ですら知っていることなのだが——磁石の考え方を入れてみる。

どちらでもいいんだが同極を近づけた時、離れようとする力が生まれるわけで、その力を放出すれば凄いんじゃない？ というわけで実戦で実験です。

バゴオオオオオン！

……一瞬で緑豊かな大地が焦土と化しました。そこ、自然破壊と叫ぶわない！ 戦いには犠牲が付き物なんだ！ あ、でも転生者は生きてるな、凄い凄い。

「へえ、今ので吹っ飛んだと思ったんだが、以外と強い、というか戦闘経験が結構ある転生者だな」

「くっ、なめるな……待て、今転生者と言ったな？」

「ああ、そうだな。あんた転生者だろ？ 結構好き勝手してたから

神様から殺せ、って言われてな」

「フザケるなよ！ 人を勝手に転生させておいて、殺すとはどういうことなんだ！」

「だーかーら、お前、調子乗り過ぎなの。そう調子乗れんのもお前、神様から力貰ったからだからだろ？ だからあーだこーだ言わずに俺の実験材料になってくれ」

「誰があああ！」

そう言って男は紡ぎ始める。

――――
体は剣で出来ている。

Steel is my body,
and fire is
my blood.

血潮は鉄で 心は硝子。

I have created over a thousand
blades.

幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death.

ただの一度も敗走はなく、

Nor known to Life.

ただの一度も理解されない。

Have withstood pain to create many weapons.

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

Yet, those hands will never hold anything.

故に、生涯に意味はなく。

So as I pray, unlimited blade works.

その体は、きっと剣で出来ていた。

「無限の剣製 (Unlimited Blade Works) ……!」

瞬間、周辺の空間が赤く染まる。

周辺には大量の剣の数々。さらにその一つ一つに大量の魔力が詰まっている。

固有結界。それこそこの男の奥の手なのだろう。

そしてその手には金と青が強調された、一振りの剣。

「^{エクス}約束された――」

「いきなり切り札かよ、おい」

「――^{カリバー}勝利の剣！」

男は振るう、がむしゃらに。剣からは光が溢れ、確かな方向性を
持って、俺に迫ってくる。

「バーカ、こんなんでも逆に死ねるか」

――フングルイ ムグルウナフ クトウグア ファーマルハウト

ウグアীগグアア ナフル ダグン イア クトウグア！

○SIDE…三人称

「旧支配者 永久の狂気 悪しき炎隗（the Great Old Ones Cthugha）！」

燃えている、エクスカリバーから出た無数の光が。

燃えている、そこら中に突き刺さっていた宝具と称された剣の数
々が。

燃えている、彼の奥の手である固有結界が。

クギ・スプリングフィールドは声高々にそう叫んだ瞬間の出来事だ。日の光は先ほどまでの物とは違う。

黒い。

寒い。

痛い。

「ぐっ……！？」

男は突然、口から赤黒い液体を出す。血だ。

その手に持つ剣で体を支えないと、立つことすらままならない。

「一体何が？ ……！？」

太陽が、赤く、紅く、朱く、アカイ。

「型月シリーズを批判する訳じゃないが、型月ってけっこうメジャーな神話ばっかなんだよねー」

中にいるクギがそう口を開く。

「ルーキーな神話も是非入れてほしいところっすねえ。と、いうわけでアンリ・マユとか勘違いされそうだから、言っておこうか。こいつは悪の体言者なんかじゃない。ただの火の神だ」

クトウグア。

45億年も前のこと、この地球に巨大な炎の塊が落ちた。それこそ、この火の神格及び旧支配者クトウグアである。

しかしこのクトウグア、わざわざ地球に飛来してきたというのに何もせず地底の奥深くに潜り続けたのだ。

そして3億年前、旧支配者を駆逐するために訪れた旧き神により、この神は狂気に陥らされ、地球から追放された。

追放後かというと、南魚座の一等星フォーマルハウト、あるいはその近くにある小さな恒星コルヴァスに住んでいるという。

……まあ、彼に強制的に召喚されたわけだが。

「本来、クトウグアの召喚はフォーマルハルトが地平線上に存在し、呪文を三回詠唱しなくちゃいけないんだが、第五元素を使って地平線上にフォーマルハルトを生成、反響^{エコー}を使って三回同時詠唱をしたわけだが、こいつはすげえな。俺が手綱を引いていないと空間から次元、果てには世界すら燃やすつもりだぞ、おい」

この神には子供がおり、その神の石柱、アーフムⅡザーは何でも凍らせることが出来たという。

ならばその親であるクトウグアがこの世の全てを燃やせないわけがない。

「さてと、じゃあ再戦と行きますか」

にい、と歪められた彼の顔を見た男は、遂に膝が地に着いた。

○SIDE…クギ・スプリングフィールド

しかしクトウグア、って凄いな。クトウグアが燃やすのは存在そのものだ。だから声も燃やすことが出来る。

ん？　なんで声も燃やせるのか分かったかって？　いや、転生者を焼いたときに叫び声がもう、うるさくてうるさくて。

そんなことを思っていたら、声が聞こえないじゃありませんか。いや、火は見えなかったけど凄いな、口がパクパクと動いているのに声は聞こえない。それで俺は何もしていない。

——クトウグア、お前。

って感じで可愛くなっちゃったので、即興ながら柴犬を第五元素で作って、狂気を取り除いたクトウグアをイン。

するとどうでしょう。ワンワン、とすり寄ってくるクトウグアにもう、感激！　かわえー、ネギの次ぐくらいにかわえー（あくまでネギが一番）。

とりあえず、連れていくとして、この焦土をどうしようか。さすがに一日で焦土と化しちゃ駄目でしょう、さすがに魔法世界でも。

ハッ、手加減するのを忘れていた！ 思いつ切りリンチしちゃっ
ていたし。

……次だ、次。次こそ手加減して殺ろう……。

ランチだけど何か？（後書き）

まず一言、戦闘描写え……（泣）

難しいっす、上手く書ける作者様方の脳内はどうなっているんだ……！？

はい、アンケートです。

二つほどあるんですが、

1. どんな転生者と戦ってほしいか

2. 番外編を書くべきか、それとも本編進めるか

です。

注意して頂きたいのが、今回の話で分かった通り金の戦闘描写は酷すぎます。今後はクギ君も手加減するので長くはなると思いますが、まだマシになるかもですが、皆様のご期待に添えるかどうか……怪しい限りです。

ということで、何があっても石投げるなよ！ 絶対投げるなよ！
？（振りじゃないです、本当です）

ということで、もし宜しければお願いします。

勿論感想もお待ちしております。

『教えて、ターモル先生!』 だけど何か? (前書き)

たくさんのアンケートの回答、ありがとうございます! まだや
っているので、どうぞ!

今回は説明パートです。

『教えて、ターモル先生!』 だけど何か?

どうもクギです。ただ今家に帰りました。

「たっだいまー」

「おかえりー、にーたん……にーたん、犬」

「んー? クーのことか?」

勿論クーはクトウグアです。いや、クーってクトウグアのクから
も取ったんだけど、クーってケルト語で犬って意味なんだよ。

……きたんじゃね?

って訳でクーに決定、飼い主権限だ、異議は認めん。

「クー、って名前ー?」

「おう、そうだぞ。ほれ、クーも挨拶」

「わふっ」

うわっ、ものっそい勢いでネギの目がキラキラと……!?

「だっこしたいー」

「い、いいぞ。ほれ」

そういつて渡すと、あ、その抱き方は危ないよ、こう、左手をお尻に添える感じで。

「ああ、お人形じゃないからその抱き方は「おしゃんぽ、おしゃんぽー!」」

……ま、可愛いからいいか。皆、クーに敬礼！（ビシッ。

「お帰りなさい。それで、クギ？ どこであの犬どこで拾ったの？」

「山で」

ごめんなさい、嘘です、作っただです、犬でもないんです。

「や……ま、で？」

「おう、別にいいだろ、そんなくらい」

「だ、駄目よ！ 今度から一人で山に行ったら駄目よ！ いいわね！？ 絶対よ！！」

「ま、ママ、イエスマム!？」

あ、あれー凄い形相で怒られたー。この前までは、

「今日はどこで遊んだの？」

「山で」

「あらそう、どんな遊びをしたの？」

みたいな会話だったのにー？

○

今思えば、あの大静粛から三ヶ月たった。ウェールズの方での生活は大分落ち着いてきたが、学校の教員達——というか村の役員もなんだが——大分慌ただしくなっている。何でも色々大変なことがあったらしい。受験の時、久しぶりに見た爺ちゃんは只でさえ痩せていたのにさらに痩せて、顔の骨が浮き彫りに出ている。

『MM大粛清事件』、つまり俺が起こした『そうだ、復讐しよう』ですね、分かります。

……まさかこんな末端の機関にまで及ぼすとは思わなかった。というか何でこっちまで被害が出てんの？俺は、というかMM警察もだけど魔法世界ではあれだけ派手にやったが、現実世界では一切やっていない、というか——こちら側（現実世界）はそんな汚職とかする余裕がないほど忙しい。まずメガロへの書類提出はいちいちゲートを通らなきゃいけないし、元いた魔術結社の対応や交渉、場合によっては緘滅したりするし、魔法犯罪者の逮捕、なにより『正義の魔法使い』思想が強すぎてもし汚職がバレたりしたら、それこそリンチされてしまうだろう。恐ろしや。

「ていうわけで、なんで？」

困ったときはタモえもん。あ、ラジエルの書があった、うつかりです。

「はあ、こんなになったのはあなたのせいなんですからちゃんと把握しておいて下さいよ」

はーい。

「連鎖的にあって数え切れないほどありますが、主な要因は二つ。まず一つ目、MM警察が旧世界に派遣する人員が割けなくなり、地元組織で対処しなくてはいけなくなったこと」

なるほど。確かにこれは痛い。捜査のプロである警察がいなくなったことで自分たちが動かなくなてはいけなくなった。犯罪者を放っておくのは流石に不味いから最終的に自分たちで動かなくなてはいけなくなってしまう。その中には犯罪組織や、犯罪者で集まった即席のグループなどもあるだろう。即席はまだしも、元から組織として動いていた犯罪者達は逮捕に手こずるだろう。

犯罪者の一番いい例がこの前の男だ（急展開だけど何か？ 前編参照）。普通、悪意を持った人間は警備の人に事情徴集されるんだが。

「二つ目に今回の件での大量の書類や人員の行き来のためのゲートを多用使用したために大量に出来た過剰魔力による旧世界の動物の突然変異」

「は？ なんだそれ、ゲートって月や星の配置、精霊の活動とかそういう自然で出来た魔力をゆっくり吸収して、それが溜まって放出するときの一部の魔力で出来るのがゲートだろ？ 多用も糞もない

じゃ……おいおい、そりゃねえよ？ 俺の考えが正しかったらお前ら、自然の理を崩したんだぞ。さすがにそこまで馬鹿じゃ「私は、反対したんですけどね。この緊急事態ですからいち早く行動しなくてはならない、とのことでMM連合諸国、ヘラス帝国、条件付きでアリアドネーも了承しました」……おいおい、まじかよ」

ゲートに魔力を大量にそそぎ込み強制的にゲートを作るとは現在魔法世界では禁止されている。これは1742年、人工生命ホームクルスを作ったとされ、旧世界、魔法世界問わず有名な魔術名医パラケルススに教えをこいた一人と言われるトレ・Y・プロウムが出した論文、『大量の魔力による生命体への影響』で書かれた内容が関わっていく。

成る程、これでネカネ姉ちゃんが何故ヒステリックな状態になったのが分かった。

「大量の魔力を長期間浴びた、魔力値0，5以下の生命体の魂は変異し、それに伴い体も変化していく……こういう明確な理由があるのに提案して許可を出したのか、魔法世界の馬鹿は……やっぱり旧世界を軽く見る傾向があるよなー、魔法世界は」

「まあそうでしょう。やはり魔法が使えるという絶対的なアドバンテージがあるからでしょう、最大の要因は。しかも魔力が多いと身体能力も自然とあがりますし」

「んー、それが今後の課題か……」

「運良くまだ一般人には被害が及んでいませんし、この短期間ですからそこまで強いものも現れませんでしょう……失礼、会議の時間なので席を外させていただきます」

その一言でこの秘密の授業は締めくくられた。

○

（しかし旧世界を軽く見るのをどうにかしないとな）

あの授業からしばらく椅子に座り、そのことについてずっと考えていた。紅茶は既に冷えており、時計の短針はもう半回転している。

……こんなことになったのも俺がMM元老院を肅清したことが発端だ。勿論そのことに後悔はしていない。

でも、反省点は多い。こういう風になることを予測しておけばよかった、そう思わずにはいられない。

まあ、すでに過ぎてしまったことだ。今回の点を次に生かすか。

「王よ、怠惰な旧支配者を信仰するものが来ました」

斜め後ろにいたベルがそう言った。しかしその言い方だと結構同じ様な種族がいるから悩むぞ。

「皆、同じ様なものです」

さいで。

「これは手厳しいですな、ベルゼブブ殿。おひさしゅうございます、我らを創り我らを導きし我らの父よ」

「確かに久しいな、スマイルズ」

頭を垂れるその男は、背はベルより少し高く、金色に輝く一房に纏められた髪、耳は長く垂れ下がっており、その顔は整えられた美丈夫。

ハイパーボリア人、ロバート・T・スマイルズ。

神になってから1ヶ月立ったわけで、そのときに思いつきで世界を3つほど創った（勿論許可は貰いました）。というか俺、もう根元神だから幼女天使に許可貰うとき「あれ？ あなたもう根元神だから許可なくても勝手に世界を創ってもいいですよ。というか創って下さい」とのこと。なぜ創らなければいけないかというそう言うルールらしい。しかし、時間軸がズレていてイカンな。こっちは2週間しか経ってないのに、向こうはもうウン億年は軽く経ってるし。ゲートに異常は無いんだよなあ（ほぼ一方的なんだが）。

閑話休題。

というわけで彼、その創った3つの世界のうちの『神話世界』、とりあえず俺の知っている世界中の神様を全部入れちゃえっ☆って感じで創ったかなりカオスな世界の神話クトゥルフ・階級中級・種族ハイパーボリア人なのである、ででーん。

しかしハイパーボリア人は凄いね。超 鈴音すら越えてるね、現時点で既に。魔術と科学のハイブリット化の成功は勿論のこと、魂

（偽）の生成、異次元移動、長命化、下級神の隷属化すら出来るようになっていいる。伝承以上だよ、これ。伝承通り蛇人間やヴーアミ族の支配しており、現在の人類を遙かに凌駕する科学技術を持つ半植物態生命体、古のものと現在銀河を賭けた戦争中だと言うこと。いやはや、人間じゃなくても戦争はするんだね。

「それで、スマイルズ。主戦力の卿がここに来ていいのかね？」

しかし威厳を保つためとはいえ、この喋り方は面倒だ。それ以前に俺はまだ三歳児なんだぜ？ 既に神様なんておかしくね？ つーか、この姿で威厳も糞もねえ。

「いえ、あの戦争は終わりましたよ。流石古の者、なかなか手こずられましたよ。しかし既に奴らは我々の奴隷ですよ」

「用件を言え。俺とて暇ではないのだ」

主に旧世界と魔法世界の情勢改善について、あとネギの可愛さについて。

「ええ、そうでしたね。では単刀直入に——氷河期の到来を止めていただきたいのですよ、我が父よ」

やはりそうきたか。伝承ではハイパーボリア人は氷河期の到来とともに滅んだとされている。無論、俺もそうするつもりだ。ハイパーボリア人の技術力を持ってしても不可避な多くの銀河、次元を巻き込む氷河期を。しかもこのときに被害が合うのはクトゥルフ神話内の種族のみ。

これがなければ人間は生まれてこない。人間が生まれなければ神

々の戦いに支障をきたすであろうから。

「無理だ。これは決定事項であり、その世界全ての為だ。しかもこの氷河期はハイパーボリア人を滅ぼし、新たな人類の誕生のために起こること。これがなければ新たな人類は誕生しなくなってしまふ」

ただそれだけ。しかしほんの少し角度がズレた線は延びていくと本来の線とかけ離れてしまふ。そうならない為にも、この氷河期は起こらなければならない。

「それでもです、我が父よ。新たな人類が生まれ、関わる銀河と次元には不干渉になりましょう。ですからどうか、我々に未来を、我が父よ」

膝と額を地面に付け、ひれ伏している。その体は僅かに震えている。彼らが信仰する神、ツアトゥグアからも回避は不可と言われたのだ。ならば残るはただ1柱、俺である。

俺だって滅ぼしたくない。気のいい奴らも多い。友となった者もいる。このスマイルズもその一人だ。

しかし、滅ぼさなくてはならない。ハイパーボリア人という人類がいたという跡だけを残し、その存在をその世界から消さなくてはならないのだ。

……待てよ。世界から消さなくてはいけない。つまり『神話世界』から。

そして今俺が思い悩んでいる問題。魔法世界の持つアドバンテージとの差を無くすこと。

ということとは……。

「スマイルズよ、喜べ。名案が思い浮かんだ」

「!?!? ほ、本当ですか、我が父よ!?!」

「ああ。だが、まだ確定事項でもないし、断言は出来ない。だが一応、委員会にこの案を提出しろ」

——異世界への移住を。

『教えて、ターモル先生!』 だけど何か? (後書き)

ハイパーボリアア〜。

クトゥルフ多いです、この小説。

それとトレ・Y・プロウムに関してはオリジナル設定です。

前書きにもありましたが、アンケートはまだやっているのでドシドシお願いします。

感想お待ちしております。

オホホとの邂逅だけど何か？（前書き）

さて、原作乖離がここから始まる……！！

どうも、金です。

後書きに結構重要なことが書いてあるので読んで下さい。

オホホとの邂逅だけど何か？

「しかし、よろしかったのでしょうか」

右後ろにいるベルが口を開いた。

「ん、何が？」

「いえ、現在地球の地表の殆どに人は住んでいます。例えば地下に住処を作ろうとも、地表には音が響いてしまいますし、海底に作ろうともエネルギーを血眼になって探している人間には近い内にバレてしまいます。しかし、王はこの世界に連れてこようとしておりますでは、どこに」

そう、ベルの言う通りだ。俺はあいつらをこの世界に連れてこようと考えている。それはアドバンテージの差を無くすことにある。

魔法世界は魔法が発達しているが、魔術や科学は発展していない。

型月ではないが、魔法と魔術ははっきりと違う。

一部魔術とは元は同じだが、その大半は違う。既に失われし口伝のみで伝えられていたケルト魔術、五行を用いて符を使い式神を使役する陰陽道、言葉ではなく物に魔術的意味を持たせ科学の元ともなった錬金術、幽霊になった者しか使えない特殊な体系である^ポ騒^{ルターガイスト}霊現象、忍が指で気に意味付けして行使する忍術。これ以外にも多くあり、その種類、その多様性、その方向性は魔法のそれとは正にダンチだ。

閑話休題。

よって、旧世界の魔術結社の能力の増大化、科学の促進化を行うためにハイパーボリア人をこの世界へと呼ぼうとした訳である。

「ある程度だけこっちの世界に送って、他は異界でも作ってそこに住んでもらえばいいし。まあ、アメリカに五年いれば戸籍貰えるし、北朝鮮とかの独裁政権のそこはお偉いさんの1人にちよちよと金を見せれば戸籍ぐらい幾らでも作ってくれるだろうしな——もし邪魔になれば第五元素収束砲の恐ろしさを見せてやんよ——、あとは中東辺りにでも会社を作れば、はい終わり。まあバランスも大事だからな、弱い国にでも作れば、っと。はい、完璧。あとは神様に頼めばいいか」

「そうですか。では、アポメントを取っておきます」

「よろしくな」

○

はい、許可いただきましたー。即答だったね、うん。

「つくっていい」「面白そうだからいいわよー」……全部言っていない」

って感じだったし。

しかし、面白そうだからってだけで許可出しているのかな？　こんな軽くて世界秩序守れているのかな？

「ということだ、今回の案は許可された。委員会にも正式に許可した旨を報告しろ。それと、既に脱出計画は進んでいるな？」

「勿論でございます、我らが父よ！　今すぐにも行動できます！」

「ならば、始めろ」

「ハッ！」

……。

……。

っと、もう行ったな。

「ベルー、茶くれ、茶。麦茶な」

「分かりました、王よ」

いや、麦茶っていいよな、麦茶って。……ウェールズに何で麦茶があるのかは聞かないでくれると嬉しいな。

『こんにちわ、ご機嫌如何かしら？』

突然頭に声が響く。勿論、誰かは分かっているわけで。

『あ、こんにちわ。こっちは結構順調だぞ、神様』

『あら、あなたも神なんだから神様なんて言わなくていいのに』

『いや、一応生きている間は人間ってカテゴリーで。もしくは半神』

『ふーん、そう。まあ、いいわ。別に世間話をしにきた訳じゃないし』

『んで、ご用事は？』

『——依頼よ、クギ・スプリングフィールド君』

○

突如、周りが白くなる。目の前には浅黒く日焼けした肌に、短く切られた黒髪、身長は約180、といった体格のいい男がいる。いや、正確には模写体があるといった方がいいか。

「今回はこの男か。罪状は何だ？」

そう俺がいうと、ぱらり、と紙がめくれる音がした。男の後ろを見れば、神様がいる。

「ええと、旧世界のキョウトにある関西呪術協会への攻撃が原因ね。本来死ぬべきではなかった人間も死んでしまっているわ。正史のキーマンである人間も4人に影響を与える結果になったわ。今回の件

で何らかの形で世界軸がズレるわね……はあ、あれ探すだけでも大変なのに」

右手を頬に当て、ため息をつく神様。

「そいつは大変だな。……んで、目的は？」

「そのキーマンの内、2人に接触を計ろうとしていたわ。……残りの1人は興味なし、もう1人はイレギュラーでまだ見つかってはいないわね。で、一番最後の子はもう正史と外れているわね。魔法がバレたわ。これにより管理神委員会は処刑を決定されたわ」

しかし、関東呪術協会か。まず、接触を計ったのは近衛 木乃香、桜咲 刹那、興味なしが近衛 詠春だろう。しかし、そのイレギュラーには興味がある。

「んで、そのイレギュラーって何だ？」

「雪広 あやか、っていう名前よ」

○

雪広財閥。

麻帆良学園都市の成り立ちを語る上では必ずと言っていいほど外せない単語だ。

雪広財閥の始まりを辿ると、そこには妖怪などを退治する魔術結社、通称・退治屋からだと言うことが分かる。

竜穴の上に育ち、そこから溢れ出す魔力を当てられて育った『神木・蟠桃』は、やはり周りの生物や、魔素に影響を強く与えた。そうなれば必然的に魔獣や妖怪は出てくる。

そこに管理を命じられ来たのが、青山家の分家の一つ、雪広家だ。

雪広家は長年に渡り、『神木・蟠桃』を己の欲望のために使おうとする者達からの守護と、『神木・蟠桃』に影響され出てきた魔獣、妖怪の退治をしてきたのだ。

だが、明治時代にはいると魔の類のものを否定的に考える人が多くなる。そして、雪広家が持つ広大な土地を狙う国、大企業が出てきたのだ。

味方していた現地の住民も時代の流れには勝てず、最後は四方八方敵に囲まれてしまったわけだ。

雪広家は考えた。どうすればこの木を守れるのだろうか、どうすれば広大な大地を守れるのだろうか。

そうして出来たのが雪広社である。そして『神木・蟠桃』の力もあったか、忽ち大企業、その果てには財閥となった。こうして、この土地と『神木・蟠桃』を守ることに成功したのである。その時、記念として私立・麻帆良学校を建設したのだ。

しかし戦後、雪広家にまた危機が訪れる。

魔法協会が土地を求めに来日。そして、『神木・蟠桃』並びにその周辺の土地を要求したのだ。

このことに頭を抱えた雪広家。その土地は京都御家から一任された、『神木・蟠桃』がある重要な管理地であり、自分勝手に明け渡しはならないのだ。しかも戦後と言うこともあり（勿論裏では魔法、魔術による戦いもあった）、戦える力はない。

雪広家は当時の京都御家の長、近衛 近右衛門に助けを乞いた。

その救援に答えるべく近衛 近右衛門はすぐさま麻帆良へと足を向けた。

そしてその翌月、正式に麻帆良は魔法協会のものとなった。

この時結ばれた条約が2つほど。

『これ以上日本国内の土地の無償要求はしないこと』。

『この魔法協会の初代の理事を近衛 近右衛門に任命すること』。

これにより、日本は魔に関しては支配されずにすんだ。

しかし、これに怒ったのは京都御家を始めた雪広家を除いた日本国内の魔術結社であった。

自分達は勝てる、なのに何故屈したのか、何故その代表者になったのか。そう怒ったのだ。

勘違いも甚だしい。ただでさえ数で負けているというのに、戦後、しかも敗戦国であり、弱っているというのに。

ただ、雪広家は商売で培った観察眼、並びに自分が管理している土地でのことなので正しく見れたのだ。

そして、近衛 近右衛門は日本最大の裏切り者、と称されたのだ。

この時、『神木・蟠桃』の地下にゲートが造られた。

そして大量の人間が来ても怪しまれないように、麻帆良学園都市が出来たのであった。この時のスポンサーが雪広財閥だ。

現在の当主である雪広 礼徒^{あやと}は神鳴流の師範代でありながらも、魔法使いでもあるという、究極技法の使い手だ。まほネット上でも多くのものを出品しており、裏では呪物や魔法具などといったものまでも販売を行っており、その質は一級品。魔法世界にも店を出しており、着々と財閥を大きくしている。

要は天才。

結婚相手は確か、MM元老院（常識人）の一人娘だ。

魔法世界に行ったとき、ちょっと見たけどかなりのベッピンさんでした。

……憎しみで人が殺せたら……！？（人のことは言えない…ラジエルの書ツツコミ機能）

閑話休題。

「へえ、なんでそんなところに？」

「当主同士で話し合いがあったのよ。その時一緒に遊んでいたって
いうこと」

「ふーん（俺も混じらせて貰おうかな、勿論秘密の会合に）、現在
その接触を計られた2名は？」

しかし、漫画内では3人の面識は麻帆良が初めて、のはず（原作
知識が薄れてきているとです）。こういうイレギュラーがあるって
ことは、雪広 礼徒が転生者か、もしくは書かれていないだけで実
はあったことか。まあ、今はどうでもいいか。

「今は戦闘中——安心して、時間は止めているから——だから避難
しているわね。でも、あやかちゃんだけ
ハグレちゃったようね。それで魔法戦を見ちゃった、ということよ。
それと彼ら、今負けているようね」

「そうかい。それじゃあちょっくら行ってきます」

「行ってらっしゃい」

そして、空間から出た。

○

「ベル、用事が出来た。ネギの護衛よろしくう」

「いってらっしゃいませ、我が王よ」

さて、行きますか。そうして、京都へ空間転移した。

○SIDE…三人称

「へへっ、よええ！」

ブウン、と音を立て振り被られた拳の先からは魔力と気で練られた光が放たれる。

「くっ」

そう憎々しげに口から息がこぼれながらも光をいなししているのは、片手に野太刀を持ち浅葱を着ている近衛 詠春。

「何が目的だ、襲撃者」

冷静に男に問う男は、両手で三尺三寸もの刃渡りの野太刀を持つスーツ姿の雪広 礼徒。

「はっ、どーでもいいだろ、そんなことっ！ それより早く、くた

ばりやがれ！」

そしてそう反論して、またも光を放つジャージ姿の男。

辺りにあったであろう建物は既に瓦解しており、その中には血を流し倒れている者、負傷者に符を張って必死に治療している者、もう人の形をしていない物なども見受けられる。

「あの襲撃者は戦い方は荒いが、なかなかの魔力と気の量だな」

「何を冷静に判断している！ いいから早く倒せ！」

「む、冷静に判断してから倒しにかかった方が早く倒せるぞ」

「い・い・か・ら、早く戦え！」

……仲間割れモドキをしながらも、息のあったコンビネーションで追い込んでいく2人。

「ちっ！ しつけない、この！」

男は高く飛び上がり、魔力と気を練り合わせる。そして宙には大量の光、そしてその光はまるで流れ星のように地に叩きつけられた。

バゴオオオオオン！！ と爆音をたて、それに伴い爆風が吹き荒れる。

「きゃっ！」

そう可愛らしく幼い悲鳴が聞こえ、少し離れた茂みから何かが飛

び出る。

「……なんだ、あれ？」

その方向を見れば、幼い金髪の少女が茂みから姿を現した。

「あ、あやか！」

そう叫ぶのは先ほどまで冷静にいた雪広 礼徒だ。

「お、お父様……」

それに気付くと男はニヤリと顔を歪めた。

「俺をここまで足止めた罰だ、バーカ」

「な、やめろお！」

男の意図に気がついたのか、礼徒が悲鳴に似た声を上げる

「誰が止めるかよ、死ね」

そして、その方向へと拳を振るおうとする。

「あ……！？」

声を掠らせながらも、何とか出た声。そして、気が付いたのだ、
今、私はこの男に殺されるのか、と。そしてたぶん自分は死んでしま
うだろう、と。

幼いながらも、頭がいい故の弊害。未来が見えすぎ理解してしまうのだ、良いことでも、悪いことでも。

そして、男の拳は振るわれた。

「あやかあ！」

礼徒の悲痛な叫び。しかしその叫びにここでは意味は成さない。

「た……助けて……！」

何とか捻り出た声の内容は、救済を求める声だった。

しかし、その声の返答は無い……はずだった。ここにその願いの意味を成した。

「よろしい、ならば卿を助けようではないか」

○SIDE…雪広 あやか

掻き消える光。その代わりに突如現れた黄金。その身長、その体型は正に人体の黄金率。身に纏うマントは風に揺れる。その手には月明かりに輝く黄金の剣。

その姿に視線が、心が、魂が惹かれた。いや、違う。自分の持つ総てが惹かれている。

自分は高貴な生まれだと信じていた。この世で一番、とは言わな
いがそれに近いものだ。

ああ、私は見つけたのだ。その一番を。

ああ、私は何と傲慢なのだろうか。

この人の足下にも及ばない。

否、この人の背中すら見えない。

否、この人と立っている場所から違う。

否、否、否。比べることすらおこがましい。

彼は剣を掲げた、高く、高く、高く。

刃は月光を反射し、彼の端麗な顔を淡く照らした。

「それでは、狩りを始めようか」

オホホとの邂逅だけど何か？（後書き）

金はDIES厨。

オホホに魔法バレand旗建て。SS内ではこのSS初なのではなからうか。

さて、重要な発表です。

金、時間がないので土曜日更新できません。

金、「隊長、弾薬切れましたあ！」^{ストック}「なんだとう！？」なので日曜日は更新しないで書き溜めます。

感想は返信します、というか出来ます。

ではここらで幕引きとさせていただきます。

感想お待ちしております（アンケート続行中ダヨ！）。

狂人と鬼神だけど何か？（前書き）

どうも、金です。読み方はキムでもキンでもナイヨ！

九話目投稿です。

ではどうぞ。

狂人と鬼神だけど何か？

「さて、貴様の処刑は確定された。喜べ、この私が無滑稽な貴様を滑稽な死体に作り替えてやろう」

「……てめえ、誰だ？」

腹だたしいが、この男の疑問はここにいるものの共通した疑問なのだろう。

あの姿、正真正銘ラインハルト・ハイドリヒではないのだろうか。しかし、では何故その手に持つものはロンギヌスではなく、剣なのだろうか。

私の持つ能力の一つ、『ステータスの可視化』を使い、彼を見ようとした。

頭痛。

彼を見た結果が、これだった。最早全てが文字化けしており、読み取することは不可能。こんなこと、神以外では初めてのことだ。

……ならば彼も又、神だということか？

とりあえず、分かったことは1つ。

我々は彼の足下にも及ばないのだろう。

そう考えを巡らせながら、彼らを見た。

「ふむ、私か。そうだな、——貴様を殺すもの、それで十分だろう」

「けっ、やれるもんならやってみな！」

そういつて、彼は宙にまたも大量の、しかし先ほどの比にならないくらいの、光を作る。

「死に晒せええ！」

落ちていく大量の光。しかし、黄金の彼はそれを一瞥して、嘲笑した。さも、馬鹿を見たと言った感じに。

「ただただ弾幕を作ればいいというわけではないぞ、力に溺れている阿呆が」

高く掲げられていた剣を、軽く振るう。そしてそこから発せられるは白。ただただ、発光もしない。

まるで空間に絵の具を塗り付けたようなものだ。

「ちっ！」

多くの光が、その白の奔流に巻き込まれ、消滅する。男も何とかすれすれで回避に成功した。

「ほう、今のを避けるか。来い、揉んでやろう」

ニヤリと口の端を歪ませ、挑発した。

さすがに反応しないだろうと思いきや、男は顔を真っ赤にしてプルプルと体を震えさせていた。

「上っ等だ、この野郎……！！ 感卦法！」

右手に魔力、左手に気を集め、掌を合わせる。突如、彼の体の周りには魔力と気の練り込まれた力が纏われ、形を成していった。

それは傷だらけの黒いフルプレート。体からは黒い霧のせいだが、その姿ははっきりとは見えず、滲ませている。

「バーサーカー……か」

「勿論狂気汚染されてねえし、能力もそのままだぜ」

「ふん、来ないのか？」

「今すぐそっちに行ってやるよ！」

その両手にはいつの間にか握られている、淡く発光している2振りの剣。

その剣は上段からその身を食わんと襲いかかる。しかし、右手に持つ剣でその攻撃を弾く。

「はっ、軽いぞ、犬畜生が」

「これでもそんなことが言えるのかよ!？」

黄金の男の真上には巨大な剣、いや剣といって良いのであろうか。

その大きさは手に持っている剣をそのまま何十倍と大きくした様で、そのまま垂直に落ちていく。

「な、あれはラカンの……!?!」

隣で詠春が驚いているが、仕方がないだろう。あれは彼の戦友の魔法具、『千の顔を持つ英雄』の能力によって作られた巨大な剣、『斬鑑剣』なのだから。

その剣に目を捕られている内にも、男の猛攻は止められておらず、その剣戟に一片の隙もない。

「……成る程、先程まで私達は手加減されていたのか」

二人の戦いを見て、そう思わず呟いてしまった。先程までの戦い方と今の彼らの戦いを見てそう思ってしまう。

そのことにすんなりと理解できた事に少々驚きながらも、納得できる自分がいる。

なぜなら私達二人とあの男を比べても、段違いなだけなのだ。

あの男は、現れてから一步もその足を動かしていない。

余裕の笑みを浮かべながら、1振りの剣で2振りの剣をいなし、その被害を後ろにいる私の娘に与えないように。

「……私もまだまだだな」

そう呟いた瞬間、あの宙に浮いた巨大な剣はまるで桜のように散っていた。

○SIDE…三人称

「貴様をただの馬鹿と思っていたが、少々考え直さなくてはな。成る程、『千の顔を持つ英雄』で作られた剣を『一騎士は 徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）』で宝具化、か。良好な組み合わせだな」

数多の剣戟を合わせている中、黄金の男は口を開く。

「さらには『無窮の武練』により経験を補っているのか。面白い、ここまでの者は今までいなかったな」

そう語りながら、その剣を振るう速度は着々と上げていく。フルプレートプレートの男はそれに必死になりながらも縋りついていく。

「だが、残念ながら貴様には欠点がある」

剣と剣がぶつかり合い、剣から剥がれた鋼が跳ぶ。

「まず一つ、やはり経験不足だな。格闘については整いすぎていて次の行動が視える」

黄金の剣が、左手に持つ剣を砕く。

「次に、決定打がない。あるとすれば、
『無アロンドイト毀なる湖光』位しかないだろう」

次に、右手にある剣を壊す。

剣を創造しようするが、間に合わない。

「それ、詰みだ」

左腕が、宙を舞った。

○

その男は呆然としていた。

今、何があった、と。

瞬時に左肩から激痛が走る。

「ガアアアア！！」

口を大きく開け、叫ぶ。

ねば、人は争わなかった！ 恐怖せねば、人は分かり合えなかった！ さあ、恐怖しろ！ そして踏み出せ！ その恐怖を糧に行動し、進化し続けろ！ されば私を殺せるやもしれんぞ！」

ばっ、と6対の羽が彼の背中から現れる。目の前の生き物は、それに相当すると判断したからである。

「グオオオオオ！」

黒い魔力が、辺りにまき散らされる。それは、本山を飲み込むほどに。

○

ドクンッ、と胎動の音が聞こえる。しかし、その音は誰も聞かない、聞こえていない。

ドクンッドクンッ、次は立て続けに聞こえる。

ドクンッドクンッドクンッ。

あの黒い魔力はレジストさえすれば、防ぐことは可能だ。

しかしその魔力に当てられたのは、何もレジストすることができないだけの生き物な訳でもない。

草木は枯れ落ち、虫や逃げ遅れた動物たちは既に死に絶えている。
だが、魔力を纏っているのにレジストしないものであったならどうなのだろうか。

活性化させるのだ、その身に纏うものを。

戦場から少し離れた湖の中心には、巨大な要石が置いてある。

その要石にピシリッ、と罅が走る。そのまま罅は大きくなり、そして――割れた。

『グオオオオオオン！』

目覚めの叫びが、京都に響きわたった。

○SIDE…雪広 礼徒

『グオオオオオオン！』

「今のは……っ!？」

近衛 詠春がその叫び声を聞いて、さも有り得んと言った表情に変わる。

「? 知っているのか、詠春？」

確かにこの叫び声は不味い。だが、これほどの驚愕の表情は彩りはしないだろう。

「あ、ああ、こいつは……」

突如、叫び声が響いた方向に光の柱が出来る。そこには、巨大な異形。

色は発光する白、前後に顔があり、腕と足も前後に一對ずつ。

「リョウメン、スクナノ……カミ」

そう呆然と出された声に疑問を抱きながらも、あの大鬼神を見る。

リョウメンスクナノカミ。またの名を両面宿儺。

仁徳天皇の時代に現れたとされる異形の人。

『日本書紀』では飛驒の国で民衆を苦しめていたのを武将・武振熊命に退治されたとされている。

だが飛驒国、美濃国では信仰されており、その多くの古寺の開基とされている。

現在では結合双生児なのでは、という考えもあり、決して有り得ない存在であるわけではない。

しかし何故、飛驒国で現れたものがこの京都で封印されているのか。簡単な話、京都で封印した方がメリットが多いのだ。

1つ、もしかしたら飛騨国、美濃国を中心に出来た魔術結社（これは実際の所、別に他の魔術結社でも可能性があるが、もっとも可能性が大きいのがその辺りの魔術結社なのだ）が封印を解く可能性がある。それ故に警備がしっかりしており、仏僧や——息を潜めているが——陰陽師が多い京都に置いた方が対処しやすかった。

2つ、封印の管理がしやすい、先程言ったとおり仏僧、陰陽師が多いので封印に異常が見つかったときに封印の掛け直しや原因の追究がしやすい。

3つ、信仰している者たちから離すことが出来る。これによって両面宿儺の強化を抑えることが出来る。

他にも政治的取引や宗教内の取引があったが、これが主な要因だ。

「出現の速度が速い！？ 馬鹿な、こんな短時間で現界出来ない、出来るはずがない！」

「しかし、現に現れている。主な要因は、あの襲撃者、か。原因はあの黒い魔力だろう。それ以外にはあの黄金の男。だがその可能性は低いな。もしそうなら真っ先にあの湖へ足に向けていただろうしな」

カチャツ、と手に持つ野太刀、『備前長船長光』が音を立てる。

「……行くのか？」

「娘がいる。只でさえ危ないというのにアレがこっちに来たら更に危なくなる」

「——はあ、全く私の周りには馬鹿しか寄ってこないのか？」

隣にからも鉄がぶつかる音がする。

「お前も行くのか？」

「私はこの長だ。私が率先して行かなくては どうする？」

「ふん、私が動かなかったら行かなかただろうに」

「私が行こうとしたらお前が突然立ち上がったんだろうが」

嫌みを言い合いながらもその視線は巨大な異形。

「行くぞ、腰抜け」

「分かっている、せっかち」

……先ほどの言い合いとは逆の立場になっているな。

狂人と鬼神だけど何か？（後書き）

微妙ですね、ええ分かっていますよ。

あ、前話の題名変えさせて頂きました。

だって、オホホの出番ないじゃん……。

ということで、ここらでお開きとさせていただきます。

感想お待ちしております。

恐怖する狂人だけど何か？（前書き）

返ってくるテストに狂って叫んで泣いて笑っている金です。

ははは、金、進学できるかなあ……？

ガチ目に悩んでいる中、10話目投稿です。

恐怖する狂人だけどこか？

「シッ！」

「ガァ！」

黄金の男の背中から生えている6対の翼から羽が舞う。

黒い化け物の、先程まで無かった左腕が生えている。

2振りの剣は振るい合い、弾き合い、また振るう。

その1つ1つで衝撃が風を巻き起こし、またその1つ1つで地面が割れる。

黒い剣戟は空間を塗り潰し、金の剣戟はそれを消し取る。

横に振るわれたら、縦にして。縦に降ろされたら、横にして。

黒に手数で攻められ、防戦一方に見える黄金。

しかし、その雰囲気は対照的だった。

黒は速く倒さんと焦燥に駆られ、黄金は永く楽しもうと余裕を持つて。

「ははっ、そんなに急ぐな！ もっと楽しもうではないか！」

「アッアッアッアッアッアッアッアッ!!!」

その言を否定せんと、大きく声、否すでに声と言えるものではない音をあげ、強い一撃を振るう。

しかしその一撃をいなし、急所に狙いを付け、突く。

正に空を斬る音をあげ、その喉を掻っ切らんと襲う。

また同じく化け物はその一撃を首を横に曲げるにより避け、脇腹を突き刺そうとする。

「ふはは、いいぞ！ その調子だ！」

左手で弾き、左肩へと剣を振り降ろす。

左半身を後ろに1歩下がり、その剣を持つ右手首を掴む。

「む」

ググッ、と握った手首を壊そうとさらに強く、掴む。

「ちっ」

1つ、舌打ちを打ち、腕を横に振り手を引き離す。

瞬間、大量の剣が2人の間に出現する。

（こいつはやベェー！）

左腕を前に突き出し、襲いかかる剣を防ぐ。

ガガガガッ！ と音をたて、何とか防ぐ。

ようやくあの余裕が無くなった、そう言うかのように鎧が笑うように歪む。

剣が消える。自分を守っていた盾は、先ほどの攻撃で壊れかけていた。

砂煙が消える。目の前には、黒い魔力を圧縮した、球体があった。

「なっ！」

思わずあげてしまう驚愕の声、まさか本能に身を任せているというのに考えているのか、と。

「シ……ネ……ッ！」

奴が撃つは、黒く禍々しい俺を殺すための一撃。

俺が突き出すは、半壊し脆くなった護るための盾。

衝突するは、あまりにも人を殺すには強すぎるものと、あまりにも人を護るには弱すぎるもの。

黒が白を一塗り潰す（蝕む）。

黒き魔力で出来た砲撃は白い魔力で出来た円楯を飲み込む。

そこに拮抗は無く、なす術なく喰い荒らされる。

その現実を防ぎようはなく、避けようもない。

狂喜に歪んだ兜に、失態に歪んだ顔。

黒は黄金に襲いかかる。いくら彼でもこれに中ったら無傷とはいかないだろう。

しかし瞬間、黄金は笑う。

「面白い、ここまで追い込んだ卿には敬意を払わなくてはな」

——美しき呪われの三姉妹は

Sch?ne Gorgons—Schwestern

彼の美しき戦女神に呪われん

Es wurde von sch?nem Athene
verflucht

末の髪がたいそう美しき処女は

Medusa Haare sind sehr sch?n

その美しき髪を醜き蛇と成さん

Ich machte das sch?ne Haar
einer h?lichen Schlange

そして 英雄に首を落とされん

Und ich wurde von Perseus
angez?ndet

呪いし戦女神は その首を持ちて

A t h e n e , d e r e s v e r f l u c h t e
M i t d e m H a l s

持ちしその楯の中央に据えんこと

I c h r e p a r i e r t e s i m Z e n t r u
m v o m S c h i l d , d e r d a u e r t e

「我が身を護れ！ 『一全てを石に成す戦女神の楯』^{アイギス}！」

現れたのは、先ほどの物の一回り大きい円楯。

だが、その中央には干からびた首がはめ込まれていた。

その首の髪の毛からは蛇が喉を鳴らして化け物に向かって威嚇している。

そして楯に当たった瞬間、黒き一撃は灰色の石になった。

「アイギスの楯、その名を一度は聞いたことはあるだろう……いや、今の卿はそんなことを語ることも出来んか」

アイギスの楯。

ゴルゴン三姉妹の末の妹、見た人全てを石に変える能力を持つメドゥーサの首がはめ込まれたとされる女神アテネの所有する楯（楯以外にも胸当てと言われる説もある）の一つだ。

女神アテネは知恵・美貌の神とされているが、武器や防具と言った物とも関係深い神である。

彼の女神の父はゼウス、母は巨人の一族、ティタン族の知恵の女神メティスであった。

ある日、ゼウスは「メティスが生む子は、父より強力になる」という予言を聞き、メティスが妊娠するとすぐさま彼女を飲み込んだ。しかしそれ以来ゼウスは頭痛に悩まされ、遂には鍛冶の神へパイストに頼んでその頭をかち割った。すると、そこから鎧兜を着た美しい娘が飛び出てきたという。

そう、それがアテネの誕生であった。

ゼウスは生まれたからには殺せもせず、1つ贈り物を渡した。

その名もアイギス。

元々は神の防具であり、その時点でかなり強力なものであったのであろう。しかし、今に伝わる最強の楯はこれより後に出来る。

アテネに呪われたメドウーサはその後、リビアの荒れ野へと身を隠した。

しかしセリポス島の王に退治を頼まれアテネの知恵を借りたペルセウスに退治される。

その後、その首から飛び散った血から生まれたペガサスに乗り、アテネの元へと首を捧げたという。

そしてアテネはその首を自分が持つ楯、アイギスへとはめ込んだという。

その力は死後にも失われていない見た物を石にする力と、元々持ち合わせていた頑丈な防御。

正に最強の楯といえよう。

「さて、この戦いもうそろそろやめとしよう。勿論、この私の勝利でな」

黄金は楯を左手で持ち、その楯を化け物に見せつけるように前に置く。

瞬間、化け物の動きが止まった。

別にアイギスの能力で石になったわけではない。

別に敵の行動に身構えているわけでもない。

プレッシャー。

そう、途轍もないプレッシャーに押しつぶされようとしている。

本能で動いていたから、逆に分かる。

あいつはヤバい、逃げろ、と。

だが、そのプレッシャーで体が強ばり、動けないでいる。

汗が絶えず溢れる、指一本動かない、息をするのすら苦しい。

ガクガクガクと体を小刻みに震わせ、手に持っている剣を落とした。

心が恐怖に支配され、それに考えが遮られ、行動が制限され、全てが目の前の黄金に塗り潰される。

膝が地に着く。前のめりに倒れようとするのを手を着いて防ぐ。

ポタ、ポタ、ポタ、と地面を滝のように溢れ、流れる汗で濡らす。

剣はすぐ手元にある。

掴み、対峙しなければやられる。

そんなことは分かっているのに、分かっているはずなのに、掴むことを諦める。

無理だ、こいつに勝つことは。

無理だ、こいつに傷を付けることは。

無理だ、こいつに敵対することは。

無理だ、こいつの目の前で生きることが。

そんな考えに行き着いてしまう。

正に恐怖。

彼が2度目の人生で初めて感じた感情だった。

だが、そんな彼にも^{チャンス}機会が訪れる。

○

ズゴオオオオオン！ とこの2人の近くの森の木々が宙に飛ぶ。

「くっ、止められない……！」

「何なんだ、奴は」

そこから現れるのは2人の剣士と1つの巨大な鬼神。

魔を討つために創られた剣術、神鳴流。

それが魔の類ならば、その総てを切ることが出来る。が、この状況を見るとそれを疑いたくなる。

体中に——それこそ命に関わる物はないが——夥しい傷を作っている2人と、その体に傷1つ無い異形。

しかも宗家青山家と神鳴流の師範代の2人ともが神鳴流奥義の全てに通じているというのに、その異形からは斬られた気配がない。

「くっ、前に戦ったときよりも強くなっているぞ！」

「ふむ、なかなか興味深いことだが、ゆっくり視ることは出来ないか……！」

詠春が剣を振るう。

「斬魔剣・弐の太刀……！」

魔を調伏する剣技。だが、その剣技を高速で回避さ………れる。

「あの図体でなんていう速度だ、化け物め！」

そして、あの2人の元へと戻ってくる。

そして黒いナニカが動いた。

○SIDE…黒いナニカ

コワイノハモウイヤダ。

コワイノハモウイヤダ。

モットツヨクナリタイ。

チカラガホシイ。

チカクニ3ツツ、チカラガキタ。

ホシイ、チカラ。

タベレバ、ツヨクナレルカナア？

○SIDE…三人称

黒が、リヨウメンスクナノカミに襲いかかる。

リヨウメンスクナノカミはというと、まるで蠅か何かを払うように手を振る。

だが、それを回避する。

そして、黒がリヨウメンスクナノカミを喰った。

「「なっ！」」

驚きの声をあげる2人を余所に、黄金はそれを睨みつけるように見る。

「ほう、遂に妖の類に成ったか」

『グアアアアアア！』

悲鳴を響かせるリヨウメンスクナノカミ。それを構わずに喰う黒。

その一口一口が凄まじく大きく、すでに頭と右半身がない。

3秒、その3秒であの巨体を全て喰らった。

そして、黒が変化し始める。

恐怖する狂人だけど何か？（後書き）

詠唱が……orz。

今回クギ君使った武器？ 防具？ に関しては今後の更新で説明
させていただきます。

さてと、金、死ぬほど眠いのです。

と言うわけでお休み……zzz

感想お待ちしております……zzz。

滅するけど何か？（前書き）

リア充爆発しろ（挨拶）！ 金です。

先日、某大手ハンバーガーチェーン店に友人と行った時、しばらく店内で食べながら駄弁っていると、他にも空席があるというのにわざわざ隣に座ってきた男女二人。

ただの友達かと思いきやカップルで、イチャツキヤガリマシタ。

勿論店を出るときに「「リア充爆発しろ！」」と友人とシンクロ。

こんなんだからリア充になれないんだと反省しながら、激しい嫉妬だからしょうがないやと開き直る金。

……愚痴ってすみません。では11話目です、どうぞ。

滅するけど何か？

まず、兜から2本の角が突き出る。

その瞬間、背を突き破り、何かが現れた。

現れたのは一対の鎧の腕の部分。

だが、鎧というには生物的すぎた。

血管が鎧から浮き出ており、脈をドクン、ドクンと打っている。

それに伴い、体中の鎧から血管が浮き彫りに出ており、同じく脈を打っている。

「カハアアア……」

一息吐けば、口からは白い煙が立ち上る。

外気はそれほど寒くはない。

黒が途轍もなく熱いのだ。

遂には鎧からも白煙が立ち上り、黄金を睨んだ。

先ほどまで正面切って見れなかったのに、黒はちゃんと黄金を睨んでいるのだ。

「クククッ、言ったであろう？ 恐怖を糧に進化し続ける、と。今、正に卿は進化した。恐怖を糧に行動し、進化した。喜べ、卿。私を殺せるやもしれんぞ？」

黄金は腕を広げ、そのことを喜ぶ。

もしかしたら殺されるかもしれないというのに、その顔には笑いがあった。

「もうやめよう、と言ったが撤回させて貰おう」

では、存分に楽しもうではないか。

○SIDE…クギ・スプリングフィールド

あの3人には逃げて貰った、というか逃げろって命令した。

詠春だけは何だか言っていたけど、足手まといっていったら渋々ながら逃げた。

しかし、面白くなってきた。そりゃリミッター（自分で掛けたもの）を外したら瞬殺だけど、今の俺なら殺される可能性はある。

舌を使い、乾いた唇を濡らす。高まる鼓動を押さえつける。頭の中では本능が警報する、リミッターを外せと。

それぐらいの奴なのだ、この化け物は。

「名実共に化け物になったのだ。型にはまった戦いや、つまらん遠慮はいらない。その全ての技を持って全力で来い」

化け物に向かって、そう言い放ってやった。

○SIDE…三人称

最初に動いたのは、黒い化け物。

その4つの手には、それぞれ黒い剣が握られている。

まずは突き、横払い、袈裟切り。

その全てを黄金は左手で持つ『一全てを石に成す戦女神の楯』アイギスで防ぐ。すると、その楯に触れた3本の剣は灰色の石となり、砕け散る。

その隙に黄金の剣で一突き。

だが、攻撃していなかった剣でそれを防ぐ。

黄金から生えている6対の純白の翼の先には魔力で出来た金色の球体。

「もう一度この色に塗り潰されろ！」

球体からは12の魔力の奔流。

それは一斉に黒の化け物へと襲いかかる。

しかしその全てが剣に防がれ、霧散される。

「成程、マジック・ジャマー魔素障害か。何故そんな能力があるのかは謎だが、楽しめるな」

防がれてもなお余裕の笑みを浮かべている黄金を見て、さらに一撃一撃を重くしていく黒。

享楽に身を浸かり、楯を使って防ぎ剣を振るって攻める黄金。

4本の腕を自由自在、縦横無尽に操り防ぎながら攻める黒。

人の域を出ている2人は化け物と形容するのがふさわしいが、誰もそんなことを言えないであろう。

その戦いは美しく、匠による1つの芸術品とも形容できるからだ。

一瞬はその時しかなく、一剣戟は一回しかないのだ。

血肉が踊り、興奮が高まる。

歓喜の笑みを、狂喜の笑みをそれぞれ浮かべ、その手を、腕をさらに早く動かす。

「かはつ……！」

黄金が、思わず口から笑い声を漏らす。

「ぐっ……！」

黒もまた、喜びを音で表している。

「くははっ……！」

「ア
ア
ア
……！」[illegible][illegible]

共に笑いをあげる。その間の攻防は緩むどころか、より一層激しくなる。

「面白いなあ、卿もそう思うだろう！ この命を懸けた戦いに！ 攻防がせめぎあう戦いに！ 隙を見せたら死ぬ戦いに！ なんて面白いのだろうか！ なんて楽しいのだろうか！ この本能のままに動くこの戦いに——っ！」

その黄金の問いかけに答えるように黒もまた、強く打つ。

その2人に限界はない——はずだった。

「ッ!？」

「何だと? もう時間切れか」

黒の3本の腕が霧散する。まるで元から無かったかのように。

黄金の翼と楯が霧散する。まるで終わりの時が来たように。

「すまん、リミッターに限界が来たようだ。卿もまた、その体を保つのは無理なのだろう」

「……………」

無言。だが、その雰囲気は肯定を表していた。

「言おう。進化した卿に敬意を表して、我が力の一端を見せよう」

——私の脇腹に槍が刺される

Ein Speer wird von meiner Seite gegeben

救いの時だ 我が兄弟たち

Es ist Zeit der Hilfe Mein Bruder

我が血はその地に流された

Mein Blut wurde in den Boden entwisst

我が肉は人の子に突き破られた

Durch mein Fleisch wurde vo
neinem Kind durchgebrochen

泣くな 嘆くな 我が兄弟たち

Weinen Sie nicht Trauern S
ie nicht Meine Bruder

その死は悲しくなく喜ぶものだ

Ich bin nicht traurig und b
in mit dem Tod zufriede

三日後 私は墓の岩を割り現れる

Drei Tage später Ich brech
eden Stein vom Grab und ersch
eine

怖がるな 恐れるな 我が兄弟たち

Haben Sie keine Angst Habe
n Sie keine Angst Meine Bruder

私は生き返った 我らの父を信ぜよ

Ich erhole mich Glauben S
ie unserem Vater

主の御使いを率いてこの地に立った

Ich stand auf diesem Boden
mit Mikhail

さあ 12の使徒よ 我が復活の時を喜べ

OK, es ist 12 Apostel Seie

n S i e m i t Z e i t m e i n e r W i e d e r b e
l e b u n g z u f r i e d e n

永劫の救いを 今ここに A M E N

D i e H i l f e d e r B e s t ? n d i g k e i t

J e t z t h i e r A M E N

「汝に救いの手を差しのべん！ 『一神の血を滴らせる白き槍！』」
ロンゴミアント

持っている剣の形状が一変する。

その手には刃がまるで大剣のように大きく、白く長い柄の槍。

先端は赤く、その刃は黄金に輝いている。

同調するように彼の周りの空間が光り輝き、その輝きは全てのも
のを照らした。

ロンゴミアント。

別名・ロンギヌスの槍。この別名の方が広く伝わり、有名なのだ
ろう。

この槍は、彼の救い主イエス・キリストの脇腹を刺したとされる
2人の兵士の内の一人、ロンギヌスが持っていた槍だ。

このロンギヌス、実は盲目であった。しかし、槍を刺したときに
滴り落ちた血が目に入り、視力を取り戻したという。そうして、彼
はキリストを信じるようになり、洗礼を受け、聖ロンギヌスと呼ば
れるようになったという。

このロンゴミアントはアーサー王の聖杯探求の際にも円卓の騎士達の目の前に表したという。

その伝説の白き槍を黄金が持ち直し、まるで投擲するような体制をとった。

「この一撃で卿を葬ろう。喜べ、この一撃で屠るのは卿が初めてだ」

そしてこの一撃でその罪を洗い流そう。

そして、投げられた。

○SIDE…???

(くそっ、一体何なんだよ!?)

空高くから見下ろした関西呪術協会の総本山はその美しい光景を無惨なものへと変わっていた。

沢山の鳥居が立ち並ぶ長い石階段は押し潰され、荘厳なる多くの屋敷は瓦礫と化し、囲っていた多くの木々達は根本から引きちぎられていた。

「くっ、まさか敵襲か……!?!」

瓦礫の所々には戦いの痕が見える。

逆にそれくらいしかないだろう。

その途中、黄金が見える。

その姿は見たことがなく、荒々しくも美しかった。

だが、敵であろう。

雑念を棄て、腰からかけているその刀を引き抜く。

「雷光剣！」

気で出来た雷撃を、その黄金へ中てた。

滅するけど何か？（後書き）

感想お待ちしております。

鍛えるけど何か？ 前編（前書き）

どうも、金です。

遂に不定期更新のタグの本領発揮ですね（おい。

スランプです、スランプなのです。

まず一言、すみません。

今回は短いうえに、クオリティーがヤバいことに（ガクガクブルブル。

批判が怖い……。

ということで十二話目です、どうぞ。

「……いや、私もこの癖をどうにかしようとしたんだが……はあ、小さい時からこんな感じだったんだ」

あーあ、詠春が頭を抱えちゃっているよ。さすがにこんな感じだったら泣きたくなるよな。

「まあ、よい。私もあの程度では傷一つも付けられんし、気配もバレバレ。防げて当たり前だからな、私では」

「（あの程度って、グサツと来たあ……。あれ、俺って威力がバカみたいに強いはずだね？ 親父に褒められたのってそれくらいだし。というか、気配もバレバレって、親父にもバレたことないのにな？ この人才カシい、絶対オカしい）」

「（あの程度の威力、だって？ 木乃人の威力って私のものよりも強いよな？ さすがに最前線からこの身を引いたとしても、この男からするとあの程度ですんでしまうだって？ 気配もバレバレって、私、一度も気が付いたことがないんだが。この男、何者、いや何なんだ？）」

近衛父子揃って頭を抱え始めたぞ。それと二人とも、丸聞こえだから、かなり失礼だよな、おい。

「ごほん、まず初めにこの度はご助力に感謝する。私は雪広家当主雪広 礼徒あやとと言う」

近衛父子を横目に、雪広 礼徒が挨拶をする。その状況に気が付いたのか、近衛父子が目覚めます。

「すみません、少々混乱してしまい……今回の件については真にありがとうございます。私が関西呪術協会の長、近衛 詠春と言います。そしてこの子が、」

「はい、近衛 木乃人と申します」

そう挨拶してくる2人。しかし、どうしたものであろうか。

「ふむ、先ほどから卿らの後ろから可愛らしい気配と視線を2つほど感じるのだが？」

「「（ビクウツ!）」」

はあ、と目の前にいる3人がシンクロしてため息をつく。

「あやか、入ってきなさい」

「刹那君、入りなさい」

ざざざつ、と控えめに開かれた先には2年端もいかぬ少女が2人。

髪をサイドテールで括られた少女。そして、先程助けた金の髪を持つ少女。

2人ともおどおどと室内に入る。

「あ、う……あ、ありがとうございました!」

最初に動いたのは金髪の少女、雪広 あやかだ。

ぺこりっ、と頭を下げて自分に対して礼をする。

……成る程、可愛いな。ロリコンでは無いけれど、無いけれど（大切なので2度言いました）、この可愛さは理解できる。

顔を上げる少女は上目遣いでこちらを見ており、顔は赤く上気しており、目を潤させていた。

うん、かわえー。

「別にいい。ついでに助けたただけだ、礼を言われる筋合いはないが」

「で、でも！」

「では、受け取っておこう」

このままグダグダになりそうな感じがしたんで素直に受け取りました。

「あ、あの！」

するとサイドテールの少女が口を開く。

「わ、私に戦いを教えてください！」

○

最終的に面倒くさいけれど、特に拒否する必要性もないので教えることになった。

話し合うと言ってもちよつとしたことだし、まずこちらの戦闘能力をじっくりと見せてから（先程も見せたが）会議をした方が、まあ威圧出来るんじゃない？　ということに今すぐすることに。

向こう側もそれから、みたいなことを押していたから失礼ではないだろう。

というわけで、近衛父子に雪広父子、俺と刹那の総勢6人は、瓦礫となった元・鍛錬場に現在いる。

俺の得物はいつものお袋の剣、勝手に『メント・モリ死の舞踏』なんて名前を付けさせていただきました。もちろん翼、左手の楯、『全てを石に成す戦女神の楯』、『神の血を滴らせる白き槍』その他諸々は使用禁止にしました。だって、それ使うつて完璧虐た（ry。

まあ戦いを教えて欲しいってことだし、前振りはちよいと適当でいいよね。

「では、まず私の戦い似付いての考え方を教えよう。なに、簡単だ。一言で済む」

それは先の黒い化け物にも言ったことだ。

それは始源の感情。

それは進化の糧。

それは負。

「恐怖、ただ其れだけに尽きる。敵から恐怖を与え続けられ、敵に恐怖を与え続けろ」

黄金の剣、『死の舞踏』を腰から引き抜く。それに合わせ、目の前の少女も野太刀を抜く。

俺は特に構えず、ただただ少女を見る。

少女は構えをとり、刃を俺に向ける。

日の光のもと、俺と少女は得物を片手に向かい合っていた。

「では、始めるとしよう。特に肩書きなど持ち合わせていないが、ふむ。敢えて言うなれば」

名乗る、ただ其れだけだが目の前の少女は汗が吹き出していた。

少し威圧感を出しすぎていたか、と思ったけれど、まあ、恐怖するなら丁度良いだろう。

「『コズミック・ホラー窮極の混沌の恐怖』第一位 メフィストフェレス愛すべからざる黄金 ラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒだ」

「京都神鳴流、桜咲 刹那！」

「汝は恐怖し、我を恐怖させるか？」

「推して参る！」

全く、元気があって良いことだ。

鍛えるけど何か？ 前編（後書き）

感想お待ちしております。

鍛えるけれど何か？ 後半（前書き）

スランプ中の金です。

この遅筆具合をどうにかしてほしいっす……。

クオリティも低いし……（泣）。

ということで13話目です、どうぞ。

鍛えるけれど何か？ 後半

まず動いたのは少女。

瞬動、とまでいかないものの気で強化されたその小柄な体からは想像できない速度で黄金へ接近する。

振るわれた野太刀を剣の腹で防ぎ、蹴りを少女の腹に入れる。

しかし少女は黄金の剣を踏み台に後方へと下がり、蹴りをかわす。

黄金の攻撃は止まらない。

「イエ・ロイ・イン・キング・イエロイキング！ 光の精霊 19
9柱！ 魔法の射手！ 連弾・光の199柱！」

その背には数え切れないほどの魔法の矢。さらにはその1本1本には魔力が濃縮されている。

「力とは、ただただ自分が持っているものだ」

彼は思っていた。

自分の持つ力は確かにズルだ。努力もせず、ただただ頼んだら得た力。その力は壮絶で、人が持つには身に余るものだ。

しかし、それは運が良かったただけだ。

これは逃げ。数多くの努力する人間を見て、罪悪感に蝕まれた自分の逃げだ。

故に胸を張る。

力は力だと。

「そこに善も悪も好感も反感も無い。力がなければ、恐怖を遠ざけることは出来ない。ましてや誰かを護るとなれば全身全霊を賭さなければ護れるものも護れん。だから、」

手を前へと降ろす。それに合わせて魔法の射手が少女に襲いかかる。

「その半妖の力、存分に奮うがいい」

○SIDE…桜咲 刹那

彼の言葉が、私の頭の中で反芻していた。

『その半妖の力、存分に奮うがいい』、と。

何故分かった、何故バレたと。

忌み嫌われたその姿、その正体。

人間と、烏族のハーフであるという事実。

瞬間寒気、否、恐怖がこの身を駆け巡った。

目の前まで迫りきた魔法でもない。自分の隠していた真実を言い当てられたことでもない。

目の前の彼に、ハーフとして残った烏族の本能からの警告に、護^{このちゃん}るものも護れないという忠告に。

もし彼がお嬢様^{このちゃん}を狙って襲ってきたら護れないという恐怖、もし自分が殺されてお嬢様^{このちゃん}が襲われたりしたらという恐怖、もし自分が力を隠したせいでお嬢様^{このちゃん}を護りきれなかったらという恐怖。

いつの間にか、背から白い羽を出していた。ただただ、お嬢様^{このちゃん}を護りたい一心で。

手に持つ野太刀を、持ち直す。自身の周囲には白い羽毛が舞っていた。

降り注ぐ魔法の矢はすでに当たるか当たらないかと言うところまで来ていた。

○SIDE…クギ・スプリングフィールド

今現在敵対している少女、桜咲が背から羽を出したと思ったら、

目には見えない速度で魔法の射手を避けた。

さすが鳥族、と言ったところだろうか。すでに大半の魔法の射手を躲している。

まあ、目標達成と言ったところだろうか。自分の嫌っている半妖の力も使っているしな。

しかしスピードがさっきとは段違いだな、おい。

—— 一撃離脱（ヒット・アンド・アウェイ）ってやつか？ 一剣戟いれたら離れる、その繰り返しだ。

単調だが、その1つ1つが重い。スピードもだがはっきり言ってしまうえば別人のようだ。

「……しかし、少々飽きてきたな」

そう呟いて、『メント・モリ死の舞踏』に魔力を込める。

そのことに気がついたのか、先程のように剣戟を浴びせるのではなく遠距離攻撃の剣技を中心に攻撃してきた。

「神鳴流奥義、雷鳴剣！」

刹那が野太刀を振るうと同時に白く光る雷が迫りくる。

勿論正直に喰らうわけもないので横に跳び、避ける。

瞬間、後ろから殺気を感じた。

「神鳴流決戦奥義、」

冷え冷えとした、感情を感じさせない声。

後ろに振り向けば少女と瞳が合った。その瞳には恐怖と、確信と、決意。俺はその瞳を見たとき、ようやく感じれた。

「真・雷光剣っ！」

横に野太刀を薙ぐ。その軌道からは先ほどの比にならない気と光。剣戟はない。だが、近い。刹那との間には3メートルも距離はない。

その奔流に目を竦ませながらも、剣を前へと突き出した。

「解放、感卦剣」

爆散。『死の舞踏』から気と魔力が相反して爆発が起きる。

気と光の奔流と気と魔力の爆発は拮抗し、お互いを塗り潰し、塗り潰され、削り合っていた。

「アアアアアアアアアアアアアアッ！！！！」

その叫びと共に奔流がより一層大きくなる。拮抗は、奔流が押すような状況になる。

爆発は既に力を衰えさせ、犯され、喰い荒らされ、蝕まれる。

「ほう、これほどとは。想像以上だ」

左手を、奔流の方へと向ける。

「特別だ。1つだけ禁を外そう」

○SIDE…桜咲 刹那

殺った。そう確信した。

彼の剣から発せられた攻撃はもう弱くなっており、力ずくで攻撃を通すことはもう時間の問題だった。

しかし、その確信も彼の一言で崩れさった。

「ほう、これほどとは。想像以上だ」

彼が左手を、奔流の方へと向ける。

「特別だ。1つだけ禁を外そう」

我が左手は拒絶を示す。

その一言で、防がれる。

「さあ、惚けている暇はないぞ」

まるでかき分けるかのように真・雷光剣を割り、確実に前へ前へと彼は歩を進める。

そのことに驚愕しながらも、後ろに退く。

「ふむ、いい判断だ。だが、」

彼が持つ黄金の剣には、異常なほどに込められた魔力。

「これはどうだ？」

巨大な、魔法の矢。

「散弾・魔法の射手。先までの攻撃と同じようには避けるな」

にい、と口の端をつり上げた。黄金の双眸が私を見る。

「卿はすべて避けられるかな？」

そして魔法の矢が襲いかかってきた。

○SIDE…三人称

巨大な魔法の矢が、その図体に反してとても早い速度で前方へと突き進む。

その先には1人の少女。彼女もまた、その体に反して人の速さとは思えない速度で避ける。しかし、少女は衝撃が襲う。

原因は、あの巨大な矢。その巨体からいくつもの小さな矢が分裂し、少女に向かっていくのだ。

「かはっ！」

思わず肺から空気が出ていまい。矢の猛攻は続く。

それは雨。違う点といえば四方八方から襲うという点ぐらいであろうか。全身に浴びせられる魔法の射手は1つ1つの攻撃力はそれほどでもない。

だが、塵も積もれば山となる、まさにそのことわざを体現するような魔法。一撃喰らえばそこから抜け出せないその攻撃は酷く強いものだ。

「斬空閃！」

その声と共に弾幕の一部に穴が空き、少女がそこから飛び出た。

その体には無数の傷と青くなった打撲の痕。右の翼は変な方向に折れていた。

脱出したのはいいものの力無くして体を地に打ちつけ、そして動けなくなった。

「刹那君っ！」

そこに飛び出したのは浅葱を纏った近衛 詠春。すぐさま少女の脈と目をみた。そしてほっ、と一息つく。

「……気絶しただけのようですね」

雪広 礼徒と近衛父子が黄金、ラインハルトを見た。

黄金は顔から汗を吹き出し、口を開いた。

「……少々手加減の具合を間違えてしまった、な」

「「間違えすぎだっ!」「」」

3人の声は全く同時に口から出た。

○

その空間は暗かった。

ことっ、ことっ、ことっ、と足音を響かせながら長い通路を、目的を持って彼は歩いていった。

黒いローブを靡かせ顔をマスクで覆っている彼は、突然止まった。

その目の前には1つの扉。

ギギギッ、と音を立て開かれた扉の先には大量の道具がカオスな状況を生みだしていた。

「……君はもう少し部屋を片づけるようなことをしてもいいと思うのだがね」

「おや、デユナミスではないですか。あの人形たちの調子はどうですか」

彼とはまた違うローブ、と言うよりはボロ布を着、膝まで伸びた黒い髪を揺らせて振り向いた。

その瞳は緑。顔は薄く笑っている。

「ああ、随分といい。しかしあれほどのが作れるのなら先の大戦でも作って欲しかったな」

「ああ、申し訳ない。お恥ずかしい話、少々力を封印されていてね。あれでも精一杯手腕をかけて創った一品だったんだがね」

「それは本当か？」

「ええ、本当だとも」

その顔には本当とも嘘ともとれる表情。彼は1つため息をついて話を続けた。

「まあ、その話もういいだろう。それでだな、旧世界で君が改造したというリョウメンスクナノカミの反応が先ほど消えた」

ほう、と驚いた声を出して彼は作業へと戻る。

「それをやったのは誰かな？ 興味が湧いた」

「……君は旧世界に行くつもりか？」

「いや、最近出来た魔人に行かせるよ。私はまだまだやりたいことがあるからね」

カチャカチャカチャと音を立てながら口を開いた。

「シュピーネ。ロート・シュピーネ。いるかな？」

「は、はい。閣下。ここにおります」

ぶるぶると体を震わす痩せ細った、蜘蛛を思わせる男。その声はネバリとしていてあまり聞きたくない声だ。

「今の話を聞いていただろう？ それで、調査に行ってくれないかな？ ロート・シュピーネ」

「か、閣下のお心のままに」

瞬動。その男は消える。

「……彼に任せていいのかな？」

「捨て駒だよ、彼は」

男は手を止めて、顔を笑みで歪ませた。まるで——長年待ち望んだナニカと出会ったかのように。

「しかし、今日は気分が良い。最高の劇がある予感がする」

「そうか……」

ローブの男は扉へと歩を向けた。

「では、もうそろそろ退散させてもらうぞ。メルクリウス……」

「そうかね？ では人形たちによろしく伝えておいてくれ」

グランギニョル
恐怖劇は、開幕された。

鍛えるけれど何か？ 後半（後書き）

水銀さん登場！

……あ、形成さん（笑）もか。

しかしこの二人の話し方がわからん（おい。

ということで読者の皆様方のご教授を願いたい所存です！

ここがおかしいとか、こうした方がいい、といった意見をお願いします。

感想お待ちしております。

番外編 雑談だけど何か? (前書き)

お久しぶりです、金です。

一応言い訳は本文の方にあります。

うう批判が怖い、と思いながらも男は度胸だと投稿した番外編です、どうぞ。

番外編 雑談だけど何か？

金「特別企画！」

釘「クギと！」

金「金の！」

金・釘「雑談だけど何か？ はっじまっるよー！」

金「さあ、始まりました、祝10万PVを祝ってのこの企画」

釘「おい待て」

金「チャット形式でお送りしたいと思います！ ってえ？ 釘、どうしたんですか？」

釘「どこから突っ込んでいいんだか……。まず何で更新がこんなに遅れたか、お兄ちゃん怒らないから言ってみなさい」

釘様の 頭上に 第五元素収束砲が 確認されました。

金「夏風邪ぶり返したんだよ、バーカ！（泣）」

釘「ええ！ さすがに病弱だとは知っていたけど、ここまでとは……」

金「くくく、『お前この前なっただろ？』と思われている読者様方、あれはフラグです！ またなるフラグデスヨォ！ はははははは！

学校の単位やバイデス……」

釘「バカ野郎、またフラグ建てやがって……。んで落ち込んでいるところ悪いけど、何で俺のチャット名が木工道具になってんだよ？」

金「いや、釘。プロローグを見てみてくださいよ。自覚していますよ？」

釘「……そうだった。ええい、気を取り直して、祝10万PVと銘打ったこの企画だけど」

金「？　どこか問題でも？　よく他の作者様方もやられていることですよ？」

釘「いや、すでに10万PVって結構前になっていたぞ？」

金「はは、まさ………嘘だろ？」

釘「顔を劇画タッチにしない。今やもう20万PVを越えたんだけど、これも今まで読み続けていただいた読者様方のお陰です。どうもありがとうございます」

金「ぶつぶつ………10万………20万PV企画が……」

釘「いつまで落ち込んでいるつもりだよ、おい」

金「はっ、そうですね。ゴホンゴホン、おやもうそろそろゲストの方がログインしますね」

釘「ゲスト？　俺、初耳なんだけど」

蠅様が ログイン しました。

蠅「どうも、初めまして。蠅ことベルでございます」

金「おお、やっときましたね。今回のゲストは先ほど挨拶されたようにベルさんです。みんなはくしゅー」

パチパチパチ。

釘「いやはや、まさかベル（以後蠅）がゲストになるとはな。思いも寄らなかったー（棒読み）」

金「釘は薄々気が付いていたようですが。ではちょっとプロフィールでも紹介しちゃいましょうかね」

ピロリロリン

蠅様の プロフィールが 公開されます。

名前..ベル（ベルゼブブ）

性別..女（?）

年齢..UNKNOWN

身長..180cm

体重..蠅の数によって変動

好きなもの…ゴミ処理所、臭いもの、甘いもの、王

嫌いなもの…綺麗すぎる所、殺虫用品、王を貶す者

金「ま、こんなところですかね」

釘「待て待て待て、蠅も蠅で突っ込み所が有りすぎて困る！」

蠅「？　どこがでしょうか、王よ？」

釘「畜生、首を傾げるな！　可愛いじゃねえか！」

釘「しかしすかさず突っ込む！　この際好きなもの、嫌いなものはしょうがないとして、体重の所だ！　蠅の数による変動って、お前の体どうなってんだよ！」

金「ええ、釘は細かいなあ。そんなだと――モテませんよ　（予定していたフラグを折りますよ）？」

釘「酷い！　それって完璧脅しじゃねえか、おい！」

金「ふふふ、まだいいじゃないですか。金なんて男子校だから校内の出会いなんてありませんし、ケータイも持っていないんでサイトでの出会いも無し、フフフフ」

釘「まあそれ以前に顔から問題だしな」

金「殺すコロすコロすコロすコロコロコロッ！」

蠅「あの、一応私ゲストなんですが……」

30分後

金「くっ、今日の所はこの辺りで引き上げさせてあげましょう！
しかし、いづれ第二の、第三の金が現れるだろう……っ！」

釘「ふははははー！ その度に私が倒してやろうではないか。さあ
止めだ、『神の血を滴らせ——』」

蠅「一応述べさせていただくと彼が死亡したらこの小説が凍結して
しまいますが」

釘「……今日はこの辺りで止めてやんよ」

金「くくく、今更気づきましたか……というか金、死に体なんです
けど」

釘「司会者、早く進行させろ」

金「ぐっ、自分のことを棚に上げて……まあいいでしょう。ところ
で蠅、最近悩み事があるようですが？」

蠅「はい、実はそうなんです……」

釘「へえ、それは初耳だ」

蠅「はい……私、出番が少ないんです」

金様が ログアウト しました。

金様が ログイン させられました。

蠅「大丈夫です、命までは取りません。……ただ死と生の境界線上に立って貰うだけ」

金「止めて！ 金のライフはゼロよ！？」

釘「はははっ、無様だな！」

蠅「王ですよ」

釘「ひょっ？」

蠅「毎回毎回ネギちゃんの護衛を押しつけて……たまには私も暴れたいいいイイイツー！！」

釘「ひいい、大量の蠅（虫）が襲いかかってくるううう！」

金「ははは、もう終わりだあ……」

釘「金の方は俺の比じゃねえぞ、おい！」

蠅「だから先程言ったでしょう、命までは取りません」

金・釘「」（ガクガクブルブル）」

蠅「死と生の境界線上に立って貰うだけ、と」

金・釘「ぎゃああああ！」

しばらく お待ち 下さい。

金「らめええ、蠅らめえ……」

釘「……………（ビクンッビクンッ）」

蠅「（やりすぎましたかね……ま、いっか）」

金様が 生き返り ました。

釘様が 生き返り ました。

金「ぶはあ！ い、今のは一体……（がくがく）」

釘「はあはあはあ、な、なんでだ……？ 冷や汗で服がびしょ濡れに……（ぶるぶる）」

蠅「どうしたんですか？ 一体そんなに震えて？」

金・釘「「ビクッ！？」 い、いえなんでもナイデスヨ？」

金「（蠅の原作入った後の出番をもうチョイ増やしましょうかね……増やさないと……）」

釘「（今度行くときは蠅を連れていこうかな、勿論戦わせよう……連れていかないと……）」

金・釘「「（殺^ヤられる!）」」

蠅「まあいいでしょう。それで、進行をしなくていいんでしょうか、金様？」

金「おお、そうでしたね。では《ジリリリッ！》……時間切れですね。ではこの辺りでお開きとさせていただきますよう」

釘「って、オチ無しかよ。本格的に駄目だな、おい」

蠅「……（ブブブブッ）」

金「ああ無言で蠅を差し向けないで！……つとと、業務連絡ですね。丁度第一章が終わったので「ちょっと待て」ってなんですか？今回はチャット形式なんでそれをちゃんと守って欲しいんですが」

釘「今、第一章が終わったって言ったな？いつ、どのタイミングで言ったんだよ！？」

蠅「ええ本当です。全くこれだから評価が伸びないんですよ」

金「ええ、まさかのダメだし！いや、言われてもしようがないですね、そうですね……。まあ気を取り直して（この時彼のメンタル面がレベルアップしたのだった…ラジエルの書参照）ごほん、第一章が終わったので勿論第二章を書いているわけですが、ご指摘があったのでそのミスの修正をしようかな、と思っています。さらにストックを増やしたいのでその間は番外編や閑話でもゆったりと書いていこうと思います」

釘「業務連絡終了？ んじゃ、ここらで幕引きとさせていただきます」

金・釘・蠅 「「今後も『ネギの兄だけど何か?』をどうかよろしくお願いします」「」

（終）

金「あ、そうそう。7／20～25は部活の合宿なので感想の返信ができません」

釘「業務連絡の時に言えっ!」

番外編 雑談だけ何か？（後書き）

感想お待ちしております。

番外編 幼女天使の恋だけと何か？ 前編（前書き）

どうも、合宿前の金です。

今回の話は題名通りです。

ではどうぞ。

番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 前編

「はぁ？ 助けて欲しいって？」

幼女天使に呼び出され真っ白な神様の部屋に着くと突然そう言われた。

「そうですお願いです助けて下さいこれが断られたらもう私色々大変なことにいいいい」

そう言いながら足に縋りついてくる幼女天使。この幼女天使意外と打たれ強かった気がしたんだが……、なんて思いながら事情を聞くことにした。

というか真っ裸の18歳男子の足に縋りついてくる幼女って。犯罪臭しか臭わないんですが。

「よし取り合えず落ち着こう。なんで神様がいなかは知らんがこの状況をもし見られたりしたら神様が俺を見る目が大変なことに」
あら、来て……とりあえず警察に連ら「止めろ！」

——どうやら間に合わなかったようです。

ズズズッ、と精神的に空気が重い空間にお茶が啜られる音が響く。

発音源は目の前の神様。しかし今日も乳でかいなあ、なんて注意深く神様の胸を観察しているとカチャ、と神様がその手に持っていたコップをテーブルの上に置いた。

「一応、事情は把握したわ。あなたがこの子に呼び出されて、こちらに着いたら突然足を捕まれた。それであなたが落ち着かせようとして宥めているところに私が来た。それでいいのかしら？」

「……仰られるとおりでございます」

あれ、俺悪くないのになんで縮こまんないといかんのよ？ 少女がズズズッ、と鼻啜る度に罪悪感がマツハなんですけど。

はあ、とため息をつくとき神様が話し始める。

「取り合えずどうして彼を呼んだのかしら？」

そう問われた少女はどこから取り出したのか、ティッシュで鼻をかむと、その口から衝撃的な言葉が発せられた。

「私………恋い、しちゃいました」

「「は？ ……ええええええええええっ!？」」

「その、先月のことです。あの日のことは決して忘れられません。私が神様の命令であなただけの世界の巡回をしていたとき「ストップ、何でお前が俺の世界を巡回したの？」ああ、そのことですか。あなたはまだ正式な神じゃないので天使を持ってないじゃないですか」

確かにそうだ。俺は魂の格は神レベルなんだけど、死ぬまでは神の職(?)には就かないことで話は纏まったはずだ。

それに創った世界には俺が創った鳥型巡回精霊『ジュンカイ8号くん』を飛ばして異変がないかはちゃんと監視している。

「確かにちゃんと監視はされているんですが、世界なので上、つまり根元神世界管理局には報告しないといけないんですよ。それで報告するのは根元神、もしくは根元天使しか出来ないんで私がその役をしていた、というわけです」

「へえ、サンキューな」

「いえいえ、ごほん、で話を戻しますと巡回していたときにですね、大量の龍に襲われまして」

「ああ、『神話世界』か」

俺が創りだした世界の一つ、『神話世界』の神や幻想生物などの魔に属する類(例外もあるが)は根元級の神や天使を見ることが出来る。

龍種はたしか下級から見れるようにはしていたけれど、根元神や根元天使には上級でも赤子レベルだ。正直困ることも苦戦することもありはしないと思うんだけど……。

「ええ、確かに苦戦はしなかったんですが、私は世界から見れば部外者なので殺生は禁じられているんです。なので気絶させていたんですけど弱いくせに量が多いかったものですから。」

その時、彼が颯爽と現れたんですよ」

おお、やっと幼女の騎士様の登場か。

「一気に私の目の前の龍を雷で吹き飛ばして。一つその手に持つ柄の短い鎚を振るうと大量の龍の頭を砕いて。それを掲げると頭上からはたくさん雷が降ってきて私を守ってくれたんですよ。」

彼はですね、鎧を着ていて、獣の皮を叩いていて、鬣みたいで雄々しく燃えるような赤い髪。その瞳は紅いルビーのようで。

それで、振り向いて『大丈夫か？』って微笑んで下さったんですよっ、きゃー！」

「それで、それからどうしたの？」

少女はいきなりしゅん、と萎れた。いや、比喻じゃなくてリアルに。

「それが……『もう時間だから』ってささっと帰っちゃって」

「お名前は聞けたの？」

いや、神様。そんなに目を輝かせないで。……というか、やはり神様も女(?) だとかこういう話には興味津々なんすね……。

「だってこういうことぐらいしか興味ないから」

さいで。

「んで、名前は？」

いやんいやん、と一人自分の世界にトリップしている幼女に声をかけた。

「え、はい！ あの方の御名前は」

——まさか、俺がここまで頭を悩ませるとはこの時、知る由もなかった。

「トール様です！」

○

トール。

北欧神話に出てくる神の内の一柱であり、北欧神話内では最強、とも言われている。

同神話の主神であるオーディンと大地の女神ヨルズの間に生まれた息子で、妻にシヴと巨人ヤルンサクサがいる。

主神であるオーディンとの間に生まれたのにも関わらず、トールはどちらかというと敵対していた巨人と似ている点が多く、性格もまた良く言えば豪胆、悪く言えば乱暴である。しかしヴァイキング時代後期ではオーディンよりもトールの方が多く信仰されていたらしい。

前述にもあったようにトールは豪胆、というよりは乱暴な性格なのだが、決して暴力的で粗野な性格ではなかった。

例えば多くの兄弟の内の一人であるバルドルの葬儀に使う薪を聖別したり、食べた山羊を祈りによって復活させたり、物知りのアルヴィースから知識を聞き出し、逆に出し抜いたりとしているのだ。

ただこういう話はあるもののやはり最強の名の方が強く、トールに関する話のほとんどが巨人の国ヨーツンヘイムへの遠征や巨人の討伐である。

トールがなぜ神の中で最強と言われているかというと、トールはほとんどの戦いを一撃で終わらせている、もちろん勝利でだ。

はっきりに言おう。こいつは公式チートだと。

神はチートな奴が多いんだが、その中でもチートのチート、チートオブチートなのである。なんせ世界樹ユグドラシルを支えていた大蛇、ヨルムンガンドですら一撃で倒したのだから。もしヨルムンガンドから出た猛毒を浴びていなければ、最後の最後まで生き残っ

ていたかもしれない。

「へえ、あのおっさんにねえ。もしかしてオジサン趣味あんの？」

「へ？ トール様はおじさんじゃありませんでしたよ？」

え？ と重なる声。ちょっと待て、トールって、ありゃどこからどう見てもおっさんだぞ？ 何いってんだこいつ？

そう思っているとパンツ、と手を叩いた音がする。

「それよりも、もう名前が分かっていて、世界も特定できた。もうすることはひとつよね？」

「「え？ もしかして……」」

どうやら神様の道楽に俺らは付き合わされるらしい。

「その世界にいて、あなたが惚れたって言う男を見に行こうじゃない」

神様は非常に可愛らしく笑っていたことを書いておこう。

○

ということで俺らはスニーキングミッションばりに誰にも悟られ

ず、『神話世界』へと入り現在トールを探している。

「——しかないな。トールんちにいても留守だし。奥さん達ひつつれてどっかピクニックでも行ってるのか？」

北欧神話はまだラグナロクは起こっていない。なのでトールはまだ生きているはず何だが……。

「やっぱりおっさんじゃなかった？ ほら、こんな感じに髭を生やしていてさあ。ムツキムキな感じの」

「いいえっ、あの人は若かったし髭は生えていませんでしたしスレンダーでしたっ」

まるで断定するかのように言い切る幼女。

しかし、なんだかなあ。もしかしたら見間違えだったかもしれないし、危険なときに助けてくれたから美化されているのかもしれない。最悪、嘘をついた、美男子からおっさんになった、なんてこともあるしな。

しかし、よく考えてみると俺って北欧神話との交流はずっと昔してそれ以来つきりなんじゃないか。

「あぁっ、いました！」

「なんだとう！？」

「そこの茂みに隠れて！」

さっ、と三人とも同じ茂みに隠れそこからチラッと外を見ると、
幼女が言っていた美男子が湖の畔にいた。

「……なあ幼女、もしかしてあれ？」

「はい、あの方です！」

きゃーどうしよう、とすぐ隣で頬に手を当てて首を振る幼女。
……地味に邪魔だな、おい。

神様は神様は「あら、いい男じゃない」なんて言い出しているし。
神様や、今回ここにきたのは幼女の恋の応援でせうよ？

はあ、とため息をついて目の前の男を見た。

まず体型はというと、いわゆる細マッチョ。髪は膨れている感じがする。例を挙げるとすればまさに獅子の鬣。目も紅いし、髭でおっさんだったら完璧ツールだったんだけどなあ。

「あら、ツール！ 久しぶりね！」

森の方から声がしたのでそちらの方に目を向けると、そりゃあまあたいそう美しい女性がいた。銀色の腰の辺りで括られている長髪を風に靡かせて、オパーイをボインボイン、じゃなくてバインバイン、と激しく揺らして。「おお」と歓声を上げた俺は悪くないから幼女、その親の敵を見るような目であの人の胸と俺を見ないで。

「無理です……」

しかし、プロモーションもいいよな。あれだ、ボン、キュツ、ボ

ンってやつ。しかしケツもでかいなあ。ああいうキャラは転生前の人生から一人もいなかったなあ。紹介された女子も腐女子しかいなかったし。合コンしたときはちょっと、いやめっちゃ苦痛でした。

それでトールの方はというと、その声の持ち主の方向に振り向き、にっこり笑って軽く手を挙げた。

——思えば、この時からだ、俺、否、俺たちの苦難が始まったのも。

「よお、ロキ。元気してたか？」

「はあっ!?!? ロキイツ!?!?」

番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 前編（後書き）

感想お待ちしております。

番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 中編（前書き）

どうも、金です。

今回の話は思わず自分でも目を背けたくなるような内容です……すみません。

とりあえず投稿して、余裕ができたなら直すつもりです。

ではどうぞ。

番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 中編

ロキ。

北欧神話内最大のトリックスターと言われ、父が巨人ながらもオーディンの義兄弟となった一柱であり、そしてアース神族を滅亡へと導いた裏切り者でもある。

ロキは美しい容姿を持っているが、陰謀と悪戯と欺瞞に満ちた悪であり、気分屋であるものの、幾度も神々の間で浮かび上がった問題を解決している。その例として小人族を騙し、トールの鎚ミョルニル、オーディンの槍グングニル、フレイの船スキズブラズニル、黄金を生み出す指輪アンドヴァリナウトなどを作らせた。

またロキはトールとの仲が最もよい。彼らは二度ほど巨人の国ヨーツンヘイムへ冒険をしていたりする。

しかしロキが悪と確定されるのはオーディンの愛息子であるバルドルを殺した時である。これによりロキは神々に捕らえられ、地下の巨大な岩に縛り付けられ、頭上から大蛇の毒が滴り落ちる罰を受ける。いつもは嫁であるシギュンが鉢で毒を受け止めているのだが、鉢が満杯になりその中身を捨てにいくときだけ毒がかかり、その苦痛による身震いが自信の原因と言われている。

そして『ラグナロク神々の黄昏』の時、ロキは戒めから解かれ、そしてヘイムダルと相打ちになる。

「でもなんであいつ女なんだ？」

ロキは男神なんだけれど……。

そういえばロキの伝承内ではロキは8年間乳搾り女となって子供をもうけた話や、雌馬となって馬であるスヴァジルファリとの間に後にオーディンの愛馬となるスレイプニルを生んだ話などがある。

……え、もしかしてロキって……。

「バイセクシャルね。興奮してきたわ」

俺が言わないようにしていたことをあっさりと言わんといて下さい。

「……ブツブツ……ブツブツ」

しかしいきなり隣の少女が静かになって黒いオーラを発しているんですが。

「……八つ裂き……絞首刑……永遠の苦しみ……」

恐っ！ 何この子、もの凄く恐いんですけど！

「神様神様、隣の少女がダークサイドに落ちようとしているんですが」

ジェ○イとか本当にいんのかね？ もしいたらすぐさまこいつをどうにかして欲しい。

「あら、本当。たまにこの子こういう状態になっちゃうのよね。で

もほつといたらすぐに直るわよ」

嘘だっ！　なんかさっきよりオーラが黒くなってきてるYO！
目のハイライト消えてるし、クスクス笑ってるぞ、おい！

「あの女、トール様を誑かしやがってただで済むとは思っていませんよね？　クスクス、トール様ご安心下さい。その女狐はすぐさま私が存在から消しますから」

「待て待て待て待て。幼女よ、一旦落ち着け。もしかしたらただの友達かもしれないぞ？　だからすぐさま攻げ「ねえ、トール？　最近私全然してないの。だからね、シよ？」ギャー！　あいつなんてこと言っちゃってくれてんの！？　っ！？　幼女落ち着け！　話せば分かる！　俺らは話し合うことが出来るじゃないカ！　だから第五元素収束砲を俺に向かって撃つのは止めてえええ！」

というよりなんで俺に撃つし。

○

「ううっ、どうせ私なんて幼女姿ですよ……。思えば私の恋ってつくづく報われないし、周りの変態か常識外れしかないし、合コンには呼ばれないし……。うわああんっ！」

あの後帰っていった俺達は、神様の奢りで居酒屋に来ていた。……
…というかここにも居酒屋あったんだ。

それはさておき、しばらく黙りながら酒をガブガブ飲んでいた少女（どう見ても未成年飲酒ですね、分かります）が突然泣き出した。幼女、お前泣き上戸だったんだな。

「まあまあ、そう落ち込むなって。次があると思えばいいじゃないか。って、これウチの世界から売られてる酒じゃん。オツチャン、『バツカスのハートがDO☆KI×2焼酎』一升瓶で頼む！」

素晴らしくセンスが感じられない名前だ。

「へい、分かりやした」

オツチャンに酒を頼んで、コップに残っていた酒を一気に煽ると、神様に目を向けた。

「（しかし神様、話聞いてるとこの幼女って結構フられてんじゃん。知ってました？）」

「（そうね、プライベートまで突っ込めないから詳しくは知っていないわけじゃないけど、結構聞いたことがあるわ）」

「（へえ、例えば？）」

「（そうねえ、他の根元神の天使に惚れたことがあったわね。あの時は結構続いたわね）」

「（付き合いが？）」

「（ううん、恋心が。あの子恋には落ちるけどそこからなかなか前

に進めないのよ)」

「（はあ、難儀なことだ）」

「ちょっと、ちゃんと聞いてますか!？」

「へいへい、聞いてますよ」

「そうですか……コロウジウスさんの時ですよ。あの人の時も私が声をかけようとしたら女の人が近づいてきて声がかけられなかったんですよ、ううっ、なんでかなあ……」

……ちょっと哀れになってきたんだが。

「（私も……）」

「へい、お待ち」

俺はようやく来た『バツカスのハートがDO☆KI×2焼酎』を注ぎながら幼女の話に耳を傾けた。

○

しかし思い返してみると、神話が歪曲していたり神が神話通りになっていなかったりしていたのを思い返した。

今回のツールがオッサンじゃないのもそうである。时期的にはすでにオッサンでないとおかしいし、ロキもツールとああいふ関係であるとは伝承上なかった。

……やっぱり時空程度では他の神話に影響を与えてしまうか。

というのも時空をいくつも作り、その時空ごとに様々な神話を突っ込んだのが『神話世界』の実状である。

でも特に世界の軸はズレてはいないし、神話や伝承に記されているイベントは全て起こっている。

……つまりほっといても大丈夫というわけ。

「まあ、今は飲むか」

しかしネーミングセンスは皆無なのに『バツカスのハートがDO☆KI×2焼酎』が意外とうまい。

『王よ、聞こえますか』

頭の中に聞きなれた声が響く。

『ん、ベルか。何かあったか？』

『はい、オーデインが今王に用事があると言ってきましたが……帰させますか？』

『いや、今そっちに帰る』

「という訳で帰りますね？」

「そう、じゃあまた今度」

「まだ話は終わっていませんよお！」

幼女は無視して帰りますか。

○

「久しいな、オーデイン」

自分の部屋に戻った俺は目の前の隻眼の翁に声をかけた。

「お久しゅうございます、我らが父よ」

「それで、何のようだ？」

「はい、私のバカ息子についての話なのですが……」

「ここは児童相談所ではないぞ……まあいい。何だ、話せ」

「はい、実は……」

話すのを躊躇うように、しかしゆっくりと口を動かした。始めた。

「私のバカ息子、ツールが『ラグナロク神々の黄昏』の前に死ぬ可能性がでてきました」

「何だと！？ それは真か！？」

これは大きく世界の軸がズレてしまうかもしれない。その前に何かしらの対処をしなければ……！

「原因は何だ？ 病か？」

もしそうだとしたら治さなくてはならないな……。しかしそんなことを起こるようにはしてはいないぞ？

「いえ、そのようなことではなく……」

「では何だ？」

そして、次の一言は俺の予測を遥かに越えた、馬鹿馬鹿しくも本当に死ぬかもしれない理由だった。

「……女絡みで死ぬかもしれないのです」

「は？」

○

「……私のバカ息子は、本当にバカなのですが、人を引き寄せる魅力があります」

「ああ、そうだな」

あれからしばらくの沈黙があった。さすがにそんな理由で死ぬかよ、なんてニュアンスのことを言ったら相談に来るまでの理由があるという。

「それは勿論、女にも効きます」

「……ふむ、そうだな」

「それでいて、何かと厄介ごとに巻き込まれたりもするんです」

「……そうだったのか」

これはもしや……。

「その厄介ごとの度に、女を惚れさせるんです……」

リアルフラグメーカーキター！ マジでかよ！？ 本当にフラグメーカーはいたんだ！

「成る程な……」

「ええ……それで先日、あのバカの許嫁のシヴから手紙が来まして」

「？ それで？」

しかしなんでいきなりシヴ？

「手紙の内容が……『ツール様から離れなかったらお前をクロス。ツールサマモクロス。ソシテジブンモシヌ』、といった内容の手紙が来まして……」

恐っ！？ ヤンデレじゃん、おい。

「うう、我が父よ、お助けください！？」

俺は一つ、はぁ、とため息をついて、解決策を考えるのであった。

番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 中編（後書き）

感想お待ちしております。

番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 後編（前書き）

どうも、金です。

まさかのぎっくり腰で死にかけています。

まあ、遅れた理由じゃないんですけどね。

言い訳させていただきますと、

1. 塾忙しス

2. 部活長ス

3. 宿題多ス

って、ところです。

更新遅れて申し訳ございません。

でも、絶対行方不明になったりはしないんで、今後もし応援して頂ければと願っています。

ついでにもう一つ謝罪を。

……後半が酷すぎです。申し訳ございません。

番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 後編

世界に存在するほとんどの神話では神の間では一夫多妻制である。これはやはり男尊女卑の風潮に影響されていると言える。

勿論これは北欧神話にも適応される。オーディンなんかがそうだ。史実通りであればトールも2人の嫁をもうけている。

……では何故トールは妻を一人も作ろうとしないのか。

とても疑問。とてつもなく疑問。

全員結婚させればいいじゃん、と提案するとオーディンは「無理矢理結婚させるのはちよつと……」なんて弱気な発言をしているし。まあ子煩悩なところがあるからな、オーディンは。

逆にトールが許可すればいいだろう、と思ったがよく考えてみれば許嫁であるシヴの面子が立たない。しかも筋金入りの唐変木らしい。

うーんうーん何が楽しくて爺と一緒に頭を抱えなくちゃいけないんだ、と言うことでベルを部屋に入れることにした。

「王よ、1つ提案があるのですが、話させて貰ってもよろしいでしょうか？」

「ん？ ああ、よい。構わん」

「では、」

ごほん、と咳をすると口を開き話し始めた。

「地獄での話なのですが、地獄でもこのような事例——勿論逆に男性が、というのもありますが——が多々あります」

驚いたのは俺だけだろうか。地獄にもフラグメーカーがいるんだと。うらやまゲブンゲブンイカンな、それは。

「その度に各領主様方、または総指令官殿が頭を悩ませられました。それほど規模でしたので。やはり悪魔内でも面子があります。そのため全員はできないので殿方の独断で決められると、その、次の日には頭が無かったりすることもあって」

恐えよ！　どんだけだよ、おい！　デモとかストの比じゃねえよ、それ！　しかも悪魔ヤンデレはリアルスクー○・デ○ズッ！？

「そこで上層部の方々が集まり、1つそのことについて会議をしました。どのようにすればこのようなことは起こらないだろうか、どうすればすっぱりと諦められるのだろうか、と」

……女絡みで会議をするまでになるとは、どういふことなのか説明して欲しい。

「それで決まったのが、戦いや競技といったもので決着をつける、というものでした」

なるほど、それは確かに効率がよいのかもしれない。よりよい種を残すといった点ではそれは優れているだろう。悪魔でも容姿がよいと人気ができるが、それよりは腕っ節の強さや優れた頭脳の持ち主の方がモテるらしい（勿論それは男であって女は容姿が優れている

方がモテる）。

「それでも諦めきれない人もいますが、大半はそれで諦めて手を引きます」

「む、ベル殿。諦めきれなかった人がいたら本末転倒ではありませんか」

オーディンの言うとおりである。諦めきれなかったら意中の人を殺す、なんてことが起こる可能性が高い。それでは危険である。

「ええ。そういう方は事前にチェックしておいて、その競技終了後にしばらく監視が付きます、その方々にバレないように。それでも不自然な行動が確認されたら、即記憶、というよりはその感情を抹消させていただいていました」

非人道的、いや人間の物差しで悪魔を計ってはいけないだろうが自分から見ると少々気が引ける。やはりどれだけ危険であろうと、さすがに思慕を寄せていた人の記憶を消す、というのは悲しい。

「ふむ、成る程……」

オーディンも顎に手を当て、思考に浸かっている。やはりこういう時に神や悪魔といった存在が人間の思考とはかけ離れているのが分かる。そのような存在が人間が想像したものと言っても、人間の感性とは少々ズレたところがある。故に、それらは信仰されているのだろう。

「では、ベル殿の案を使ってみようかと思えます。どうも、ありがとうございます」

「いえいえ、とんでもありません。ただ自分の故郷の習わしをお教えしただけなので」

「礼ぐらいは受け取っておけ、ベル」

「はあ、ではありがたく受け取っておきます……」

なんて会話が続き、唐突に思い出した。

「そうだ、オーディン。少々そのことで頼みたいことがあるのだが」

「はっ、なんででしょうか？」

「うむ、実はな」

自分の知り合いも、それに加えさせてもよいだろうか。

その返答は言うまでもない。

○

「幼女幼女幼女っ！」

取り合えず幼女にこの事を報告することにした。

「幼女言わないでください……そのことでショック受けているんですから……」

いつにも増してテンションが低い幼女がため息をつきながら、書類を纏めていた。

「……一体なんですか、私だって暇じゃないんですよ。しょうもないことだったらあなたの世界の内のどれかをぶっ壊しますよ?」

暗っ! そして恐っ! なにこの子、こんなこという子じゃなかったのに。やっぱリートルですね、リートルなんですね。あの人類共通の敵め、^{メーカー}幼女をイジリキャラから鬱キャラにさせるとはこれイカに。

まあ、茶番もこれくらいにして。

「幼女よ、もしかしたらお前の恋、叶うかもしれんぞ」

「本当ですかっ!?!」

ガタツ、と音を立てて椅子から幼女が立ち上がり、顔を前に出す。その瞳は「嘘だったら落とし前ツケて貰うぞ、ワレ」と物語っている。え、なんで分かったかって? 幼女が話していたからだよ、ハッハッ。……ヤベエ、まじでキャラ変わってるよ。

「本当の本当、でも一応注意しておくが『かも』であって確実じゃないからな?」

「ええええ、分かっています。それで、何でなんですか? どうしたらいいんですか?」

「ん、何。簡単なことだ」

少し、運動会に出ればいいだけだ。

○

「ではでは！ ただいまより『ドキッ☆ トールの嫁はワ・タ・シ
はーと 運動会』を始めちゃいたいと思いますーす！ 実況は皆様
お馴染み北米のトリックスターと言えはこれのお・れ、コヨーテと、」

「おいおい、コヨーテ！ あのネーチャン見てみるよ！ 走る度に
あの双子山が地震で俺の瞳がゲシュタルト！」

「……実況の元祖スパイダーマンことイクトミでお送りしたいと思
います。我が友イクトミよ、もうマイクがONになっているぞ」

「ぎゃああ！ マジかよ！？ 女房にバレたらヤバいことにいい！
？ しかし、どんなことがあってもこの録画したビデオは手放さな
い！」

「さて、初っぱなからテンションMAXで逝っちゃいたいと思いま
す！ しかし、解説のイクトミさん。今回の運動会ですが正直なと
ころ、感想が1つしかないんですよ」

「おお、やっぱりコヨーテもか。そうだな、もう一言しかないも

んな」

「「羨ましすぎるぞコンチクショウッ！！！」」

「一体全体なんだよなんなんだよ！？ この女子の人数！ 今回の参加者は何々……総勢1982人！？ どんだけモテモテなんだよ、チクショー！！！」

「ええい、リアルハーレムなんて初めて見たわっ！ くっそー、俺らんところも一夫多妻制設けて欲しいなー。そうすれば俺もリアルハーレムぐらいすぐに作って、一瞬にして酒池肉林にしてやる」

「ちょwwwおまwwwwww」

「笑うなよ！ いくら親友であるお前でもそれは許さんぞ！」

「お前、あの奥さんと結婚している時点でもう人生の墓場エンド」

「……ははっ、確かにそうだな……」

「……今度酒奢ってやるよ……」

「……ありがとな……」

「さて気を取り直して、実況していくぞー！」

「おー！」

○

「……我が父、あれは一体……？」

「……言うな、あのことはもう言うな。……あいつらを連れてきたのが間違いだった……」

○

「さてと、現在『落ちたら恋の試験も落ちるぞ☆ プールの上で綱渡り』をやっているんですが、解説のイクトミさん、これどう見ますかねえ？」

「おっほー！ ビシヨビシヨになった美女のラインが丸分かりな状況に俺今超興奮中！」

「いや、確かにそれも見所だけさあ、競技についての解説をして欲しいんだが」

「おお、見ろよコヨーテ！ 今落ちた娘、ほらあその！ 上から126・62・85ってヤバいだろ！」

「おっほー！ やべえよ！ あの胸のデカサに俺の愚息も覚醒中ー！ ってそうじゃねえよ！ ちゃんと解説しろよ！ なんで俺らが

わざわざ次元渡ってまでここにきたのか覚えてんのかよ!？」

「まあいいじゃん、こんな時に魔法の言葉、さんはい」

「「役得役得」」

○

「……我らが父……?」

「俺はもう寝る、それでこの大会中はもうゼツテ起きねえ」

○

「さあて、次の『転んじゃだめよ? ヌルヌル・ローション・カイドウ』! っておい! この大会の競技発案者、面あ出せや! お前らの煩惱すごすぎて、俺は泣いた!」

「ええー、いいじゃんいいじゃん、ヌルヌルローション。なんかエロいじゃん、超エロいじゃん」

「ええい、見た目が完璧ネタの俺にツツコませるとは、北欧神話…

…恐ろしい……っ！」

○

「競技発案者とそれを許可した奴は出てこいっ！」

「あれ、オーディン様？ どうされたんですか？」

「いいから出てこい！ 私の顔に泥塗りやがってえ！」

「ひい！？ オーディン様がご乱心〜！」

○

「さあて、最後の競技もようやく終わりました！ 現在残っているのはたったの3人！ 女巨人、ヤルンサクサ！ 北欧のトリックスター、ロキ！ 幼女天使、ヨ・ウージョ！ 「ちょ、私の名前が大変なことになり〜！」 イクトミさん、遂に1982人の内からたった3人が選出されました。どう思わ「へい、奥のおふたりさん！ 俺と熱い夜を過ごさなくいい？」 オメエの頭ん中はそれだけか！？ 「ちょっと、何で私は誘わないんですか！？」「」

「「少女、テメエはダメだ」」

「ヒッド!？」

「まったく、最近はポルノ法だとか、ウンチャラ法だとかで色々規制がかかってるつつうのに。合法ロリだけど図柄的に完璧アウトだつて」

「全くだ。ついでに言えば俺はロリコンじゃねえ」

「いや、そういうお前はショタだし。奥さんだってロリじゃねえか」

「ウツセエ! 取り合えずアウトだアウト」

「つく、なんなんですか、少女だとかロリだからって。それ以前に人間性を重視すべきなんですよ……」

「「いや、だから法律的にアウトだって」」

「キィィィー!」

「というわけで、このメンバーがツール（のクソ野郎）の嫁になります、決定!」

「はぁ!？ どういうわけだよ!？」

と今更現れたツール君。オーディンのカラス、フギンとムギンがカーカー鳴きながら現状が分かっていないツールに教えている。

「な、成る程。俺がこの3人と結婚すれば万事解決って訳か……?」

オドロオドロとそう答えるトール。

「もう離さないんだから！」

「ふふっ、これでコソコソしなくてもよくなったね、トール♪」

ガバツ、とトールに抱きつくヤルンサクサとロキ。

「ははっ、そうだな」

そう答えた。が、

「あ、うう」

真っ赤にした顔を下に向けてもじもじとする幼女。

「ん、嬢ちゃんもか？」

「は、はい。そうです……」

幼女は恥ずかしく、ボソボソと喋ってしまっている。

「んー、嬢ちゃんのことは俺はあんまり知らん。嬢ちゃんもだろう？」

「……はい」

この答え方だとヤルンサクサとロキの二人は以前から知り合っていたのだろう。そして幼女もトールのことを深くは知らないだろう。

「だからさ、もっと知り合ってから結婚しようか」

そう微笑みながら、幼女に言った。確かにそうだ。そちらの方が潤滑な結婚生活を送れる。

しかし、俺はそうは思っていなかった。いや、トールの意見には賛成だけど、違う考え方でその意見に賛成なのだ。

『ラグナロク神々の黄昏』。多くの命が散るその戦で、最強とうたわれているトールも死ぬ。あまり最初からこの恋を实らせたくなかったのは本心だ。

だが、幼女を哀れんだ。故に、一時でもいいから恋を实らせようと考えたのだ。

……まあ一方で、死んだら死んだで根元天使にして巡回でもさせようか、と考えているのも事実だ。

そんなことを考えていると、幼女が涙目になりながらも、口を開いた。

「……はい！」

……まあ、これも違う形のハッピーエンドなのだろう。

そう思ったとき、全ての元凶トールが、思わぬ爆弾発言をした。

「そしたら、体も大きくなっているだろうしな」

がっはっは、と豪快に笑っている。だから気づかないのだろう、目の前の小さな般若に。

「……お前もか……」

小さい声。だが、俺の耳にはちゃんとその声を聞き取れた。

「お前もか……っ！」

地が揺れる。他の神達も異変に気づく。

「お前もかあああー！ー！ー！！！」

爆発。

大会が行われていた建物は瞬時に倒壊し始め、多くの神を瓦礫の山の中に埋める。

「みんな幼女幼女って、バカにするなああー！ー！！！」

——幼女の怒りの声は次元を越え、世界を越え、神様の耳にも入ったらしい。

その後どうしたかって？

……思い出させんなよ、一言いうなら、世界が壊れかけたと言っ
ておこう。

番外編 幼女天使の恋だけど何か？ 後編（後書き）

感想お待ちしております。

第二章の始まりだけど何か？（前書き）

どうも、金です。

色々立て込んで更新できませんでした。すみません。

題の通りです。

ではどうぞ。

第二章の始まりだけど何か？

皆さんは春と言われると何を思うだろうか。

春のイメージとしては一年の始まり、花の季節、別れと出会い、花より団子などがあげられるだろう。え、一番最後のは違う？ 気のせいだ。

とはいえ勿論意味もなく話すわけでもない。

春だ。スプリングだ。まさについ先月あげた例の“別れと出会い”の別れをし、今から出会いをしようとしているのだ。

ガタンッゴトンッ、という音を聞き流しながら眩しい日差しをすぐ近くにある窓から浴びていた俺は、自分の着ていたローブが掴まれたのを感じた。

隣に目を向ければ自分と同じローブを着ている赤毛の少女がいた。

大体自分よりも3、4cm背が低い。卵形の頭にクリッとした目、サラッ、と伸ばされた髪は1つに束ねられており、旋毛の近くからピョンッ、と癖毛が跳ねている。

「ん、ネギ、どうした？」

ネギ・スプリングフィールド、俺の実妹である。

ネギは少々不安そうにこちらを見てきた。

「兄さん、修行大丈夫かな？」

ああそのことか、と納得しながらコクリと頷く。

「大丈夫だ、ネギならきつと上手くやれるぞ」
そうかなあ、と俯きがちにそう呟く。

仕方がないかと思い、つい8ヶ月のことを思い出した。

○

その日は陽気な天気模様だった。

俺たちの母校、メルディアナ魔法学校ではかなり早い卒業式が行われていた。そこには勿論理由がある。

卒業した学生は世界各地であらゆる職業をして修行に行く。そのため2月の離校日（文字通り学校から離れ、修行の地へ旅立つ日）まで修行の地の母語を学び、その常識や職業の基礎を固める。

中には小学生の年齢で卒業（俺たちのことだが）の生徒もいるのだが、ほとんどというか絶対イギリス国内で修行が行われる。別に法で決まっているということではなく、常識的に考えて小学生を外国に一人で送り出すなんて狂気の沙汰だ——いや、というよりは未成年を送り出す時点でどうかと思うが。

でもそんな狂気の沙汰が行われるとは思っても寄らなかっただろう、原作知識を持っていなかったら。

だって小学4年生の少年を外国、しかもイギリスからとても離れた日本に1人でって。いくら知り合いが経営している学園都市に送るにしても、爺完璧鬼畜じゃねえかよ、おい。

しかしクソ暑いな。こんな真夏日にローブ着て長袖長ズボンで卒業式に出席って。いつか誰かが熱中症で倒れるぞ。せめて礼拝堂にクーラー、もしくは温度調節魔法で部屋を冷やしていて貰いたいものだ。

「兄さん、もう準備できた？」

ぴよこっ、と扉から顔だけ出しているのはネギだ。

髪はネカネ姉ちゃんみたいに伸ばしている。普段は邪魔だからという理由でポニーテールなんかにしていたりするが、今日は卒業式だ。日頃手入れを怠らない自慢の髪は束ねず解いたままで出席するつもりなのだろう。

「ん？ 一応準備は出来たぞ」

「……兄さん……今、背中に隠したものを出しなさい」

「今日のネギは可愛いな、いつもだけど」

「ありがとう。でもお世辞はいいから出しなさい」

「チッ」

そうやって背中から出したのはハサミ。

実は俺も髪がロングだったりする。前世では角刈りだった俺は、どうもロングが性に合わなかった（勿論女性のロングは全然オツケー、むしろオツケー）。

というわけでネカネ姉ちゃんに頼んだところ、クギはそのままの方が似合っているからそのままでもいいんじゃない？　というかそのままでいなさい、とのお言葉。そんなわけねえよ、と反論したところネギが丁度来て、ネカネ姉ちゃんに賛成。

その後、爺さんや婆さん、オツチャンオバチャンやら色々な人に頼むと、どこからともなく現れたネカネ姉ちゃんやネギに拉致られるという始末。今みたいに自分で髪を切ろうとしても丁度その2人が現れて髪が切れないことが続き早9年とちよつと。今日こそはつ、と覚悟を決めたらこの始末だよ！

まあ、長い髪を利用した魔術が使えるからいいんだけどね。

「髪は切っちゃダメだって約束したでしょ？」

へーいへい、と生返事をしたところ、もうっ、と頬を膨らまして俺を睨む。……ネギさんや、そうやっても可愛いだけだぞ。

「それともうすぐ行くからね、トイレとかちゃんと行っておいてよ」

「へーい」

○

「ぐおお、まさか礼拝堂がバンバンに冷えているとは思わなかったぞ。おのれ、謀ったな爺。そのせいで俺がトイレに籠もっている途中に名前が呼ばれてしまったではないか」

「いや、一切そんなことを考えていなかったんじゃが……」

騙されん、決して騙されんぞお。あのぬらりひょんと友人関係であり、本国のMM元老院と渡り合える奴に心を開いてしまったら最後。この身が喰い漁られてしま「おお、そういえばドネットにこの前の出張の時の本国のお土産にシュークリームがあるんじゃが、喰うか？」「わーい、食べるー！」……甘味の魔力に負けました、決して爺には負けてません。

「しかし、お前はお菓子のことになると年頃の反応をするのう、それ以外は規格外なのに」

「いや、親父よか規格外じゃねえというより、俺規格内じゃん。12の時に学校抜け出して自分の魔力によって強制的にゲートを開いて魔法世界へ。カンペ読みながら古代呪文を発動させるなんてシュールすぎて笑えねえし。色々有名になった後、MMからは裏切り者にされて両国から攻撃されながらも反撃して都市やら組織やらを潰す。そんでもって最終的に世界を救った英雄ヒーローになるなんて、正直あいつは絵本の中から出てきた王子か騎士か何かだと思ったぞ、初めて聞いたときは」

「……いや、9歳になったばかりの子供が話すような内容じゃない

じやろ、今の。しかもお前、ナギには及ばないものの一般の魔法使いの魔力の7倍位以上あるし、MMに提出した卒業論文ではアリアドネーで高評価、と言うよりは全魔法学校の論文コンテストの金賞銀賞最優秀賞通り越して、アリアドネー魔法工程賞を受賞するし。そんな奴が規格内じゃったら、他の人間は一体何？」

そう、俺ってアリアドネーで賞を受賞したりしている。第五元素と魔法属性の影って案外似てるなー、と思ったのが最初。影の魔法の共通部分である基礎を読みとっていくと、第五元素と似てる点が幾つかあった（ここで重要なのは第五元素に属する魔法が無いと言うこと。つまり第五元素を召還してそれと基本部分を照らし合わせたということ。めっちゃ疲れました）。

実は魔法世界では第五元素という概念がなかったりする。まあ、あそこが出来たのは古代ギリシャで第五元素といったものを発見される前に創られたからなあ、しゃあないっちゃ、しゃあない。

でも、『魔術』社会では結構有名だ。有名なところで言うのと、ある魔術のインナントカで出る『天使の力』^{テレスマ}なんかだったりする。そこでは天使の召還はAIM拡散力場やら何やらと大規模なものを利用しないと天使の召還は行えない。でもこちらの世界では、大規模ながらとあるワールドよりは大規模じゃないし、危険もないので問答無用で召還しちゃったり出来るんでこのあたりのことを書いてもおk。

ということでそんなことを書き連ねて最終的には、影属性の発展属性ってあるんじゃない？　なんてニュアンスのことを書いて提出。

ちなみにネギは雷属性と光属性の関係性について書いていたりする。このことは既に確約されていたりするんだが、その再実証と

自分の見解を書いたりした。まあ、数学的に言えば確認だな。これでもかなりの高評価を貰ったりする。

閑話休題。

自分的にはMMの奴らは「ハッ、何こいつ。魔術なんか使って書いてんの？ バカじゃね？」なんて反応が来てボツ、と思っていたらどこで読んだのか、アリアドネーの教授が「ヤッベー！ この論文ヤッベーよ！ 世界的発見だよ！」なんてのたまわっていたら何故か賞を受賞しました、チャンチャン。というわけだ。

「いや、俺って魔術も少しカジってんじゃない？ だから偶然見つかったんだって。別に凄くはねえよ」

「はあ、だからといって天使を1人で召還するなって」

まあ、俺には一チートツール（ソロモンの指輪）があったしな。というか、なくても召還できたけどな、たぶん。

「ん、そういえばクギ。お前は卒業証書にはなんて書いてあったかの？」

「ああ、日本で先生だと。あそこって確か労働うんちゃら法だとか色々あるんだろ？ そんなんで出来んの？」

「まあ、この半年で教育職員免許状を取れるくらいの知識は教えるし、運良くここ学校じゃしな、誰からでも教えられるし。実習代わり到下級生の授業を教えることも出来るしのう。ま、お前がちゃんと教えればモーマンタイじゃね？」

「ふうーん」

そんなことを話していると、ばたばたたと外から走る音がする。

間もなくバタンツ、と大きな音をたてて扉が開くと、ネカネ姉ちゃん、アーニヤ、ネギ、そしてウィル——ウィリアム・パーシヴァルがいた。

「こ、校長！」「先生」ってどういうことですか！」

「そして何で私は生徒なのよ！……というか魔法生徒ってなんだと思う、ウィル？」

「いや、それを聞きに来たんですよ、アーニヤ」

「ふむ、先生に魔法生徒か……」

「何かの間違いでは？ 十歳に先生以前に日本に一人暮らしなんて無理です、というか私が無理！ なんでネギとそんなに離れなくちゃいけないんですか！？」

「もう一回学生をするなんて耐えきれないわよ！ そこの青二才よりは頭はいいし！」

「あなたも十分青二才ですよ。まあ頭がいいのは事実ですけど」

「というかなんでクギが何気ない顔で校長室にいるの？」

「ん？ ちょっと文句言いに来た」

「そんなことしてないでちょっとは私たちの校長への文句に付き合いなさい」

「最終的に文句を言うんかい……」

「ま、それが修行内容じゃからのう。というかネカネ、それ私情すぎて笑えない」

なーんてカオスな状況が1時間ほど続き何とかネカネ姉ちゃんを陥落。アーニヤとウィルには魔法生徒について説明をしたところ、アーニヤが、「取りあえず血が騒ぐから行く」このことでウィルを連れて出ていった。……というか、なんであいつあんなに偉そうなの？　というか修行行かなかったら『立派な魔法使い』マギステル・マギになれんよ？

○

まあ、あんなカオス空間を体験したらそりゃビビるよね。あ、アーニヤとウィルはここから離れた席にいます。どうせあいつらイチヤイチヤするんだし、邪魔しちやいかんしな。

「それと兄さん」

「うん？」

まだ不安なのかな、と思ってネギの方を見ると、何故か目からハイライトが消えている。……え？

「変に女の子を惚れさせたりしたらだめだよ？ ……兄さんは私の
なんだから」

その後クスクスクス笑うネギに恐怖しました、まる。

第二章の始まりだけど何か？（後書き）

感想お待ちしております、というよりお願いします。

麻帆良に到着！ でも早々に戦闘だけど何か？（前書き）

すみませんでした——！！

2週間近く放ってしまいました……。

勿論訳があつて、「テストだからPC禁止」と父の所為でなんです！

しかしその分長めに作れました。

ではどうぞ。

麻帆良に到着！ でも早々に戦闘だけど何か？

「うう、さみい。日本だからどうせイギリスより暑いに決まっている、と思っただらこれだよ」

「だから薄着はやめといった方がいいよってあれほど言ったのに……」

日本の寒さを忘れてしまっていたクギです。しかし、2月の日本ってこんなに寒かったか？ ……そういえば今2004年だっけ？
まだ温暖化とかあんま言われてなかった時期か。

「あ、そう言えば待ち合わせ場所ってこの辺りか？ 時間より随分前に着いちまったけど」

ということで麻帆良の女子校エリアに到着。待ち合わせ時間よりちょっと前くらいを指していたわけだが、運一良く（悪く）ポンポンと乗り換えがスムーズにいき、待ち合わせの30分ほど前に着いてしまった訳だ。

「うん、そうだね。……でもちょっとおかしくない？ アーニヤとウィル君の乗っていたバスと一緒に、一緒の集場所なのに2人と会わない。それにこの時間帯は出勤時間だから人がいない方がおかしいし」

その通り。辺りを見渡しても人っ子一人もおらず、それどころか小鳥のさえずりも聞こえない。まあ、勿論その訳がちゃんとあるんだけどね。

「ででん、ネギ君にクイズです。現在この辺り一帯で大規模魔法結界が張られています、一体なんでしょうか？」

「え？ ……うーん、まず人がいないから人払いつてのは分かるんだけど、他に2つあるね。1つは忘却術に似てるな……これって記憶改竄？ ……もう一つは魔法防壁に似てる。……だけど魔力とか気、物理的なものから守るようなものじゃなくて……もっと限定的……なんだろう、兄さんに前見せてもらった滅霊術を思わせるような……感情から守る防壁？ なんだろう、分かんないよ」

ふっふっふー。ネギにも勿論魔術をちよつとかませています。しかし残念なことにネギの才能は魔法だけで魔術には一片も存在しなかったり。まあ、別にいいんだけどね。ちよつと知識だけでも教えていた方が後々のためになるだろうな、もし才能があれば行幸行幸、なんて考えていただけなんです。

「そこまで出来たんだったらレポートでAくらいは余裕で貰えるな。実際ネギの知らないものも幾つかあったし。まず人払いは正解。次に記憶改竄のところだけど、記憶じゃなくて魔力や気っていったオカルトへの認識を改竄するもんだな。例を挙げるとすれば、箒で空飛んでもワイヤーかCGと思うし、目の前で魔法使ってもマジックだと思う。ただ、直接危害を加えられると魔法ってやっとなんて認識する」という代物だな」

はつきり言えば原作の認識阻害よりたちが悪い。目の前で魔法や魔術を使っても、なんの違和感も疑問も感じないものだ、これが。つーか、原作よりここの結界凄くねーか？ 認識改竄の結界もそうだが、魔法動物への能力の制限の結界もあるし、結界内の監視用結界やら進入感知結界やらなんかもある。

「さすが麻帆良、ていつたところだね。魔法バレの可能性を低くしている」

んま、俺らオカルト関係者からすれば嬉しいんだけどね。ほら、魔法バレなんて一切起こらないし……いや、何人かはこの結界も効かねえんじゃねえか？　もしかして。ま、解説を続けるか。

「んで最後のだが、惜しかった。感情から守る防壁ってのは中々良いところを突いていたな。確かに感情に関するオカルト的な力なんだ。……瘴気って知っているか？」

瘴気。

古代ギリシャのヒポクラテスが提唱した病気を引き起こす気体状の物質で、19世紀頃まで考えられていた。

ミアスマ、とも呼ばれており、ギリシャ語では汚染や穢れを意味している。

また前者によると悪い土地、悪い水、悪い空気より発生し、一悪い空気（瘴気）は一悪い水（沼地や湿地）から発生し、人を病に冒す。そして冒された人間もまた、瘴気を発し周りの人間をも感染させる、なんてものだ。

「さてと。瘴気はところに出てくるんだがな。その中でも最もと言っているほど密度の濃い所はな、——地獄なんだよ」

そう、地獄だ。まあ、ここで説明をする瘴気はこの元来の考えとはまた別物なのだが。

悪い空気と言ったけど、これは最近の「空気嫁」、間違った「空気読め」との意味の空気と似ており、いわば負の感情によるものであり、病院や学校、処刑所に墓場などの負の感情が集まりやすい場所では瘴気が発せられる。

それによる影響はお化けが出たり、突然人体模型が動き出したり、健康だった人間が突然死んだり、とかそういったことがある。これによって負の連鎖が起こり、その瘴気はまた一層強いものになる、といった具合だ。

勿論これの対応もちゃんとあり、裏の巫女の祓いや禊ぎ、悪魔祓いの聖水による浄めなんてものがある。……この例を見て分かる通り、魔法使いはこんなこと出来ません、というかそんな魔法ありません。

閑話休題。

そしてここは麻帆良学園都市。いわば負の感情が出やすい学校という施設の集まりな訳で、瘴気なんてもの凄いことになっている、だろう（初めてきたんで分かりません）。

そしてここにあるのは、世界樹『神木・蟠桃』。ただでさえ魔獣や妖怪の類が出るというのに、それに負の感情の集まりである瘴気が出てきたら、たまったものではない。

……まあ、答えを言ったようなものだが、何故人払いの魔法と瘴気からの防壁なんかの結界が作動しているか。

——KURURURURURURU……

「勿論魔獣か妖怪のどっちかが出ているからなんだよなあ」

目の前に現れたのは体長200cmほどの、真っ黒い液体状のゴムを無理矢理カマキリのような姿に形どったモノが2つ。刃と刃をぶつけても全く金属的な音は鳴らず、グチャグチャと汚い音と共に黒い物体Xを辺りに散らす。こちらに來たであろう道筋にも黒い物体がある。

その黒い物体からは煙が立ち上り、周りにある草々を枯らしていく。

「うわ、かなり有毒性の高い瘴気なことだ。精神汚染よりはまだマシだけどな」

右肩の辺りの宙からは黄金の柄が出ている。『死メモメント・モリの舞踏』だ。

ネギはというとシュツ、と布の中から1本の杖を取り出す。

「兄さんは右の方をお願い。私が左の方を殺る」

「おうおう、頼もしいことで」

柄を引き抜けば、刀身が陽の日を浴びてきらびやかに光り、黄金の剣が現れる。

「「さあてと、」」

俺は切っ先を、ネギは杖先をそれぞれカマキリに向ける。

「「それじゃあ、狩りを始めようか」

○

「いくか」

と、かつこよくキめたものの少々頭を悩ませてしまう。敵さんはドロドロしているからある程度タイプは予測できる。1つ目はスライムのような特定の形を持たない不定型、2つ目は霊がナニかに取り憑く憑依型、本体が他にあり遠くから操作する、または一つの大きなものから分裂して出る分身型。

どれもこれも対処が難しくてたまらないものばかりだ。

不定型は切っても斬っても死なない。よくそういうものには核がある、だとかお決まりの攻略方法があるのだがそんなものは勿論無く、方法としては1カ所に集めて腐蝕に強い金属類の入れ物に入れて蓋をする、一気に全部蒸発させる、穢れを取り払って普通の泥水にする、なんて方法があるが、どれも難しい。

1つ目の方法はまず液体状のものを集めるのも大変なのだが、入れ物に入れる際、もし不定型に触れてしまったらそのまま溶かされるか、口や鼻を覆って窒息死させられる。2つ目の方法は一気に蒸発させるには魔法、魔術にはそれなりの威力を求められるし蒸発には火か雷、もしくは温度操作に関するものが必要になる。しかも蒸発させた後に空気状にまき散らされる毒素（個体によっては一呼吸だけで致死量に至るものもある）を吸ってしまい、倒したのに死ぬ、なんてことも多い。

憑依型は実体を倒すのには問題ない。だが、倒した後が問題なのだ。その名の通り憑依するこのタイプは制約が少なく、色々なものに取り憑くことが出来てしまう。そのため、実体を倒したらまたは自分が憑依される、もしくは仲間が、あるいは関係のない一般人が、なんてこともありえるある種恐ろしいタイプの一つである。やはりこれの倒し方もあるが、かなり難しい。1つが神鳴流の奥義の一つ、残魔剣・弑の太刀なんかの霊のみに効果を発揮する技を持って倒す、もしくは憑霊を祓って浄化する、なんて方法がある。

霊のみに効果を発揮する技の多くが奥義であり、才能が無い者は決して得られず、才能があっても習得が途轍もなく難しい。さらに憑霊を浄化させる方法なのだが、まず穢れを取り払うにはそれなりの準備や詠唱が必要だし（故に即席での行使は非常に高レベルでそれなりの実力を必要とされる。ただし、穢れから防ぐのは簡単で、見習い程度の実力でもそれなりの穢れから守れる結果や加護が出来る。これは殺すと守るの大きな違いといえる。）専門の道具はそれなりにコストがかかる。聖水だって1回で出来る量はそこまで作れないし、神父の1年以上の祈りが必要で、効果が効く期間が非常に短いのだ。神道での玉串だって植物から切り取ったものだから、枯れるまでの時間が短い。

分身型はこの中ではある程度マシなものだろう。説明でもあったように大きく分けて本体が別で遠隔操作によって分身を操るものや、一個体から分裂していったその数を多くしていくものの2つがある。しかし、最終的には全滅させればよいだけなのものすごく簡単。ただ倒していけばいいんだから——まあ、数がもの凄いいことになっていたら話は別なんだけど。しかもタイプによっては憑依型と複合している個もある。その場合は……メンドいというか、バイオハザードが起こるぞ。

「ほーれ、もう一丁だ。はらいたまい、清めたまう」

——K I I A A A A ……

ズチャッ、と崩れ落ちるカマキリの形をしていたモノ。

完全にドロドロの真っ黒な泥水と化したモノからは有毒性の高い真っ白な煙を発している、が周りの物には被害がない。勿論、俺が対処しているからだ。

——毒を持って、毒を制す。

空気に、俺も毒を散布したのだ。その毒の名はカンタレア。

中世イタリアのボルジア家が政敵の暗殺に使用していたとされる白い粉末状であり、量によって死期を自在に操作できる毒薬である。

勿論俺は作り方など知らないの（ラジエルの書を使えば分かるのだが、現在は使用縛り中。そっちの方がおもしろいし）現在のボルジア家、アヴォガドロ家に行って交渉した結果、日本円に換算すると100万円ほどで交渉に成功。

実はアヴォガドロ家、というかボルジア家は魔術との繋がりがあ、り、魔術でも特に古今東西の毒について色々研究しており、魔術界でも結構有名だったりする。

見た目普通のおっさんであるアヴォガドロ家家長のオスカル・アヴォガドロさんは結構好印象だったので定期的に毒を買うことにより格安で購入。

現在では技術も昔の物よりもバリエーションがある。

粉末状の物は勿論の事、液体に気体、ブロック状のお菓子の形をしたものもあり、死期を操るものから死体から検出されないもの、現在の状況のように毒を殺す毒なんてものもある。そのほかにもあるが、中々エグい代物が多い。実はオスカルさんは以外と腹黒だったりする。

やることがなかったのでネギの観察でもしようかと思い、視線を横に向けるとすでに終わっていた。

杖の先からはバチバチ、と放電している。

ネギの得意とする魔法は原作通りの雷、光、風の他に雷の能力を上げるために習得し向上した水、俺の隣に何時もいたので自然と身に付き、さらには己の光を強める為に訓練した闇の2属性もあり、計5つとなっている。

多様な属性を得意とする魔法使いはどれも手つかずで、全て中途半端、もしくはいずれかを捨てて1つを集中的に特化させる場合が多い。原作のネギも最終的には他も満遍なく修行していたが雷に特化していた。つまり、3つからはもう多い、と言っている位なのだ。

しかし、ここまで使いこなせるようになったか、と心の中で驚嘆している。

空気中の毒を風で集め、光で瘴気を浄化、雷で毒素を分解し無害なものとしている。それでも残る毒は闇によって侵食され、ほとんど、いやすでに毒は残っていない。

しかもそれらを全て同時に行い、相反する光と闇を上手く協和させているところはアリアドネー教員一同も目を見張るであろう。ここまで出来るのも相当の熟練者した魔術師位でなくてはやれないのだから。

——親父^{ナギ}とは違う種類の天才。

穢滅魔法をバカスカ撃てる火力馬鹿ではなく、その膨大な魔力をいかに効率よく運用し状況に見合ったことをできるタイプ、つまりどんな種類でも一流になれる万能タイプだ（とはいっても、やはり穢滅魔法をバカスカ撃つのは厳しい）。

原作のネギはここまでの域には達することは出来ず、『^{マギア}闇の魔^{エレベア}法』というドーピングに頼るしかなかった。

まあ、可愛い妹のためだ。一肌でも二肌でも脱ぐくらいたやすい。これくらいなら、アーウェルンクスシリーズに纏めて襲われても勝つことは出来ないが、撃退、もしくは撤退することは出来るレベルだ。

つまるところ、ネギ魔改造計画のワンステップ目の終了、といったところか。

「君たち、大丈夫か!? この辺りにカマキリの形をした妖怪を見なかったか!？」

声の方向を見ると、スーツ姿の黒人を見る。人払いの中に入れると言うことは関係者なのだろう。

「え? ああ、あれですか。もう浄化を完了しましたよ」

「は？」

黒人は素っ頓狂な声を出す。しかし流暢な日本語だな、よく使いこなせる。

「すまない、もう一度言ってくれないか？」

「だから、すでに浄化を完了しました。禊祓もしたんで瘴気汚染の心配もないし、あとは壊れた設備の補修位じゃないですか？　ところで、理事長室はどこですか？　早めに挨拶をすませたいんですが」

「はああああっ!？」

全く、うるさい人だ。

麻帆良に到着！ でも早々に戦闘だけど何か？（後書き）

感想と評価は力の源です。

もしよければ一言でもいいんで感想、評価をお願いします。

キレルんだけど何か？（前書き）

どうも金です。

今回は評価ポイントが上がっているのを見てテンションがバリサ
ン上がっていつもより早く投稿できたはずなんですが……まさ
かデータが消えるとは。

ということであつと当初より文章が少なかつたりします。まあ
いつもよりは多いんですが。

矛盾点などがあるかもしれませんがそこを教えていただけたら
嬉しいです。

それと題名を変えました。

ではどうぞ。

キレルんだけど何か？

「お会いできて光栄です、クギ・スプリングフィールドさん。論文を読まさせていただきましたが、とても素晴らしかったです。魔術を使用して論証をしている部分が私は好きでした。今度私の影魔法を見ていただけませんか？ まだ未熟なもので、『――黒衣の夜想曲（ノクトウルナ・ニグレーディニス）』は発動できるものの至らない点が多くって」

マズいマズいマズい、こちらに向けられている冷たい5つの視線は確実に殺気を込められている。いや、正確には4つか。1つは目の前の彼女、残りの3つは俺へだ。今すぐにも、という意気込みが大変分かっていて先生、とっても――感激（寿命がマッハ）です。

なんでこんな事になってしまったのだろうか、俺は少し前の記憶を思い返してみる。

○

「ほっほっほ、成る程成る程、君がクギ君にネギ君かの？ 噂も話もよく聞いておる」

学園長室には60名を超える魔法関係者、というより『裏』の関係者が集まっていた。20余名はスーツ姿だったり学生服と言った制服なのだが、中にはローブをすっぽり被り肌が一切見れない者にシスター服の女性、和服を着る優男にツナギを着るいかにも堅気と

言った容貌の男等々、異彩な服装の人も大勢いる。

「あの、すみません。アーニャとウィル君はどうしたんですか？」

そう、ともに日本にやってきたあのバカップルがこの場にはいなかった。ウィルは兎も角、アーニャは生真面目な性格なので寄り道（以前に早朝だからどこも開いていないのだが）などしない。となると何故遅れたのか、疑問が思い浮かぶだけで。

「ほっほっほ、安心なさい。どうやら彼らは間違えて1つ前の駅で降りたらしくての、すでにこちらの先生達と合流してこちらに向かっているそうじゃ」

「ありがとうございます」

ほっ、とネギが安堵して1つ大きく息を吐き出す。学園長は自分の髭をさすりながらほっほっほ、と笑う。

「さてと、少々問題があったが無事解決できた事じゃしの、これで解散、と言いたところじゃが折角こう集まっているから自己紹介でもするか」

「では俺から。……ごほん、本日から麻帆良学園女子中学部、数学担当になりましたクギ・スプリングフィールドと申します。まだ年端もいかず、至らない点も多いと思うのでサポートをよろしく願います」

「じゃあ僕も。初めまして、この度この学校で英語の教師をやることになりました、ネギ・スプリングフィールドと申します。よろしくお願いします」

パチパチパチと盛大な拍手を浴びながら、『裏』の関係者を一瞥する。

——ふむ、やっぱりほぼ半数が転生者か。

転生者の魂っていうのはその世界の魂を逸脱している場合が多い。チートを貰う人が多いからな、一部品（能力）を付け加えたり一構造（肉体）を変えなくちゃいけないし。もしチート能力を貰わず普遍的だったりした場合でもやっぱり基盤が所々違う。

しかし予想していたとはいえ、これほど多いとは。いや、転生者もだけれども、その転生者の中でも取り分けアンチな方が多い、あくまで予想だけど。

視線に悪意を込められていたり、拍手をせず睨みつけてきたり。中には武器に手をかけようとしている奴すらいる。

……おいおい、そんなにネギを殺したいのか、こいつら？

まあ、やられたら殺り返すだけだけどね。こうドバーツ、ていう感じに。

いや、死ぬよりもっと酷いことを、なんて考えていると近衛 近右衛門が口を開いた。

「では後は帰るもよし、彼らに挨拶をするもよしとする。では解散」
ガヤガヤと辺りはうるさくなり、『裏』の関係者が近づいてくる。

「初めまして、高音・D・グットマンと申します」

こうして始まりへと戻る。

○

うん、特に分らん。いやだってそうじゃん。特に悪いこともしてないし、まあ視線3つの訳は何となく分かります。え？　ほとんどわかってんじゃないって？　その通りだったり。

「は、ははは。そんなに褒められたもんじゃないんですけどね。とか論証しているところが好きって、魔術に興味でもあるんですか？」

「ええ、少々あります。ですが修行の間は無理なんですけれど」

彼女の制服を見て理解する。

聖ウルスラ女子高等学校。

キリスト教、その中でも カトリック 旧派を採用している、というよりは採用を強要されている。

これにはMMとキリスト教の関係から話さなくてはいけないだろう。

ヨーロッパは多くの神話に恵まれ、また数多く多様な魔術に溢れていた。北欧神話にケルト神話、ギリシャ神話などがその最たる例

だろう。そしてその中には勿論キリスト教もある。

だが、おかしくないようでおかしい。

北欧神話、ケルト神話の魔術は神の力や神話上存在する魔術を理解、もしくは使用する。

それは数多くの神に宿っている数多くの力を個別に、最大限に使用するからこそ発揮することが出来る。

だが、キリスト教はどうだろうか。

一神制であり完璧無欠であり強力あるが故に、人の手に余るものだ。1つの現象を起こすのに多くの魔力を使用するのであることが予測できる、といよりはまず魔術を使用する前提で会話をしていることからおかしいのだが。

キリスト教では魔術の行使は禁止されている（あくまで行使禁止であり、知識として持っているのは全く問題ない）。これは聖書に書かれていることであり、その書かれているのは宗祖であり、その宗教の絶対的存在であるイエス・キリストが言ったことなのだ。

故にキリスト教は魔術方面では途轍もなく弱かった。ユダヤ教と独立するなど夢のまた夢であった。なぜなら独立したら最後、周りにいる数多くの一 敵（異教徒）に滅ぼされるのは目に見えて分かることなのだ。そんな弱い宗教に竜殺しの伝説が出来るなどあり得ない。

ではなぜ、キリスト教は独立でき、こうも広められたのであろうか。

答えは魔法である。

あくまで魔術は禁止であるのだが、魔法禁止されていないのだ。

メガロメセンブリーナの元となった大国、メルギナメセントブリタニアから来た使者とキリスト教の初代教皇との出会いが全ての始まりだ。

ここから少し脱線。持論だがイエス・キリストの治療や悪魔退治といった伝説は誇張されている所もあるが、魔法を使用したのではないのだろうかと考えている。つまり、聖母マリアはメルギナメセントブリタニアから来た一族の一人ではないのか、なんて考えている。

閑話休題。

そのことにより、力を魔術を使わず、急激につけたキリスト教はユダヤ教と独立。そして魔法の力に目を付けたローマ帝王はキリスト教の教えをローマ帝国内に広げ、その真の黒幕であるメガロメセントブリタニアに頭を垂れることで魔法の使用を許可。そうしてヨーロッパはメガロメセントブリタニアの支配下となり、キリスト教は世界で強大な権力を握ることが出来るようになったのだ。

と、ここでまた脱線だが、キリスト教がメガロから与えられた権利をいくつか紹介。まず、旧世界での魔法犯罪者の取り締まり。これはかなり大きな権力で、このことにより数多くのメガロへの反乱を考えていた国王がキリスト教から破門と言う形で逮捕、及び処刑になった。

2つ目に魔法生物の駆除。ただ面倒事を押しつけただけ。

そして3つ目に魔法世界でキリスト教の教えを説くことの許可。

4つ目は魔術を使用するもの、中世では通称魔女と呼ばれたものの処刑。反乱する人を少なくしたかったただけだろう。

なんてことぐらいだろうか。

閑話休題。

その後、13課やら宗教革命やらなんやかんやといろいろあるが世界のほとんどをキリスト教で染めることに成功。

そして麻帆良の占領へと繋がる。

そうすれば必然的にキリスト教の教えを広めるために教会及びクリスチャン学校の設置を強要したのである。このことから分かる通り、MMⅡキリスト教（正確には旧派）という図式が分かる。

そして設置された聖ウルスラ女子高等学校は入学し卒業するまではキリスト教徒であることが求められる（卒業するまでなので卒業後は仏教徒でもブードゥー教徒でもなれる）。

なので彼女は卒業するまでは習ってもいいが、使用することはいきないのである。

「ま、卒業したらいくらでも教えますから。楽しみにでもしいてください」

「ええ、そうさせていただきます」

彼女がそう微笑むとさらに視線の殺気が……。

「兄さん」

ソクウツ、と背筋が冷えるのを感じた。

錆びたブリキのロボット人形のようにギギギギ、とまるで音が
出ているかのように後ろを振り向く。

途轍もなく笑顔なネギがいた。

「兄さん、この人は？」

その一言一言にはまるで言霊が込められているかのように俺に巨
大なプレッシャーをかける。ここで1つでも受け答えのミスをした
ら殺される……！

「あ、ああ。この人は高音・D・グットマンさんだ。聖ウルスラ女
子高等学校の生徒さんだ」

「初めまして、ネギさん。高音・D・グットマンです。あなたのお
兄さんのファンなんです」

ギャアアアーー！！！！？？？　なんてことを！？　ヤバい、殺
される！　俺とグットマンさん、殺される！　正確には千の雷とか、
えいえんのひょうがとか、あの辺りの千滅ならぬ緋滅魔法で殺され
る！

「あ、そうですか。ファンの方なんですね」

……て、あれ？ ネギから殺気が消えた……？ どういうことだ？
いつもなら「この泥棒猫め！ 兄さんから離れろ！」とかいつて緘滅魔法ぶっ放すのに。

「ええ、そうなんです。あ、よろしかったらネギさんも魔法を教えてくださいませんか？ どうも影魔法以外はあまり上手くできないものですから」

「ええ、いいですよ。でも兄さんの方が上手だからあんまり教えられないかも」

え？ え？ どういうこと？ なんかいきなり仲良くなっているんですけど。あれえ？ なんかネギがいつもと違う……？

なんて頭を抱えて疑問を浮かばせている俺であった。

○

挨拶も終わりが校長室から出ていくのを途中から来たアーニヤとウィルと一緒に見ていた。

「ほっほっほ、では今日から生活するところを君たちに教えなければの」

お、遂に来たか、原作一番最初と言っていいフラグ、住居フラグ。

「うむ、今少々空き部屋が少なくての。どうしたらいいものかと考えたんじゃが、生徒と一緒にのへ「学園長！ 私は反対です！」「俺も反対に一票」む」

僕も、我も、なんて反対の声が所々である。

仕事のある先生方であり、そうでない先生や魔法生徒は未だ残っていたのである。

……所詮エゴの集まりにすぎない転生者どもめ、ギャーギャーとうるさい。

人はそれを同族嫌悪、ともいう。だがまあ、うるさいのに変わりはない。とはいうものの『こんなの絶対オカシイYO!』なこともあるので別に反対の意見を出してもおかしくはない。

「むう、じゃが空いている部屋はほとんどないし、正直12歳にも満たない少年少女を1人2人で住ませるのも気が引けるしの」

じゃあ日本へ修行に行かせるな！ というツツコミは話を根本から崩させるからだめですか？

「じゃあ面識のあるタカミチの部屋は駄目ですか？」

今はここにいないタカミチだが、結構いい仲だと思う。

「うーむ、別にいいんじゃないが」

ん？　なんでここで悩む？

「タバコ臭いぞ、あの部屋」

……なるほど、そういう落とし穴は見抜けなかった。たしかアイツはかなりのヘビースモーカーだったと覚えている。

「しかも一人部屋じゃから狭いし、彼はかなりのヘビースモーカーじゃからの、副流煙が怖い。前に部屋に行ったときはかなり散らかっていたのう。カップラーメンの容器が洗台から溢れていたのを見たときはつい怒鳴ってしまった」

アイツ、家事スキルの前に生活スキルがゼロ？ ダメダメじゃん。

「というわけで当初彼に頼もうと思っていたのじゃがその抜き打ちテストの結果、除外させて貰ったわい」

なんか原作読んでいた時は「このクソ爺め！」なんて思っていたけど、タカミチよりよっぽどマシな常識人の苦労人なのでは……？

「そうすると彼らと面識があるものはいなくなるしのう」「あの、俺は一応家事全般出来るんで、一人暮らしは出来ますよ」……クギ君よ。家事が出来る出来ない以前の問題なのじゃよ」

そう諭すように学園長が口を開いた。

「まず成人どころかまだ小学生の君たちを大人の保護下のもとで暮らさせないところから、大人として失格してしまうのじゃよ。もしもの時、魔法など使っても解決できないようなことが起これば大人がいた方がいいことの方が多い。じゃからどうか一緒に暮らせなくてはいけないのじゃよ。ここで暮らす生徒たちの寮にも寮母という保護者がおるしの」

ヤベエ、爺が途轍もなくいい人に見えるのは俺だけだろうか。

「学園長！ それ以前になぜ小学生ほどのスプリングフィールド達を教師として修行に來させたのですか！？ そこからおかしいんです！」

そこにいたのはスーパーテンプレな転生者だ。……魂なんか見なくてもわかります。銀髪にオッドアイの美形男子なぞ転生者以外誰がいる。

「いままで我慢してきましたが、もう限界です！ 全部言わせて貰いますよ！ まずここの認識阻害の結界。人の心や記憶をイジるなご人としてどうかしている！ それに女子中学部の21Aの件！ 魔法の素質がある者ばかり集めて、その双子に担当させようとしているのはもう発表されていることだから分かっています！ どう考えても未来の英雄を育てるために集めた、いわばもう魔法に関わることを前提にしたようなクラスには我々も疑問に感じています！ 学園長、どういふことなのです！？」

そーだそーだ、とがやがやとうるさくなる学園長室。そのことに教師になるべくして來たネギはプルプルと下を向いて震えている。

……カチーン、オラハオコッタゾー。

「答えてください、学園ちょ「ギャーギャーギャーうるせえな、おい！ さっきから黙って聞いてりゃピーチクパーチク喚きやがってよお、おい！ テメエらのアタマンナカ沸いてんじゃねえのか、ああ？」っ！？」

というわけでメンチ切りました。別にいいでしょ？ うるさいし、ネギ泣かせたし、明らかにアンチしようとしていんの分かるし。

「……確か君はクギ・スプリングフィールド。それで、君のその暴言の意味はちゃんと分かっているのかい？」

「Of course。分かってねえで言っているとも思ったか？ このバカな厨2の単細胞？」

「なっ！」

くすくすくす、と小さな嘲笑が起こる。そのことに顔を真っ赤にする厨2の転生者。

「あの、クギ君……？」

恐る恐るといった感じで聞いてくる学園長。

「ああ、大丈夫ですよ、学園長。この単細胞共くらい簡単に論破してやりますんで」

後ろを見ればアーニヤが腰に手を当てこう言い放った。

「ネギを泣かせたあのFool共を論破してその分泣かせてやりなさい、『教授プロフェッサー』殿！」

ネギも目を腫れさせながら小さく呟く、だが、十分聞き取れる音量で。

「やっちゃんえ」

「それこそOf course!」

全く、ここに来て一番最初に授業する相手が教師とは聞いてない。

「では、授業を始めようか!」

キレルんだけど何か？（後書き）

感想とか評価を貰うとテンションゲージが三つくらい埋まります。
感想、評価をお願いします。

論破するんだけど何か？（前書き）

どうも、金です。

夏休み中、調子乗って本買いまくっていたら財布にはアルミの塊が4つ。

ホライゾンは買えるのか……！？

なんてことより、

感想やら評価をしてくださってありがとうございます！ めっちやテンションアゲアゲ！（死語かこれ？

ということ、ではどうぞ。

論破するんだけど何か？

「んじゃあ、一番最初の質問から答えようか。なんでここで教師をすることになったか、か。単純明快、幼稚園児でも分かる。精霊に決められたから、以上だ」

『え？』

思った以上に短く言われたからだろう。驚きの声を上げているのが分かる。

「補足としては各魔法学校と契約を交わしている運命と未来を司る精霊に生徒達の生活態度や成績などからその生徒にあった国や地域と職業を決めて、卒業式の時に渡される卒業証書に修行の場所と職業を記す、という役割だな」

運命と未来を司るなんて大層なものだが、実はそれほどものでもない。未来予知出来る精霊もいるが、それを使役するには多くの魔力が必要だし、大半が気まぐれ屋なので使役どころか契約も無理なのでそれに準ずる、分析によって未来を歩むのに最も良いとされる道を教えるようなタイプの精霊だったりする。

「学園長に質問だ。単刀直入にいうが、その精霊を操ってこの教師にさせたのか？ 最近いろいろな噂もあり、あまりにも話が出来すぎている。メルディアナ魔法学校と学園長は友人関係と聞く。故にこの魔法の素質を持つ生徒の多い学校の教師という選択肢が出る。それにここは英雄を育てるにはいい環境だ。そうだろう？」

大柄なスキンヘッドのサングラス男がそういつてきた。……こいつは転生者じゃないな、しかもアンチというよりは純粹に疑問に感じている、といった辺りか。

「おいおい、今は俺がお前らに教えているんだ、俺に質問しろよ。んでその質問だが、答えはN Oだ」

「では何故だ？」

「理由は簡単。つーかバチカン発行の魔法条例文をちゃんと見ろよ。書いてあるぞ、『運命と未来を司る精霊を操り、卒業証書に書かれる修行の場、及び職業の変更を禁ずる』ってそんな感じに。しかも精霊を操るとその卒業証書に書かれる時の魔法術式が人工的な物になる。そうなるとその卒業証書と魔法学校を監視するバチカンの人工精霊、じゃなくて人工天使が管理係に通達して拷問道具と逮捕証持って13課が来るぞ。しかも人工天使を操ろうとすると管理係に通達されるし——ばれないようには出来ないからな、あれ——、管理係の担当者は全員厳格な人が選ばれるし、今の教皇、めっちゃ真面目な人で確かM Mからの理不尽な要請を何度も断るくらいの人だから圧力をかけて不正を行うとは到底思えない。なんならこの『裏』を知るシスターにでも聞いたらどうだ？」

13課とは旧派の、いわば魔法犯罪者の逮捕及び魔法生物の駆除を担当する課であり、エリート中のエリートが集められた先鋭集団。旧世界出身の魔法使いが最も恐れている存在といってもいい。

ただ、そういう先鋭のみ集めるため万年人員が少なく、捜査のほとんどをM M警察に任せているのはご愛嬌、といったところか。

「だから否定できる」

「ふむ、理解した。ありがとう」

そういうと壁へと下がる。

「んでどうせ労働基準法がー、とか職員免許を持ってるのかー、とかその辺りのことは勿論法律を守っているぞ。13歳未満でも政府に届け出を出せば別に仕事をやっても問題ないし、職員免許はMMとアリアドネーの連名で発行しているやつ持ってるし」

まあ、政府に通すのも結構暗いところでのやり取りなんだけどな。話すとうるさくなりそうだし黙っててもいいか。

「あと住居の問題だが……、どうしたらいいんですか、学園長？ 大半の方が反対なんですが「当たり前じゃないか！ 教師と生徒と一緒に暮らすなんて言語道断！ それに男子と女子が一緒に部屋になるなんて駄目に決まっている！」……らしいですよ？」

「うむ、その事に関してじゃがな、しずな君入ってきなさい」

「失礼します」

そこに入ってきたのは20代の眼鏡をかけた巨乳教師系美人、だ。

「初めまして、クギ・スプリングフィールド君、ネギ・スプリングフィールドちゃん。しずなよ、よろしくね」

「彼女と一緒に暮らしてくれ。彼女は魔法のことも知っているから大丈夫じゃよ。それに、のう」

「へえ、驚いた。彼女、ホームクルス 人造人間 ですか。しかも彼女の動力源は『神木・蟠桃』の魔力、溜まっている瘴気の解釈を変えて『負の感情があるのは正の感情があるから故に』って具合にして、受け答えがひどく機械的な人造人間に感情を持たせるなんて……これ、アリアドネーでも実験されているらしいですけど一回も成功したことがないんだとか」

「うむ、流石『プロフェッサー 教授 』と呼ばれるだけのことはあるのう。まあ、しずな君が出来たのは偶然じゃよ。ほっほっほ」

人間に最も近い人造人間、て辺りか。しかし凄いな。俺、さすがにこんな解釈の仕方は思いつかないぞ。

……まさか爺、天然チート？ ありうる。

「それでの、ちょうど一ヶ月後に結構大きめなマンションができるからそこにしずな君と一緒に暮らす、というのはどうじゃ？ それまでは結構狭いがのう。数週間の辛抱じゃし、いいかの？」

「ありがとうございます、それでいいよな……じゃお願いします。んじゃ次の質問だな。認識阻害結界についてだな。まず認識阻害結界と言っている辺りから間違っている。あれはもっと凶悪なものだぞ？」

目を見開いて驚いている奴らがめっちゃいるんだけど。こんなに馬鹿だったのか？ 原作丸飲みにし過ぎなんだよなあ。自分が住む所なんだから、ちょっとは結界ぐらい解析しろよ。安心して眠れないだろ、普通に考えて。

「あれは認識改竄結界。魔法無関係者目の前で魔法を使ってもマジ

ツクやらなんやらに無理矢理阻害じゃなくて、上書き、つまり改竄させる結界だ。何故か、魔法バレへの予防だな。ただでさえ『神木・蟠桃』っていうデカくて日本では絶対生えないような木があるし、瘴気による魔獣や妖怪の出現で魔法バレの機会が多いし、さらには西からの攻撃、MMへのテロ目的とした攻撃、日本に存在する多くの魔術結社からの攻撃、と。こんなに多かつたら認識阻害の結界の1つや2つ、張らない方がおかしい」

「ではなぜ認識改竄などというさらに強力な物を張ったんだ!？」

さっきの厨2が突然怒鳴った。うぜー。

「そりゃお前、ドンパチ大魔法やら超目立つ攻撃ばっかするからだろうが。普通に考えて」

顔色が変わるのがよく分かる。一気に赤から青に変わっているぞ、こいつ。他のやつもちらほら見当たる。

「ここに来る前に資料を見せて貰ったけど、すげえな。才能のある奴らが大量にいるのが分かった。でもな、馬鹿なんだよ、お前ら。そりゃ千の雷だとか、そんなもんばっか撃ってたらいくら認識阻害の結界があつたとしてもほとんどの確率でバレる。だから認識改竄なんてさらに強力なもんに切り変えなくちゃいけなくなつたんだよ」

全く、自分の責任だとは全く思っていない辺りがエゴの集まりを分かせるところだな。同族嫌悪だな、イヤだイヤだ。

「んで最後の質問だが、なんで女子中学部、しかも2ーAだけのことを言っているんだ？」

こいつらがなぜか2ーAだけを指摘したとき、ここまで馬鹿なのか、と思わず頭痛がした。

「各学校、各学年にそういうクラスはあるぞ？ いわば魔法の才能がある奴を、というよりは『裏』の力を持っている人を——といったほうがいいのか——集めたクラスが。何故このような処置を施したのか、さっきも言ったとおり魔法バレの予防だな。いくつか例があるんだが、代表的なものは二つ。

一つはもしその力が暴走したときに被害を受けるのを魔法の才能がある奴だけにする。当たり前だろう？ 才能がないのにこちらの世界に踏み込んだら、それこそ生死の比率は確実死の方に傾く——まあ、魔術は魔力とか才能とか無くても使えたりするけどな——。さらには魔法生徒も入っていたりするから、そいつからその力の制御方法を教えられたりする。

もう一つは前のと似てるんだが、もしその力が狙われても才能がある奴だけにして魔法バレへの予防。魔法生徒に守ってもらえるし、担任が魔法先生だ。ここの魔法先生はエリートを選出されるからな。よっぽどのがない限り守りきれだろうし」

「そんな……！ それじゃあ、まるで平穏に生きたい人すら巻き込むようなものじゃないか!？」

熱いなあ、というか熱いを越えて暑いんだが。むさ苦しい。どうせ、えーと誰だっけ？ 原作で認識阻害結界の効かない奴。あいつのことを考えてホザいてんだろうと予測できる。

「馬鹿だなあ、おい。人間は集団で生きてんだ。集団の秩序を守るために、集団を救うために個を殺される人間だって一人や二人はい

ない方がおかしいんだぞ？　こんなこと、小学生くらいのがキに言わせるな、大の大人が」

蔑みの念を込め、視線をその厨2に向ける。いや、どちらかと言えば哀れみの念に近いものだろう。

なんせ、こんなこと転生前の俺はこんなことを一切思っすらいなかったのだから。ネギや学園長の爺を悪と一方的に決めつけていたのだから。しかし、こちらの世界に來ると何もかもが違った。

原作のネギがあのようになってしまったのはそれなりの理由があり、それはある意味避けられなかったことだろう。

爺、否学園長が狸になったのはこの国、日本を守るためになった、ならなくてはいけなくなった。

——こいつは俺に似ている。ただ、俺は現実へ出て、こいつは未だ幻想のなかにいるだけの違いか。

それはヒドクミニクかった。

厨2は齒軋りをし、恨みと憎しみの視線をこちらへ向けてくる。

……全く、その視線にはもう馴れているんだよ。

「くっ」

「んで、他に質問、意見、反論なんかある人——いないな。では授業終了」

そうして、負の視線を一身に受けながらも授業が終了した。

○

ネギたちを先にしずな先生の家へ行かせ、俺は少し、学園長と『お話』をすることにした。

「それで、クギ君。2人だけで話したいことはなにかの？」

「いやあ、ちょっと、な。アンタも知られたら困るような内容だからさ、こう内緒で話をしよう、ってわけ。」

——先に言うておくが、さっきまでの俺は教師としてのクギ・スプリングフィールドであり、今の俺は一個人としてのクギ・スプリングフィールドだから」

「ほっほっほ、成る程のう。うまくご両親の血がが混ざっている、といったところかの、クギ君」

「まあそうなんじゃないか？ んで、その話なんだけどさ」

パンツ、と掌同士で叩く。その音は部屋中に響きわたる。それと同時に魔法や魔術が壊れる独自の音と、機械が壊れる音もある。

「あんだ、ぬらりひょんと人間の半妖なんだろう？」

論破するんだけど何か？（後書き）

色々やっちゃったZE☆！

……ええと矛盾とかここおかしくね？ ていうところがあったら報告お願いします。

評価とか感想が来るとやる気スイッチ連打状態になります。どうかよろしくお願いします。

題名思い浮かばないんだけど何か？（前書き）

どうも、金です。

題名の通り、なんて題名付ければよいのやら……。

。評価メッサイただいてテンションも上がっている今日この頃（笑）

ということで、偽装と妄想の詰まった一話（爆弾）を今日も投下。

では、どうぞ。

題名思い浮かばないんだけど何か？

一刹那の間、爺の目、というよりは雰囲気揺らいだ。まあ今の今までその大スキヤンダルを隠し通せていたのだ、無理もないし、また必然だともいえるだろう。

ぬらりひょん。

特徴的な禿げた頭をしており、ぬらりくらりとしたつかみ所のない妖怪である。岡山県では海坊主の一種であるとして伝承されていたりする。

最近ではやれ妖怪の総大将だ、だのやれ人んち勝手に入って茶を飲むだのといったものがあるが、これは実は後付け設定であつたりする。

とまあ、そんな感じにぬらりくらりする能力を持つ爺ですら驚きを顔に出すほど、というよりは中途半端故に顔に出してしまった、という辺りか。

そんでもってすぐに持ち返した爺はというと、髭をさすりながら口を開く。

「ほっほっほ、クギ君、中々面白い冗談じゃのう。それよりも「隠したって無駄だ。なんなら半妖にも十分効く位強い襦袢して特級の聖水ぶちまけたりしてみるか？」……」

沈黙する爺。

静寂する学園長室。

無音の中に響く秒針の音。

「……なぜ、分かったかの？」

「それでも英雄の息子なんでね、結構命を狙われていたりする。それによく用いるのが人外なんだよ——悪魔とか、鬼とかだな——。だからそういうものが近づくとは反応するような結界を俺を中心に半径10Kmで展開している。それに極僅かながら反応したんだよ、あんた」

まあ、その他にも結構反応しているんだけどね。

「……成る程のう、流石天才、といったところかのう」

「俺は褒められるような奴じゃねえよ」

ここまで強気でいられるもつともな要因であるこの力、この才能は貰いものだし、そしてなにより、

「あんたを俺の目的のために利用しようとしているんだしな……」

○

「しかしのう、なんでぬらりひよんだと分かったんじゃ？」

「いや、その後頭部をみれば誰だって分かるだろ……というかぬらりひょん以外何ぞ……？」

シリアスは一瞬で砕けました、まる。

○

持ち直して、爺を正面から見る。

「でも興味深いな。近衛家には妖怪の血は混じってないし、別にあんたが妖怪の妾の子って言うわけでもない——まずその可能性からねえしな——。ではどうやってなったのか、他にどのような可能性があるのか」

そんなの、たった1つしかねえだろ。

「自らを妖怪に、魔に一昇華しよう（堕ちよう）とした、って辺りか」

「そうじゃ、当たり前じゃよ」

ほっほっほ、と顎髭を撫で、笑う。

「少々爺の昔話に付き合ってくれんかの？」

○

——あれはまだ儂が若い、学生の時じゃった。

丁度親父が突然意識のない、植物状態になつての、色々後継者争いという奴に巻き込まれちゃったりして結構擦れていたときに、麻帆良へ妖怪狩りの修行で来て、刀片手にヒヤッハーしているのう。符をポンポン投げてたら、一回校舎を半壊させたときもあつて、その時は流石に冷や汗ダラダラじゃったわい。

そんな中々波瀾万丈な青春を過ごしていたのじゃが、なんじゃ、一回恋に落ちてのう。いやまてここ重要じゃから帰ろうとしないで。

……色々恋文出したり告白したり頑張ったんじゃが、うむ、全部失敗じゃった。その娘はなんか抜けておつてのう——そんなところも可愛いんじゃが——、恋文は隣の人と入れ間違いと勘違いしてそいつに入れたり（出席番号2番 阿部 いさじ）、告白はなぜか脈絡なく『私も好きですよ、さんま』とか返答したり、正直言つて散々じゃった。

じゃが、暖かくてのう。彼女の近くにいると後継者争い何ぞ忘れられるほど、心地よいものじゃった。擦れていた頃の儂にとっては唯一心を許せたとも思う。

それこそ付き合うことは出来なかったが、楽しい日々を送れたものじゃ。

じゃがのう、そんな日々ほど弱々しくて、脆い。

どこから聞いたか、権力の亡者ども、他の弱いくせにプライドだけは人一倍ある後継者どもが結託して儂を貶めようと企てての。

その計画にの、彼女を巻き込んだんじゃ。

内容は簡単に言ってしまったえば、儂が後継権を捨てる旨を本家へ送れば、彼女を解放する、といったものじゃった。

すぐさま捨てようとしたんじゃ。

じゃが儂を持ち上げていた馬鹿共がそ奴らを一気に壊滅させられるとか言つての、強襲部隊を送りおった。

確かにそ奴らは死んだ。

じゃが、彼女も死んだ。

死因は体の機能を止める、いわば麻痺させて殺す種類の呪いでの、あまり苦しまずに死ねたようじゃ。

はは、あの豚共、儂になんて報告してきたと思う？

すごい笑顔で「近右衛門様、やりました！ 一網打尽です！ これでもうあなた様が長になるのもほぼ確定です！ ……女？ ああ、あの娘ですか。どうやら流れ弾が当たったようです」なんてほざきおるから、数日後、犬やら蟲やら鼠やらに集られている状態で見つかったそうじゃ、……勿論、原型がすでない状態の死体での。

それから数年発ち、一時期意識を取り戻した親父が儂に長の座を譲って他界。長となって有権者の嫁を無理矢理嫁がされて、ほぼ赤の他人と言っているほどの結婚生活を送り、娘の木乃実を生んだら他の男と駆け落ちしての——数日後に、橋から転落して死んだらし

いぞい。いや儂一切無関係じゃからその疑いに満ちた目で見ないで——、シングルファザーとして、呪術協会の長として、それなりに密度のある生活を送っていったわけじゃが、ま、1960年には麻帆良の要求があつての、2歳になってばかりの娘を京都に置いて麻帆良の学園長に。

そんな中、一人の男が現れたんじゃ。勿論侵入者として排除しようと思つた矢先にの、ありえんことを言いおつたわい。

「あなたの初恋の人は幽霊になって、いまもまだ存在している」

呆然としてしまつてその男を逃がしてしまつたがの、少々期待と
うか希望を持ちちゃつての、霊に関して調べ始めたわい。

いろいろ調べた結果、見鬼になつてみたり、霊を見やすくする眼鏡を
発明したりしたが、悉く失敗じゃつたわい。

そんな中しずな君を作つたり、瘴気を抑える結界を作つたりとまあ
思わぬ副産物があつたんじゃが、結果としては失敗。

そんな中、あやつがやつてきての。

古い友人が連れてきての——まあそ奴ももとから友人だつたがの。
本人は頑なに否定してくるが——、警備員として雇つたんじゃが、
なんじゃ、アイディアが思い浮かんだんじゃ。

—彼女（霊）に近い存在になればいい。だが、死ぬわけにもい
かない。ではどうすればいいのか。

——「そうだ、魔に一昇華すれ（堕ちれ）ばいいんだ」

○

「上質な瘴気もちょうど大量にあったからそれを身に――宿し（汚染させ）て完成、と思ったんじゃがのう」

「瘴気が足らずにとても中途半端に――昇華した（堕ちた）、って訳か」

「そうじゃの」

こくり、と爺が頷くとすっかり温くなってしまったお茶を煽った。

「中途半端故に、動きずらくなってしまったのう。瘴気を払う術じやと儂もダメージ負うし、魔法動物の能力抑制結界で体が動かんしのう。失敗ばかりじゃよ。もしかしたら、と思ってずっとこの校舎にいたんじやが」

爺は首を横に振り、無かったことを露わにした。

「もう60年とちよいが発つんじや、さすがにもう消えてしまったんじやなろうかの」

「……この校舎にいんのか？」

「うむ、あの男は自縛霊化している、とか言っておったの」

「……彼女が見れるようにする、っていったらなんでもするか」

「ほっほっほ、見れたら、の。実際、ここの学園長になったのもほとんど彼女が理由じゃよ。」

——日本とか、呪術協会とか、本当にどうでもよかった。でも、彼女と過ごした、ほんの少しじゃけれどもあの日々を過ごせたこの場所は絶対守りたかったからの」

「爺……」

後継者争いに巻き込まれ、最愛の人を亡くし、娘と離れ、裏切り者だと後ろ指を指されてきた人生は、どれほど辛いものだったのだろうか。

——酷い人生を送った人を、幸福にさせるために原作を壊すのは許されないことなのだろうか。

同情するなんて最低だな。

だが、そんなことを思いながら口を開いた。

「俺が、そいつを見えるようにしてやる。だから、俺の願いを一つ叶えろ」

そして何より、俺の、否俺たちの願いのために。

まず、1つ。

題名思い浮かばないんだけど何か？（後書き）

ヒヤハハ、ヤッチマッタYO！

……SKT中（スーパー賢者タイム）。

ま、いっか☆ と開き直ったり。

評価とか感想貰うと金の指が無限ヒットを呼び起こします。よろしくお願いします。

幽霊？探しただけど何か？（前書き）

どうも、金です。

今回もやっちゃった感たっぷりで「はあ？」っていう人もいますか
も……。

では、どうぞ。

幽霊？探しただけ何か？

と格好つけたはいいいものの、どうやってその幽霊を見えるようにすればいいんだろうか。

もうこの爺を完璧に魔に一昇華（堕ち）させれば話が簡単なんだが、周りが許さない状況なのだ。今ギリギリバレていないからセーフなわけなのだが、これ以上やったら妖怪ってことがバレて、MMから学園長クビにされて13課が来ちゃう……！

というわけで他の方法を考えなくてはいいけない。

しかし見鬼化も失敗って、どういうことだよ、おい。あれって確率的にはほぼ100%成功するじゃん。

……あー、そういえばあれってどちらかという呪いに近いもんだからレジストしちゃった、てわけか？ そりゃそうだよな、あれってレジスト低い奴、と言うか一般人用に作られた術だし。

うーん、どうしたものか。基本的に幽霊とかってこっち側の人間は見えるはずなんだけどな、もし見れなかったとしても感じれる。

……地縛霊ってことは行動範囲が決められているし、絶対シスターにバレるだろ。カトリック 旧 派 だったら速攻消しにかかってくるよ？ あいつら、幽霊とか地縛霊は基本悪霊として見なすし。居て良いのは精霊だけだし。

え、ということはどんだけ影が薄いのか、その地縛霊。あいや、影

っていうよりは存在感？ そっちのほうがあってんのか？

……いやマジどうしよう、うん。結構俺って万能な力持ってるな、とか調子乗っていたからか？ たぶんそれだ、きつとそれだ、それに違いない。おお、ネガティブスパイラルはマジ勘弁。感情を感じない ホムンクルス 人造人間 になりたい。それはそれでつまんないか。

……人造人間？

それだ！ 第五元素で義体作っちゃって中に突っ込めばいいんだよ！ 幽霊って以外とフワフワしてて、こう、ポロツと抜けちゃうときもあるけど、自爆、間違えた地縛霊だから義体を縛られている土地ってちよいと騙させれば、万事解決！ ハッピーエンド（主に爺、というか爺のみ）！

ふふふ、そうと決まれば早速そいつを連れてこなくては！

「爺、とりあえずその地縛霊探してくるからそこで待ってろ！」

「う、うむ」

待ってろよ、地縛霊！ いますぐ新しい体作ってやるから！

○

と、学園長室から出た俺の体からは止めどなく冷や汗が溢れ出てくるのを感じた。

何故か、率直に言おう。

——こ、恐かったあ。

いや、だってあの人数相手にメンチ切るってドンだけ勇気必要だ
と思ってるの？

精神は肉体に引き寄せられる、ってよく言われるけど、あれマジ。
つまり、俺リアル9歳とこの魂で過ごしたの年齢の間、って感じだ
し（決して平均年齢とかではない）。

お分かり？ ——さあ、あなたは約60人のさっき知り合ったば
っかりの年上相手にメンチ切れますか？ その後80位の爺相手に
詰問して良心痛みまくって罪悪感がビクバンになりますか？ お
答えください！ ってクイズ番組のノリで聞いちゃうよ？ いやマ
ジで。もう聞いているか、アッハッハ。

……ちよつと、気持ち落ち着かせることにした。

まあ、取りあえず歳に合わないようなことはしないようにしよう、
ってこと。うん。

……いや、そんなことばっかりしちゃうんだけどね、今後。

あー、こんなことならMMの裏の支配者とかそういうゴシップ記
事になりそうなことすんじゃないかなあ、とか後悔してみたり。
基本俺って、転成前もそうだったけどチキンなんだよ？ とか言い
訳言ってみたり。教員の仕事習うのに「教師ってのは舐められたり
するからちよつと威圧的だといいぞ」とかいうのを真に受けなきゃ
よかった、とかさっきの60人メンチ切りを思い出してみたり。タ

「モルに交渉術を習うとき『交渉術ですか？ 取り合えずあなたの場合は自分が『テメエより上位なんじゃボケエッ！』っていう態度を全開全面に出して交渉を進めるといいですよ。え、もしこちらの方が低位低いときはだって？ いやあなたはそんなこと絶対ありえませんか』っていうのを真に受けなきゃよかった、とかさっきの爺詰問を思い出してみたり。」

あれ、最後の2つがなんか似てる……？

なんか俺そんな不幸ライフ送ってない？ いや自業自得だけど、とかネガティブMAXになりつつ地縛霊を探す。

この辺りかなー、とか教室のクラス板を見ると、

「あれ、ここって2ーA……？」

目を擦って、もう一度見る。変わりなし。もう一度擦って、見る。変化なし。もういち（ry。

あー、あれっすか。そういえばもうほとんど掠れて思い出せなくなってきた原作（序盤は覚えてるよ！）を思い返してみる。

うん、やっぱりあいつか。

決心して、迷いなく、扉を開こうとした。

「……あれ、開かない」

○

そうだよねえ、今日日曜日だもん。学校無いから扉開いてるわけもないよねえ、開いていたとしてもどうやって地縛霊呼ぶんだよ。なんにも見えないところに声かけるって、絶対可哀想な奴だろ、おい。

……あれ、超危なかったんじゃない？ とかまさかの隠れていた危ないIFルートに結論がたどり着く。

教員室にいく途中、俺は結界内の地縛霊が移動しているのを感じた。

……ええ、校外に出ちゃうの？ ここまで来た意味なくね？ つか縛られているのって、校舎じゃないの？ と不満を爆発させながらも、行っている方向へ足を向けた。

○

ああ、やっと見つけたぜ、おい……。

結界では感じられるのに、どこ見てもいねえ！ と思いつつ、目に力を入れまくって見ていたら、やっとのことで見ることができた。

……俺がこんなに頑張ってやっと見える位なんだから、あの厨2チート共は見えるわけがないわけで。いや、もしかしたら見えるんだけどあえて泳がせておいた、という可能性もあるかも。——いやしかし、成る程ねえ。

取りあえずは見つけられたことだし、体作って憑^いれて爺^{おや}ん所に連れていけば万事解決。

……しかしなんでコンビ二前で体育座り？ まあいつか。周りに人もいないようだし、さっさと教室に連れていくか。

「なあ、そのこの体育座りの姉ちゃん」

「えっ」

「チヨイと着いてきてくれない？」

○

があああ！？ 失敗した！ こんな怪しい勧誘的なもんで着いてくるわけが「は、はい」あった！？

——落ち着けクギ・スプリングフィールドクールになれそうじゃないと上位っていう示しが見つからないぞ落ち着いて教室へ連れていくんだそしたら体にポイツ、て感じで憑^いれて終了なんだ。よし！

「んじゃ、来て」

○

さてさて、教室へ何事もなく無事たどり着くことができた俺たちは椅子に座って向かい合っていた。……結構、恥ずかしい。

「さてと、まず自己紹介といこうか。俺の名前はクギ・スプリングフィールド。姉ちゃんは？」

「うう、初めて私を見れる人が……ぐすつ。わ、私の名前は相坂さよ、っていいます、ぐすつ。それで、あなたはなんですか？」

ま、だろうな。原作でもそういう立ち位置って言われれば彼女くらいだし。

しかし、「あなたはなんですか？」か。すでに人間を前提に聞いてきていないところに驚嘆する。聞くとしたら「あなたは何者ですか？」とかだろうしな。……霊体だからこそ分かること、いやどちらかと言えば——だから、か。結構嚴重に神ってことを隠してるんだがな。いや、これは無意識の中での判断だろう。

「俺は魔法使いだ、って言ったら信じるか、さよさん？」

「はい、私を見ることが出来たから……じゃ駄目ですか？」

「それだけで十分。まず信じてくれるのならそれでオッケーなんだけどな。じゃあ、もう一度言う。この世界には魔法ってのがあって俺はその魔法を使う魔法使いだ。——他にもこの学園内には魔法を知っている人って多くてな。それに魔術って言うのもあってだな。……いや、これはちよい脱線しているな。——取りあえずはその認識だけでいい。それで、その中には肉体を作る技もある」

「ほ、本当ですか!？」

「ああ、そうだ。だがその前に、さよさん、あんたに言わないといけないことがある」

「えっ、なんですか？」

「うん、いや実に簡単なことだ。だけど結構重要なことで、これはさよさんが納得、というか知っていなくちゃいけないことだ」

言葉を区切る。息を吸う。そして、言い放つ。

「さよさん、あんたは今、人間から逸脱した存在になっている。別に地縛霊とかそういうのじゃない。人間の使う言葉では通称、神だ」

幽霊？探しただけ何か？（後書き）

ヤッチマツタケド後悔ダケハシナイオ！？　って動揺たっぷりだ
ったり。

今回も評価タツプリでどうも有り難うございます。

感想の方は遅れていてすみません。色々あって時間がなくて……。

でも絶対返信はします。すみません。

今回はここまでですが、評価・感想を頂くと、命をおお、燃やせ
えええ！！！！　の状態になります。どうかよろしくお願いします。

サービス回だけど何か？（前書き）

どうも、金です。

ということで、人生初のサービス回を書いてみたり。

……いや、意外と難しいものなんですねorz。

ま、この反応で分かった人もいると思いますが、結構残念な仕上がりです。……ほかの文もなんです。

では、どうぞ。

サービス回だけど何か？

「というわけで、爺。さよさん連れてきたぞ。んで、ここからが本題なんだがな、さよさん神様になっちゃったぞ」

「ほっ？」

そうだよなー、突然そんなこと言われても驚きだよなー、とか思っている、爺が慌て始めた。

「ちょ、ちょっと待ってくれんかのう？ 神様になったって、どういうことじゃ？」

「いやー、見つけるの結構大変だったんだぜ？ 霊体の時はめっちゃ目をこらしても見れないもんでさ、結構頑張ってたらやっと見れてな。見つけたら声をかけて、作った体に憑れて、そして連れてきたってわけだ」

「もうお主、何でも有りじゃな」

うーん、実際そんな感じの存在だしな、俺って。

「そんじゃ、説明でもしようかな」

○

「まず現在の魔術界、いわば魔術相互協会での神様の定義から教えるとするかな。取りあえず質問は説明終わった後に全部聞くから」

目の前にはほうじ茶が注がれ、湯気が立っている茶器がある。それを手に取り、一口啜る。

「ありとあらゆる存在が一定量以上の信仰を受け、人間の上位の存在になったもの、だ。ま、これで分かる通り神様ってのは元はどうってことのないものだったりする。だが、それがあらゆる謎を解決するために作り上げられた人格、つまりは神が生まれ、その謎を解決する神話が生まれ、その存在を信じ、恐れ、敬い、愛し、憎しみ、そうしてそんな元が人間の妄想やら空想の存在がありとあらゆる種類の信仰によって現れた、ちゃんと存在する神になるってわけだ。」

つまりは信仰って、いろんな感情から変質しやすいんだよね、結構。だから、普通に暮らしている人でも信仰は受けているわけで、そんなんだから英雄とか有名な将軍とかってのも神になったりする、有名人とかもなんだけどな。

というわけで、さよさんは生前から死後まで未永く信仰されてたってわけですよ、はい」

「「ええっ!?!」」

いや、言っちゃえば信仰していたのはほぼ1人なんだけどな。…爺だよ爺。なにあいつ1人で一般人1人を末席の末席とはいえ神様にするなんて。狂信者でも到底無理っすよ？

はっきり言おう。あの爺はある意味ヤンデレだ。……誰得？

ごほん、気を取り直して、

「はい、じゃあお待ちかねの質問タイムな―」

「えっと、じゃあ私から。――私、幽霊じゃないんですか？」

「おい、お前俺の話聞いてたか、ああ？」

「ひいつ、なんか随分ドスの利いた声で怒られたっ!? だっ、だって私ドジですよ? 足がないのに転んじやうし、ラップ音出すし、ポルターガイストとか起こすし! そんな信仰されるような人じゃないんですよ? だから神って言うのは何かの間違いで、本当は幽霊なんじゃないんですか？」

「いや、それだけで十分神って証明できるぞ、おい」

「「?」?」」

「いいか、幽霊ってのは基本足がない。もしあったとしてもそれは飾り、もしくは足に関することで死んだもんぐらいだ。あれ、ちょっと地面から浮いてるからな。」

でも、神ってのは肢体が揃ってるんだよ。いや千手観音とか、手とか足とか有り得ないほどあるのはいっぱいいるけど、無い奴がない。

分かるか? 地面から浮いているはずなのに、転けるんだぞ? つまりはだな、ただ足がないように見えて、実は足があるってことなんだよな、おい。

ラップ音だとか、ポルターガイストってのは自分が幽霊だ、って信じ込んでいたから、幽霊の存在を突き詰めた、いわば究極の幽霊神になったっていう訳だ、Congratulations!」

「じゃ、じゃが神や幽霊のといった存在は儂らでも知覚できるぞ？
なんで彼女は出来なかったんじゃ？」

「言っただろ、究極の幽霊神だって。彼女は信じ込んでいたんだよ、
“私は幽霊。誰からも知られない存在だ” って具合に。だから誰も
分からなかったんだよ」

原作じゃネギが分かっていたと思うんだが、あれは幼い故に備えられた高い霊感性と、人よりも神に近い存在である悪魔と出会ったことがある故に高められた霊感性が相乗！ って感じになったから
なんじゃないか？

幼い頃が霊感性のピークなんだよな。ほら、よく小さいときに妖精を見たことがある、っていう話を聞いたことがあると思うんだ。
チエンジリング
その他にも取り替え子とか、赤子の肝は妖怪を強くするとか、子供とオカルトってのは結構密接に繋がっていたりする。

閑話休題。

「神様ってのはなぜ信仰されていたのかっていうので何の神かっ
てのが決まるんだが、そういうのが決まっていない神、まあさよさん
みたいなタイプはな、自分自身が一番最初にイメージされた存在に
近いものになる。さよさんは幽霊って思ったから幽霊の神になった
わけだ。しかも某蛇さん以上の隠密性を持った、ある意味最強の神
に。その分戦闘には向いていないんだけどな」

んだから他の転成者なんかは見れないんだよなあ。だって大人ばっかだし、そういうのが見れるほどの眼があるとは考えられないし。もしかしたら見れた奴もいたかもしれないけどな、神様ってのは気づいていないんだろうな、それか魔術、特に神道方面の知識が無い奴。

「んでな、ここからが本題なんだけど、まずさよさんを1回禊ぎした方がいい。こんなに汚れてると、神の大半はここら一帯を廃墟にするくらい暴れてもおかしくないしな」

「ええっ！ 私そんなことしませんよ？　　というか汚れてるってどういうことですか！？」

さよさんが驚いた声をあげるが……ま、しょうがないんじゃないかな。魔術なんてことを知らないんだし。

「いや、禊ぎってあれだよ、風呂で体洗うのと大分似てる。神っていつでも、やっぱり体、というよりは魂が汚れるんだ。だから禊ぎやら祈りでその汚れを落として、健全な状態にするんだが、さよさんのこと誰も分からなかったから禊ぎなんてしない。だからはつきり言っちゃえば体洗わないでいるんだよな」

「えっ」

「というわけで爺、2-A、いわば彼女の本殿で禊ぎするからあの辺りの人払いよろしく。終わったら速攻でさよさんそっちに送るから待ってろよ」

「ちょ、ま——」

時間が惜しいんです、いや割りと真面目に。

○

「はらいたまい、清めたまう」

「んっ」

しゃりん、しゃりん、と左手に持つ神楽鈴を振るうと、厳かに、だが美しく音を奏でる。

目の前にはもじもじしている、和服を着た（というよりは着させた）さよさんがいる。

「はらいたまい、清めたまう」

「うんんっ。……はあ、はあ」

次は右手に持つ玉串を振るい、塩をまく。

教室内には即興ながら境内を作り、入り口近くには小さな鳥居のフィギュアを置いた。……結構代用しているけど、大丈夫だろう。

さよさんかというと、体を腕で寄せて、顔を赤くしている。よく見れば汗も浮き出ているのが分かる。

「はらいたまい、清めたまう」

この繰り返しを何度も何度も行う。……以外と疲れるんだよね、これが。

「あ、あのひゃっ！ ……まだ、ですか？」

「あとちょっと」

そう答えると作業に戻る。本当にあとちょっとで終わるしね。

……あと3回、……2回、……ラスト、……終わり。

「終わったぞ、さよさん」

「はあ、はあ、やっと、ですか。すっごく疲れるし、なんかこう、くすぐったいんですね、この……禿ぎって」

「そうだな、俺も疲れる。それにこれって体を洗うようなもんだからくすぐったいのも何となく分かる気がするな。でも6月にはもつと長い大祓えがあるから慣れといった方がいいぞ」

「——えっ。あ、あれより長いんですか！ む、無理無理！ 死んじゃう！ 絶対死んじゃう！」

顔を赤く染め、首をぶんぶんと横に振る。……え、なにこれ？ 小動物？

ちよつと癒されながら、口を開く。

「いや、死なないから。大祓えで死ぬって本末転倒だぞ。……取りあえず、爺んところに行くか」

「はい……分かりました……」

しゅん、となったさよさんを連れて、学園長室へと足を向けた。

サービス回だけど何か？（後書き）

……やめて、そんな冷たい目で見ないで……。

と、絶賛鬱状態なのですが、迷いなく投下。

……やっぱり金には無理だって。あの妄想内の可愛らしさが全く表現されていない！ あの夢の中じゃ和服が乱れていたり、捲れていたたり、もつとエロかったじゃん！ とか叫んだり。

んん、ではちょっと更新について報告が。

金、実はもうすぐテストです。なんでもう1回出来れば2回を今週、もしくは来週に投下して、テストが終わるまで停止しようと思います。

あ、でもあれです。テスト終了日には投稿します。なんでご安心を。

ということで今回はここまで。

評価・感想を頂けると、興奮で脳内麻薬でジャンキーになります。「ヒヤッハー、我が世の春がきたあ！」って具合に。御大將くらいに。宜しく願います。

襲撃されたりするんだけど何か？ **(アンケートもあるよ!)** **(前書き)**

どうも、金です。

後書きに超重要アンケートがあるので答えていただけると嬉しいです。

しかし、とともの。が次回作で終わりとは……すごく残念です。

それとなんでGジェネの最新作が3DSのみで販売？ せめてPSPでも発売してよおお!!!

と愚痴もここら辺にしておいて。

では、どうぞ。

襲撃されたりするんだけど何か？ **（アンケートもあるよ!）**

とまあ連れていき、現在俺の隣にある扉の中、学園長室には爺とさよさんだけがおり、色々話をしている、と思う。

というのは、やっぱりこういう話は第三者が聞くようなもんじゃないからな。さすがにそこら辺はちゃんと弁えています、はい。

しかし、話がちゃんと出来ているのか、そこら辺がとても心配だ。

なぜなら、彼女は生前の記憶を失っているから、だ。

神というのは生まれたとき、人格は形成されていても記憶というものはない。いわば信仰によって構成された神は、空想上のものなのだ。人々が思い描いた人格はあっても、そこに記憶は無い。そういった記憶といったものは、神話や伝説といったものを信じた人々の信仰によって補われる。まあ、俺みたいなのは例外、というよりは特殊なのだが。

ならば信仰され、神になった元・人も同じ。人格はあっても記憶は史実やゴシップ、伝説を元にして記憶を形成される、のだがここには穴があったりする。

1つは、作られた記憶による人格の歪曲。

本当は心優しい青年だったとしても、多くの人々に信じられた史実やゴシップからできた記憶から冷虐非道の青年になったりするのだ。……まあ、理論上の話な訳で、実際そういった神は見かけない

んだが。

もう1つが彼女に当てはまるのだが、神になったとしても、いわゆる作られた記憶がなければ記憶喪失の状態になってしまうという点だ。

少々彼女と会話をすると、そのようなことを思わせるところがいくつもあった。

例えば体を作った爺のところに連れていくとこのことだが服を作った着て貰おうとしたら、「服って着ているところはいっぱい見たけど、初めて着るからよく分からない……」とか呟いていたところだ。

いくら史実や伝説といったものでも、それを行うのに必要な記憶や知識は付随してくるのだ——例えば剣術とか——。ということは学校での出来事なのでもちろん服を着る記憶は付随してくる、筈なのだが、それが無い。ということは爺とさよさん、いつも裸で行動していたの？　ということになってしまいうわけであり、そんなことは有り得ない。だから記憶がない、と推測できたのだ。

うーん、お兄さんとしても心配、なんて考えていると、唐突に扉が開いた。

出てきたのは少々頬を赤らめながらも、ニコニコと笑っているさよさんだ。

「近右衛門さんが呼んでいますよ、クギ君」

……あれ、近右衛門さん？　なんか仲よさげじゃね？　え、でも

記憶無いんじゃないの？ え、え、どうということなの？

「ほっほっほ、クギ君、本当にありがとう。おかげで儂もさよさん見れたし話せたしのう、約束通り何か1つ、願い事を叶えるとするか。もちろん儂ができる範囲内でのお願いじゃぞ？」

爺も超ニコニコしている……。……なんだ、この胸の奥からわき出る、炎に似た粘っこい感情は。取りあえず壁を叩きたい。全力で叩きたい。ああクソ、リア充いね！ どう見てもこのカップリング犯罪じゃねえか！？ いや、実は犯罪じゃないけどね！ なんにも知らない人がこれ見たら速攻警察に通報するぞ、おい！ ……ん？
なんで俺こんなこといったんだ？ ……なんで？

「大丈夫かの、クギ君？」

そう声をかけられて、自分がちゃんと意識が戻ってくるのを感じる。でもまだなんか腹が立つというか、なんというか。

「あ、ああ。ちょっと飛行機での疲れが残ってるっぽいから、明日話す。……大丈夫か？」

「ほっほっほ、大丈夫じゃよ。学園長って実はあんまり仕事無いしう。どちらかというとクギ君がいつ大丈夫か、なんじゃよ」

給料を聞いたことは無いが、言わせて貰おう。この給料泥棒め。働け、いろいろと。

「んじゃ、しずな先生宅に行くとするか」

よっころせ、と荷物を纏めたバックを持ち、学園長室の扉を開け

た。

○

分かれるときには既にしずな先生の家の場所は聞いたので、そこに一直線で行けばいいわけなんだが……

ま、そりゃ初対面で、しかも9歳のガキに喧嘩をふっかけられたんだ。そりゃキレるよね。実際内心ビクビクしてたけどな！

というわけで、さきほど学園長室で見かけた『裏』の関係者——ほとんどが転成者なんだが——が5、6人集まって俺を囲んでいるというわけだ。正直言っちゃえば、めっちゃビビってます。中にはすでに杖を抜いている人、得物に手をかけている人なんていう、それはそれは素晴らしいほどに物騒な人もいるし。牛乳飲めよ牛乳。それかカルシウム。イライラ収まるよ？ 短気ダメ、良くない。

「クギ・スプリングフィールド君。君、ちょっと調子に乗りすぎだよ？ こういうこともあるとか、考えなかったのかい？」

「いやー、考えてたけどさ。まさかここまで短気な馬鹿だとは思っていなかったからな。……あ、ヤベ」

まずった。思ったことをそのまま口にしちゃったよ、おい。いやー、まだまだガキだなあ、俺も。

と現実逃避をしていると、既に手の中には各自の得物が持たれているわけで。体の周りには既に気が纏われていたり、違うパターン

としては魔力が纏われていたり、中にはそういったものとは違うものを纏っていたり。

ま、ぶっちゃけ戦闘態勢完了と言った辺りだろうか。はは、参ったなー。……いや、マジでヤバいんじゃないのかな、現状況。

「……ぶっ殺す」

その一言と同時に、囲んでいた奴らは動いた。

○

——おいおい、得物も持たせないつもりかよ。9歳相手に大人げなさ過ぎじゃないか、おい。

と心の中で呟きながらも、放たれる攻撃の隙間を潜り、全て避ける。

確かに、猛攻だ。隙がないほど放たれる攻撃を避けるにはそれこそ射程外に逃げるほかあるまい。

「くそ、さっさと当たれよ」

だが、こいつらには弱点がある。

連携プレーの無さだ。

隙がない攻撃を全員が行えば、味方からの攻撃と相殺しあい、穴

が出来る。そこに、この小さな体を捻り込ませれば避けることは出来る。

とはいうものの、その攻撃は一瞬も止められないほどの連撃なので動き続けなければならず、『死^{メント・モリ}の舞踏』を取り出す暇など、もちろん無い。

そして相手は、所詮チートを追い求めたチート野郎共——見た感じ男しかいなかったのだ。——だ。

その魔力はネギより、数倍多いといったものだろうか、少なくとも見積もってもこの連撃を7時間続けることは、こいつらにとってはたやすいことだろう。中には魔力を毎秒1割回復するものもいる。

だから魔力切れを待つなんてのは、無駄といった辺りだろうか。全く、面倒だ。

とはいっても、こちらから攻撃するのも少々躊躇ってしまう。この中に、もしくはこちらを伺っている奴にどんなものでもコピーする能力、見稽古なんかを持っている奴がいれば、そいつは今後の計画上、少々面倒な存在になってしまう。

「ははは！ どうした？ さっきまで大口叩いていたくせに大したこと無いんだな！ 僕の魔力はネギの数倍はある。魔力切れを待たたって無駄だよ！」

うるさい、そんなことは分かっている。つーか勝手に人の妹を名前前で読んでんじゃねえ、この気違い系厨2病患者め、まずはそのカワイソ成分タツプリのオッドアイと銀髪とイケメソ（笑）フェイスをどうにかしてから一昨日きやがれ！」

あ、またやっちゃった。と思ったらもう遅く、厨2君（今命名）の形相は歪み、顔は真っ赤になっている。

「絶対に殺す！」

「それがキにいう言葉じゃねえよ!？」

2振りの剣を両手で持ち、こちらに突っ込んできた。

○

「ちょ、お前ら待え、ぐりゅうう!？」

……ま、そうだな。弾幕の中へなにも考えずに突っ込んできたら、そりや当たるわな。

と侮蔑と哀れみの視線を送りながらも、動き、避け続ける。つまりは攻撃の雨は未だ続いているわけで。

「……お前ら、仲間倒れているのに攻撃続けるか？」

「いや、そいつのこと誰も仲間と思ったことはねえし。どちらかと言えば、敵？　まあ、G並の耐久力はあるから別にいいか」

なんという奴らなのだろうか。血も涙もない奴の集まりのようだ。

「だってそいつ、いろんな女子、特に2-Aにナンパして、嫌がっ

てんのに恥ずかしがってるって勘違いしたりして、何回か補導されてるし。主に高畑先生に」

ふむふむ。

「前は木乃香ちゃん、学園長の孫にセクハラ紛いのことをして、1回西と全面戦争になりかけたりしたしな」

……ふむふむ。たしかにそう思われてもおかしくはないな。

「つーか、なんで追放とか要監視とか、そういうことしないの？ あー、なんか腹立ってきたわ。ってよく考えたら、これってメガロに宣戦布告？ ……こんの、くそつたれーっ！」

男はそういう。すると、弾幕が薄くなり、厨2君が倒れている辺りの弾幕が濃くなっていく。

「ぼ、僕も」「……自分も」「おい、お前ら！ そういうこと言うなよ！ 俺もそう思っちゃったじゃねえか！」

とまあ、こんな具合で俺への弾幕は一切なくなり、男の方へ集中砲火されている。

「え、えーと、俺もう行ってもいいか？」

「ああ、なんかすまなかったな。徹底的にこいつ、ぶちのめすわ」

……こいつら、何がしたかったのだろうか。

そう思いつつ、気を取り直してしずな先生宅へ、改めて足向け

た。

襲撃されたりするんだけど何か？

(アンケートもあるよ！)

(後書き)

ということでアンケートです。

ちょっとネタバレに近いかも？

今後の展開なんですが、

？原作のげの字も出ないオリジナル展開

？原作に従事した原作展開

と、オリジナル展開の時期は秘密にさせていただきます。

締め切りは10月1日 00時00分とさせていただきます。

アンケートに回答していただく際、一言感想・評価して頂けると嬉しいです。

ぜひ参加してください。

あの二人の関係だけ何か？（前書き）

にじファンよ、私は帰って来たー！

ヒヤッハー、金ですヒヤッハー！

ええ、はい。調子乗りました、はい。すみません。

ふはは、しかしあの強敵、テストに倒された金に、もう残っているものは何もない！（誤字に非ず）

後書きにはアンケートの結果を書いております。

では、どうぞ。

あの二人の関係だけど何か？

ウィルことウィリアム・パーシヴァルとアーニヤことアンナ・コロウアは5年ほど前から付き合っている。アーニヤ本人に聞くと、当時の彼女は俺のことを好いていたという。俺も人並みには人の感情を察することが出来るから、気が付いてはいたんだが、まあ、なんだ。少々兄に懐きすぎている妹がいたため、両方動きづらかった。俺の近くには四六時中いたし、アーニヤはアーニヤで恋慕が気づかれたのか、妹、ネギからマークされていたりしたわけだ。

その頃はアーニヤとネギの関係が、なんだ、酷く擦れていたことを記憶している。

ネギから見れば自分の支えである兄を他人に取られたくない、アーニヤから見れば自分が好きな人の近くにいて喧しい、といったところだろうか。トゲトゲしていてその間にいた俺が胃腸薬を常備していたのは、歳に合わないことをしたと振り返ってそう思う。ただ、持っていなかったら、さらに酷かったのだろう、とも考えている。

なぜかといえば、そんな生活が続いていたせいかな、ある日授業中に俺が倒れてしまった。医者話によると、過度なストレスのせいだ。胃に穴が開きかけているとのことだった。これは一種の、転生による弊害ともいえるだろう。体に精神が引っ張られているせいで中途半端にそういうことに機敏になってしまう。普通の4歳児はこんなことになるのは極めて珍しいことだろう。さらに原因としては、その頃は人の目を盗んで世界各国に飛び回っていたり、偉い人たちと話したりしたしな。精神的、肉体的な疲れも半端なかった。

そんなことがあり、幼いなりに考えたであろうアーニヤは、まあ、俺たちから段々と離れていった。

自分が悪かった、自分がいなければこんなことには、などと成長過程で起こる精神的に不安定な時期と重なってしまったこともあり、酷い自己嫌悪に陥ったアーニヤは段々と顔が寝れ、目の下の隈が深くなり、痩せ細っていく、ついには引きこもりになってしまった。彼女の両親は村が襲われたこともあって魔法世界へ出稼ぎに行っており、すぐには帰れなかった。ネカネ姉ちゃんは修行で、確か紛争地域での戦争孤児の保護に行っており、彼女もまたすぐには帰れなかった。教師たちも今までこんなことがなかったためか、どう対応すればいいのか、何をすればいいのか迷っていた。俺が行こうとしたものの、その後すぐにロンドンの病院へ連れて行かれ、多くの検査やカウンセラーなどといった、馬鹿げたことに付き合わされていたため動けなかった。まず、カウンセラーが出来るのであれば、俺よりもアーニヤの方へ行け、などと考えたのだがすぐに原因が思い当たった。

英雄の子。

ただ、それだけのために自分よりも危うい少女を見捨てるのか、そう内心憤っていたものだ。また、自分自身を責めてもいた。

退院後、すぐにアーニヤの元へ向かったら、なんと以前のアーニヤへ戻っているではないか。そう驚いていると、まあ、あいつが現れるわけだ。

学生時代、『遅れ咲き^{マイペース}』と生徒間、教員間で呼ばれていた、ウィリアム・パーシヴァルがいた。

当時から二年ほど前の彼はあまり社交的ではない性格と魔法の才能の乏しさ、そしてその肥満体型から虐められており、教員の間では裏口入学ではないか、などと揶揄されていたほどだった。確かに、魔法を使っているところを見るとよく入学できたな、と思ってしまうような実力だったのは否めないし、保有している魔力量も多いというより、寧ろ平均よりも少ないくらいだった。

しかし、なぜ入学できたかは納得できた。

面接及び試験監督者が爺ちゃんだったこと。そしてその魔力に含まれている魔素の密度である。

魔力は魔素によって構成されているが、魔力＝魔素、ということではない。

錬りケシを考えてほしい。ケシカス、つまりは魔素を集めて、こねることによって初めて錬りケシ、魔力ができるのだ。この錬りケシを投げるといった行動が魔法、魔術といわれるものだ。

これが最も単純な例えだろう。

所々が違うので補足させてもらうと、まず魔素では魔法を使うことが出来ない、魔素を保有する器官と魔力を保有する器官が別々にある、魔法を行使する過程では留め変質させる場所と放出する道がある、といったものだろうか。

特に一番最後はタカミチがいい例だろう。彼は魔力を放出することとは出来る。現に感卦法の使い手として世界的に有名だ。だが、魔力を留め変質させる場所が無いため、魔法を行使することが出来ないのだ。

閑話休題。

と、ウィルについては特に二番目のことなのだ。彼の魔力の保有量は平均よりも少ないのだが、魔素の保有量は半端でないほど多いのだ。

大半の人はどちらも同じ程度の量もしくは極僅かな差なのだが、彼の場合はそれを大きく逸脱していた。

また、魔力の量と魔素の量は比例している。それは人それぞれによって異なるのだがこれも1…1の割合がほとんどだ。しかし彼は1…10ほどの差であった。常人の1の魔力と彼の1の魔力では、彼の方が強い。

当然そうなる通常魔法の行使方法では魔力が逆に濃すぎて、奔流して上手く発動することが出来ない。

まあ、見かねた俺は彼にアドバイスを少々すると、みるみるとその実力を高めていった。自信をつけた彼は積極的になり、最終的には痩せて、美丈夫となったわけだ。

これには勿論訳がある。同級生からだけでなく、学校全体から虐められていた彼は、同じクラスメートだったアーニャが庇ってくれたことがある。そう話していた。確かにアーニャはそういう事柄は嫌いな気質のため、納得できる。

とまあ、そんな彼女を見て、惚れた、とか。

彼はその惚れたアーニャが引きこもった、と聞いたら居ても立つ

てもいられず、彼女のところへ行った。

そしてハッピーエンド、というわけだ。いやはや、若いってのはいいなー、青春してるなー。

とここまで長々と話したわけだが、もちろん理由はある。

「はい、あーん」

「あーん。うーん！　おいしいですよ、アーニャ！」

「えへへ、そうでしょう」

と、見事なバカップルぶりを目の前で、しかも人様の家でかましている1組の男女が目の前にいるからだ。

……我慢したんだよ？　内心うぜー、とか砂糖吐きそうとか、これこれ1時間ほど見せつけられてたんだよ？　でももう我慢できない。逆に我慢できる奴はいるか？　断言しよう、絶対いない。こんなの見せつけられて大丈夫なのはこいつ等の同類くらいだろう。というかアーニャよ、お前ツンデレキャラと違った？　いつからデレデレキャラに？

というか周りからおかしいんだよ。しずな先生はしずな先生でここにこ笑っているだけだし、ネギは俺の荷物を漁っているし、クーはいきなり便所で大きいのをかましているし、ネギは俺の荷物を待てえええええ！！！！　なにナチュラルに探ってたんだよ！！？

「おいネギ！　それ俺の荷物！　なんで漁ってんの！？」

「んー、18禁の本がないか探しているの。あつたらネカネ姉さんから速攻燃やせて言われているし。私ももしそういう本があったら燃やして、兄さんと『O☆H A☆N A☆S I』をしないといけなし」

いつからお前は白い悪魔式オハナシ術を……っ！？　そういう風に育てた記憶はないぞっ。

「んー、無かった。よかった、『O☆H A☆N A☆S I』じゃなくて
そりゃ、持っていないのが当たり前だろ。

「この前は本棚の3番目の魔術書を置いてあるところの右から3番目の『完全なる存在とは』のカバーを掛けたそういう本があつたから、もしかしたら違うのを持ってきたんじゃないかな、って思ったんだけどなあ」

え、なんで知ってんの？　というか、カバーだけあって、肝心の中身がない！　とこの前必死に探していたんだけど？　そのとき笑ってたのって、こういうことだったの？

「当たり前でしょ。兄さん」

なにそれ怖い。とりあえず言い訳をさせていただくと、もう爺のくせにそういう本をベッドの下といういかにも青少年がおいてありそうなところに置いていた好色爺ちゃんが全て悪いんです。そう、全部あいつの、あいつのせいなんです。俺、ワルクナイ、ジイちゃん、ワルイ。

「取り合えず、お爺ちゃんにはそのことを連絡しておくから」

あの二人の関係だけど何か？（後書き）

ということで、結果発表！

？一票

？二票（足して二で、という意見）

と、アンケートの回答も少ないことは横にずらして。

こうなったので、？にします！（分からない人は前回の感想を見て下さい。注意書き等もありますので）

感想返しも始めます。

と、いうことで今回はこちらでお開きとさせていただきます。

感想・評価は勿論待っています！一言でも頂けると三回転土下座を決めて涙します。

番外編 雑談だけど何か? 2! (前書き)

祝50万PVの番外編です。皆様ありがとうございます!

番外編 雑談だけど何か? 2!

金「特別企画!」

釘「クギと!」

金「金の!」

金・釘「雑談だけど何か? 2! はっじまっるよー!」

金「ではでは、全く好評でないこの企画、今回は50万PV記念にやらせていただきますーす!」

釘「好評じゃないんだったらやるなよ(ボソツ。……んで、今回も50万PVぴったし所か、23万くらい多いぞ」

金「細かいことは気にしないっ☆ 基本的にこの企画はぴったしで投稿するつもりは毛頭ありませんしね。それにいろんな人に見ていただいてるってことじゃないですか、嬉しいですねえ」

釘「まあ、色々あったもんな。なんか2章に入るとき大幅にキンクリされていたり、蠅の登場回数増えないし、全く伏線張れてないし、文章も所々変だし、今回のテストも赤点ばっかだと返される前から分かっているし。……本当に大丈夫なのか?」

金「細カイコトハ気ニシナイツ★」

釘「素晴らしいほど現実逃避に向いている言葉だな、それ」

金「おおっと、もうそろそろゲストの方がログインする時間です」

釘「ログインって言うてるけど、実際は部屋に入っているだけなんだけどな」

鉄様が ログイン しました。

鉄「どうも、お久しぶりです。ターモル・レ・ミントンです」

釘「おお、今回のゲストはターモルか。しかし、登場するのって中々久しぶりじゃないのか？」

鉄「ええ、そうです。『教えて、ターモル先生!』だけど何か？」

から一切合切登場してませんし、名前は一度しか出てませんよ……」

金「金は悪くない。どちらかと言えばテメエの扱い難さに非がある」

鉄「ええっ! まさかのその返しは想像できなかった! というかなんで私の扱いがこんなにも酷いんですか! ? 前回の蠅さんもまだ拍手を送られていたのに! ? 」

釘「だって、ねえ」

金「ですよねー」

鉄「うわぁーん! 」

金・釘「大の大人が泣くんじゃねえ、気持ち悪い」

鉄「……お二人、なんか非道というか、外道な香りがプンプンなんです」

金「そりゃ、『境ホラ』が悪い」

鉄「こらっ！　ほかの作品名出しちゃ駄目でしょ!？」

釘「俺も読んでるぞ、『境ホラ』」

鉄「うがーっ！」

金「（……鉄いじるの、楽しいですね）」

釘「（そうだな）」

鉄「今回のツツコミが一人だけって、辛すぎるんです！　前回はい感じに分かれていたのに、なんで!？」

金「そんなことは置いといて、取り合えずプロフィールの公開だけでも」

鉄「うええ！」

ピロリロリーン

鉄様の　プロフィールが　公開されます。

名前…ターモル・レ・ミントン

性別…男

年齢…56歳

身長…196cm

体重…87kg

好きなもの…日本文化、鍛錬、煙草、酒

嫌いなもの…欲にまみれた人間、怠惰な人間など

釘「……うわあ、何の面白味もねえ」

金「これに補足させて貰うと、ワン・フィンッシャー一撃の鉄甲士 なんていう二つ名もあります。……うん、改めてみると何の面白味もねえ」

鉄「これ考えたのあなたですよ!?!? それ言っちゃ駄目でしょ!?!」

釘「しかし、結構身長高いんだよなあ。年の割にはウェイトも引き締まっているし。伊達に先の大戦では英雄と言われていただけのことはあるな」

鉄「ま、まあ自分にはこれくらいしか取り柄はありませんから」

金「照れてんじゃねえよ、登場回数減らすぞ」

鉄「怖っ!」

釘「しっかしなあ、今更なんだが、この企画って出番が少ない奴をだそうっていう魂胆なのか? 前回は蠅で、今回は鉄と来たら、も

う分かつちゃう」

金「……」

鉄「……作者」

金「だからお前がああ！！！！」

鉄「なんでえええ！？　なんでこの状況で逆ギレできんの！？　馬鹿なの？　死ぬの？」

金「出番、減らすぞ」

鉄「さーせんしたー！！！」

釘「……何という暴虐っぷり。そしてこのメタ発言の数々。この作品を根底から揺るがす企画と見た」

金「というか、今回なんだか釘さんテンション低いんですが、どうしたんですか？」

鉄「おお、そう言われればそうですね」

釘「いや、なんだ。ぶっちゃけるとさ」

金「はいはい」

釘「この企画、いらなくね？」

金「」

鉄「」

釘「いやまだ二回だけだけど、これより外伝とか番外編の方がいいと思うんだよね」

金「まさか登場人物に諭されるとは思いも寄りませんでした」

金「ということでこの企画は中止！ 解散とさせていただきます！」

鉄「ええ！ わ、私登場したのはいいんですが、全く演出してないですよ！？」

金「異論は認めない！」

釘「おうふ、早急すぎて驚きだぜ」

金「ということで、以降この企画に代わり、外伝とか番外編と言ったものを投稿していこうと思います」

鉄「ええ、まじかよ……」

釘「全く、駄作者ぶりをすごい感じで発揮しているな」

金「はい、ということで今から業務連絡タイム。次回から遂に原作始動です！ 基本は本編を進めて、100万PV到達したら外伝を投稿、というような感じで進めていきたいと思います。執筆速度は今までと余り変わらずマイペースに進めていくので、よければ是非読んでいって貰いたい所存であります」

釘「んじゃ、締めの手摺といこうか」

金・釘・鉄「「「今後も『ネギの兄を始めよう!』をどうかよろしくお願いします」」」

（終）

金「あ、そういえば全員金の字が名前の中に入ってますね」

鉄「あ、本当だ」

金「テメェに言ってねえよ」

鉄「ひどっ!」

番外編 雑談だけど何か? 2! (後書き)

ということで、次回から原作を開始します。

勿論感想・評価をお待ちしております! あれです。感想・評価を頂くと指が弾幕張りに高速で動き始めます。

原作開始だけど何か？（前書き）

どうも、金です。

遂に原作開始です！

ではどうぞ！

原作開始だけど何か？

朝だ。

先日は胸焼けのしそうな甘すぎるラブラブ具合を目の前で見せつけられ、俺と爺共々仲良くネカネ姉ちゃんに怒られ、ベルには遠回しに怒られ、散々だったが、明日は必ず来る。

とは言っても特別憂鬱なわけでもない。別に普通の一日の始まりというわけでもないんだが。

俺は今、スーツを着ている。

先ほど着たこのスーツは少々大きいながらも、別段動作の邪魔になるというわけでもなくその性能を発揮している。

まあ、なんだ。これが今日からの制服、否、戦闘服である。

つまり何が言いたいかというと、

「月曜日、麻帆良学園女子校中等部初出勤……」

既にネギ、アーニヤ、ウィルも起床しており、それぞれが制服を身に纏っている。皆、1度は試着しているとはいえ今日からの、初出勤初登校での気概も、そこから感じる初めての感覚もあるのだろう、それぞれの姿が初めて見るように思える。

「さて、どうせ全員早めに学校に行かなくちゃいけないんだから、

出発しようか」

「自分だけ違いますけどね」

そう言ったのは、小さな苦笑を浮かばせて少し寂しそうにしているウィルだ。確かに、そうなのだ。俺、ネギ、アーニヤは女子校中等部なのだが、彼は男子校中等部のはずだ。まあ、この全体的な校風、結界があることだしイジメやらなんやらといったものはないだろう。逆に「オマエSUGEEEE!」ってなるだろうな、たぶん。ああ、今後のことを考えると胃が痛くなってきた。

「ぶう、クギが女子校に行くんだから、別にウィルも女子校でいいじゃないの。それに一人になって寂しいに決まってるでしょ……」

そう言っているのは昨夜からぶつ腐れているアーニヤだった。先日から爺にそのことで猛抗議をしていたんだが、やっぱり駄目だったようだ。それを言われて、先日の異様な甘さに気付く。いや、いつもあんなに甘い訳じゃないよ？　ただ離れ離れになるからあそこまで甘くなったのだろう。……え、ということは今日からこれぐらいの甘さがノーマルに……っ!？

「大丈夫です、アーニヤ。君はいつも僕の心にいるのだから悲しくなんかありませんよ。勿論、君が僕の側にいるのに越したことはありませんが」

「ウィル……」

「アーニヤ……」

……砂糖吐きそうだ。というか、まじで気持ち悪くなってきた。

なにこのラブラブカップル。小学4年生が醸し出すものじゃないでしょ。つか普通にキスしてんじゃないよ。俺らがいるってこと忘れてんの？ おーい、聞こえてますかー？

なんて考えていると、服の端を引っ張られる感触を確かに感じる。そちらの方を向くと、

「……いや、ネギ。何目を瞑って期待してんの？ 唇を突き出すな。大体俺らって血の繋がった兄弟でせうよ？」

いや、マジでこの子何に期待しているの？ 近親相姦の禁止はイギリスの法律にもありますよ？ だからいい加減にしろよ、なあ。

「……キスは近親相姦にならないもん。ちよつとしたコミュニケーションションだもん」

「前にそう言って舌を捻り込ませようとしたのはどこのどいつだ！ その後少し経って一緒に寝ようって言われてマジこの歳で色々なものを失いそうになったんだけどな！ どこで覚えたんだよ、そんなこと！ ——ホッペタ膨らませんな、涙目になるな、上目遣い禁止！ ……チクショウ、可愛いじゃねえか！」

そう、本当に可愛いから困る。ま、あらゆる誘惑には鉄の理性で完璧ガードしたけどな！ （実は一瞬負けそうになったのは秘密）

「……取りあえず、仕入れたのは兄さんの持っているそういう本だよ？」

まさかの自業自得！？

「あらあら、朝から4人ともお熱いわね」

ヒューヒューと口笛を吹いてはやし立てるしずな先生。全く、感情豊かなホムンクルスだ。……実は人間ってオチはないよな？

「俺らは違います！——つーか3人とも照れてんじゃないよ！」

朝の女性教員寮に、俺の声が響きわたった。

○

「あー、余計な時間食っちゃった！遅刻じゃないけど、遅刻に近いだろ、おい！」

「むー、結局朝のキスできなかった……。ね、アーニャ。なんかこう、コツとかない？」

「そうねえ、ウィルはそういうのって拒まないから分からないけど、寝ているときにコソツ、とするとか」

「物騒なことやってんじゃない！……いや、マジ勘弁してくださいよ？　お願いだから」

そう話しながらも、走る足は止めず、速度は落としていない。

あれから直ぐに寮を出た俺らはすぐさま近くの駅へと走り、現在は電車から降り、ウィルと別れてそれぞれの目的地へと駆けているところだ。

「……!？　ワンッ!」

前方から、犬の鳴き声を真似た、女子の声が聞こえた。……いや、きつと空耳だろうな。

「……あれって」

「……うん、そうね」

「ん、何がだ？」

「……ほら」

そうネギが指を指した先には、赤い髪をツインテールに纏めた少女がいる。少女と言っても、中部部ほどで、しかもかなり足が速い。陸上部にでも所属しているのだろうか。

……なんか、見たような気がする。が、今はその話をしているときではない。

ネギがなぜ彼女を指さしたのか、そのわけが分かったからだ。

「あー、成る程」

その少女からは、かなりドキツイ失恋の相が出ている。まあ、しかるべき対処をすればどうってことはないんだが、初対面でいきなり「失恋の相が出ている」なんて忠告するのは、日本人では結構失礼に値する。

ここは一つ、相手を落ち着かせて言った方がいいだろう。

「あの——……あなた、失恋の相が出ていますよ」

ネギさん、なんてことを。

「な——し、しつ……って」

「でも、ちゃんとした対処方をすればその分チャンスですよ」

「——へ？」

「ちょっとしたことなんです」「ネギにその姉さん方、立ち止まってないで走らないと間に合わないんじゃないかねえの？」

「」「あ」「」

「つーことでお先ー」

「ああ、待ってよ兄さん!？」

「……あ、ちよつ、ちよつと待ちなさいよー! その対処方を教えなさい!」

うん、取りあえず学校に着いてからな。分かったかい？

「……神楽坂 明日菜」

○

とギリギリ間に合った俺らは、なぜか彼女からシャイニングフィ
ンガーを決められていた。

「さあ、いち早く教えなさいガキ共、ハリーハリーハリー！」

「ぐおおおお、お前なんなんだよ！ ド○ンか！？ それともア
ーードか！？」

「ぴぎゃー！ とととと取りあえず落ち着いてえええ！」

痛いんです。これ絶対人間の出せる握力じゃない。まず俺らが九歳
とはいえ、それを中学一年が片手で、しかも手だけを使って持ち上
げられるか？ 大の大人でも出来ない人の方が圧倒的に多いぞ、お
い。

「落ち着いていられるもんですか！？ いきなり失礼なことを言っ
て、でもチャンスだ！ とか言われたら居ても立ってもいられない
わよ！ 十代女子を舐めんじゃないわよお！」

「ごめんなさい！ 舐めていましたああ！」

「ごめんなさい！ 許して痛い痛い痛い！」

「ははは、そこら辺で許してくれるかな、アスナ君？」

職員室の窓から手を振っている男性が居る。顎には無精髭を生や
し眼鏡をかけている。俺らの知り合いの中で、そんな特徴を持って
いる人物は一人だけだ。

「た、高畑先生っ!？」

高畑・T・タカミチ。『紅き翼』、つまり父の仲間であった一人で、現在は各地の紛争に介入している『一悠久の風(AA A)』に所属している。その格付けはAA+。そんな強くて立派な人物なんだが……

「おい、タカミチ。お前部屋が汚くてヤニ臭いって理由で俺らの下宿先の候補から外れたぞ」

「は、ははは、それは悪かったよ。クギ君」

「げ、知り合い……!？」

「こら、兄さん! ……ごほん、お久しぶりです、高畑『先生』」

「うん、おはよう。ネギ『先生』」

「え……せ、先生?」

「あ、はい。そうです」

コホン、と一つ咳をつく。

「この度、この学校で英語の教師をやることになりました、ネギ・スプリングフィールドです」

これが、始まりの合図だ。

そのことを、俺たち以外は知らない。

ある者は剣を研ぎ終えた。ある者は計画を想った。ある者は召還された。ある者はこれに忌避感を覚えた。ある者は瞑想から覚めた。

出席者は揃った。道筋^{コース}も決めた。後はその腕を存分に振るってくれ。

全員が狩人で、全員が獲物の大狩猟が。

「さて」

小さく呟く。確かな始まりを感じて。その始まりに歓喜して。

「……狩りを始めようか」

原作開始だけど何か？（後書き）

最後ちよつとくどかったかなー、と思いつつ更新。

さて、さてさて、遂に原作開始です！ いや、長かった。

大戦の辺りを書いていないのにここまで長くなるとは……。

感想・評価も宜しく願います。

初授業だけど何か？（前書き）

どうも、金です。

ひゃっはー、久しぶりの連投う！

ではどうぞ。……マジでねみい。

初授業だけど何か？

目の前には、横にスライドされる扉がある。その上部には2－Aと書かれている。

……いやしかし、初授業は結構緊張するな。幾ら後ろで先任の先生がいても、いや逆に緊張するか。

すでに数人は顔見知りな訳だが、いやあれって俺じゃなかったものな。というか、あれって確実に黒歴史だよな。恥ずかしい、恥ずかしいよ。どんな顔を向けてあいつらと話せばいいの！？

はっ！ いけない、いけない。マイナス思考スパイラルに入るところだった……。

しかし、もうそろそろだよな。気合い入れようか。

なんて考えているうちに、チャイムが鳴った。

よし、いこうか！

そう、勢い良く扉を開いた。が……。

「バビュッ!？」

突然頭上から落ちてくる落下物に対処できずに、間拔けな声を出してしまう。

「ぐおお、目がああ……」

あれだ、障壁張っていなかったからもろにチョークの粉が目に入っただよ、うん。

しかしトテトテと僅かに前への歩みを止めないが、それが悪かった。

「ドボツ！　ベフツ！？　ビブルチツ！？」

縄に躓き、水入りバケツが落ちてきて被ってしまい、矢（鏝）の部分がゴムのやつ）が突き刺さり、教卓にぶつかる。

……会ってもいないのに嫌われているんですか？　泣いても良いですか？　帰っても良いですか？　ぶっちゃけ、着替えたいです、水でビショビショです。

教室からは笑い声が上がる。成る程、てめえらが犯人ってわけか。でもその前に、

「おゝおゝおゝ、頭が割れるう、尻が割れるう、取りあえず着替えたい」

泣き言言わせてください。さすがに言わんと耐えられない。

そう言っている間、教室中の笑い声が静まる。そして、

「「「ま、また子供おおッ！？」」「」」

取りあえず、何度も言うが着替えたいです。

○

「あー、今日から今学期一杯だが、お前らの数学担当になったクギ・スプリングフィールドだ。当初の予定より三倍ほど厳しくしていくつもりだから、よろしく頼むぞ」

「「「な、なんだってーっ!？」」」

うん、お前らはネラーか、それともビップか？ いいから静かにしろ。

「ん、ちょっと待って」

二本のアホ毛、というか触手が頭から生えている女子生徒が突然その流れを止める。……あれだ、Gだ。黒光りのGだよ、きつと。そんな面影が見える。

「スプリングフィールド、ってネギちゃんと同じ名字じゃない？」

「はっ、そ、そう言われればそうだ！ ハルナにしては良く気が付いたねー」

「何よそれ、ヒドい!？ ん、ちょい待ち。ていうことは……兄妹!？」

「そうだ、双子だ。んで、なんか文句あるか？」

生徒たちの視線は、さもありえん、というものだった。失礼な、正真正銘双子だぞ、たぶん。

「ええー、なんか可愛気がないって言うか……」

「なんか不良チック？　みたいなの……」

「面影ナッシングっていうか……」

「全然似てないにゃー」

「なん……だと……っ!？」

「いや、先生も中々のネラーじゃん」

これは前世の記憶であって、今世の俺はネラーじゃねえもん！
ビップだけどな。

「取りあえず、好き勝手に良いらしいので、初っぱなからテストやりまーす」

「「絶対さっきの腹いせでしょ!」「」」

「違うい!　最初からテストをする予定だったんだ!　まあ、問題数増やしたりちよつと難しくはしたが。ごほん、んで合格点70点以上を取らなかった者に関しては特別課題を出すのでそのつもりで。まあ、授業をちゃんと受けていたなら余裕でそんな点数は取れる問題だから、安心しろ。だがまあ、このテストで流石に50点未満の場合は補習にしようかな。ま、いないとは思うけどな!　俺

に余計な手間を掛けさせないように、ちゃんと全員70点以上取れよな！」

「「「だったら最初からすんな！」」」

尤もな意見だったが、無視してテストを配り始めた。

○

クギの授業後、クラス内ではため息を吐く生徒が多数いた。

「ふー、初授業でいきなりテストって、どういうことよ」

「まあ本当に簡単だったからいいじゃん、別に」

「まあねえ」

そういつて会話をしている彼女たちだったが、そういえば、と言葉を紡いだ。

「最近、なんか外から来る人多くない？ ほら、前に潰れた服屋があっただじゃん。あそこについてこの前新しい喫茶店が出来てさあ」

「ああ、知ってる。なんだか評判の所でしょ？ すごく紅茶がおいしいって噂の。……でも、そういわれればそうね。先生の数もなんか増えた気がするし。なんだかお店も増えていつてるわよね。基本装飾品とか喫茶店ぐらいだけど」

彼女たちが言っていることは正しい。この麻帆良学園は最近人工が増え続けていっている。職員然り、店舗も然り、はたまた清掃員の数も増えていっているのだ。

急激に増え続けていっている人工だが、特に麻帆良学園に悪影響は出ていない。麻帆良学園には、だが。

その生徒たちは違う。増え続けていっている人工に、恐怖を覚えているのだ。それに中々気が付いていないのだが、無意識の内にそのことに忌避感を覚えている。若者の直感と言うものだろうか、それはその異常に危険を感じとっているのだろう。

「うーん、なんだか最近変だにゃー！」

「まあ、あんたがそう言うんなら、大体間違いはないわよねえ」

柿崎 美砂と椎名 桜子の行間休みはそんな話で幕を閉じてゆく。

○

「なんと言うことでしょ……っ!？」

あの授業後、テストの丸付けをしていたのだがどういふことか、70点未満の生徒が7名、しかもその内の2名が50点未満という結果だった。無惨なり。

しかし、このテストで70点未満の点数を出す生徒は結構酷かったりする。普通の高校に受験した場合、他の科目が断トツに良くな

ければ入学できないくらいに。まあ、中学一年の後半だから、まだ挽回の仕様が付く。

しかし、本当に中学一年なのだろうか。どう見ても高校生くらいの身長、というかプロモーションというか、中学生のそれとは断然違う。絶対違うだろ、あいつら。年齢偽ってるだろ、どう考えても。

体つきがエロいじゃん。中学生じゃないよ。厨2君がしつこく誘ったって聞いた時は変態野郎、って思ってたけど、しょうがないじゃん。たぶん他の奴らも誘いたかったんだろうな、きっと。……ん？ どういうこと？

まあいい。それは隅に置いとくとして、帰りのホームルームに課題を渡してくれるようにネギに頼むか。あと、補習の該当者も。

……着た瞬間に忙しくなるなあ、ここ。

はあ、とため息を付いてパソコンを起動させた。

○

「あ、いたいた！　おーい、クギセンサー！」

「んあ？」

授業も終わり、帰宅しようとしていた時に、後方から呼びかけられる声を聞き取ったので、後ろを見る。

するとそこには2－Aの生徒が二人、こちらに手を振ってきている。

「あー、えーと、赤石 裕奈と佐々木 まき絵、だっけ？ それで当たってるか？」

「うん、当たってるよー」

「そんで先生、この後歓迎会をするから三時半頃にネギちゃんとアーニャちゃん達と一緒に来てね！ 場所は2－Aだから！ じゃ、そう言うことで！」

「またねー！」

「お、おう……」

何という中学生パワー。その秘めたる力は壮絶なものであった……なんて感じだろうか。うん、凄いつすね。

「……あ、ネギ達どこにいんだろ」

探すのかあ、めんどくさいなあ。ま、魔力を探ればすぐだからいいか。

○

「……あいつらは、どうだ」

女子校中等部の近くにある、森の中で、いくつかの影が蠢いていた。

明らかに、その目には敵意と悪意、そして殺気を秘めていた。こんなところでそんな目をする人間は限られてくるだろう。

くぐもった声で他の影に問う言に対し、他の声が返答した。

「まだ、転生者とは断定出来ん。イレギュラーの可能性が否定出来ん状況だ。彼女らの仕掛けたトラップにみすみすはまっていたしな。彼の行動には、どうも原作知識が無いように見える」

「それがブラフという可能性もある。あいつ、学園長室で他の奴らに大判震いをしていただろ。それに、『プロフェッサー教授』なんていう二つ名もあり、魔術を使用する。あの馬鹿共の攻撃も全て避けていたしな。これだけ揃えば、転成者の線が強いだろ」

別の声の反論に、大勢の影が同意する。先の影も、それには同意していた。

「後は、ネギとの関係だな。兄と言うところまでは分かったが、アンチ派か、それとも擁護派か、まだ分からない。魔術を使用している点では、アンチ派の線が強いというのが我らの団体の意見だ」

「だが、学園長室での会話を思い出して見ろ。擁護派の可能性が高いだろう」

「まあ、上げるだけ上げて、最後に一気に落とす、なんてことを考えていた強者がいるんだ。案外、それかもしれないよ？」

「現状では、転成者の可能性大、というところしか分かっていない。よって、今後の行動を見て、どのように接触をするかを会議する。

全てはアンチ・ネギのために」

「「全てはアンチ・ネギのために」」

影が、四方八方に飛び散る。そんな中、一つの影が残っていた。

「……このかけ声、なんか馬鹿っぽく聞こえるんだが」

彼の真っ当な意見を聞く者は、森の木以外に誰もいなかった。

○

「ふむ、この辺りの筈なんだが」

僧衣に身を包んだ日本人の男は、そう口にする。

肩辺りまで切り揃えられた黒髪に、独特な声の持ち主である彼は、キャリーを転がし、地図を見ながら進んでいた。行き先は教会。確かに、この辺りにはあるはずの教会だ。

「うう、迷ってしまいました。困りましたねえ」

そう聞こえた右方を見れば、また僧衣を来た白人の男が現れる。

腰辺りに纏められた金髪を揺らし、眼鏡を掛けた男はキョロキョ

口と辺りを見渡し、彼と目が合う。

「ああ、貴方も教会に行くんですか？」

「ええ、そうです」

両者ともに微笑みを浮かべる。自分だけではなかった、そういう感情があるのだろうか。

「ん、キャリアを持っていると言うことは……ああ、今日いらつしやる神父でしたか。いやはや、これは挨拶が遅れて申し訳ございません」

ペコリと会釈をする、金髪の彼。そうして、自己紹介を始めた。

「初めまして、——ヴァレリア・トリファと申します」

「こちらこそ初めまして、——ことみな言峰 きれい綺 礼と言います」

歪んだ神父達の、普通で捻れた邂逅である。

初授業だけど何か？（後書き）

徹夜で書き上げたにしては良い出来だと自負している今回。……
徹夜にしては……ですよ？

感想・評価をお待ちしています。

歓迎会だけと何か？（前書き）

どうも、金です。

連続で投稿です。

ではどうぞ。

歓迎会だけど何か？

さて、魔力を辿ってネギを探していたのはいいが、その途中で少々危ない光景を目にしまった。

「あれは確か……宮崎 のどか、だっけ？」

何冊も積み上げられた本を持って階段を下りているのはあまりにも危ない様だ。ちよつと手伝った方がいいよなあ、あれ。

「おーい、宮崎 のどか！」

「え……あ、クギ先生」

「ちよつとお前危ないから、何冊か持つよ。ちよつと待っていてくれ」

「は、はい。ありがとうございます」

うん、これで転倒の心配はないな。……しかし、これって原作ではなんかのイベントだったのか？ そこら中に転成者がいるぞ？ しかも、俺に殺気とも言える感じの視線を向けているし。全く、イベント一つ潰されたくらいでそう殺気立つなよ、おい。

「んじゃ、6、7冊くらいは持てる。どこまで運べばいいんだ？」

「え、ええと、図書館までです……」

「そうか、んじゃあさつさと運ぶか」

こうして、図書館まで一緒に運ぶこととなった。

○

「ちっ、なんだよあいつ。やっぱり転成者じゃねえのか」

あの森の中の影の一人、かいせん界戦 げつこう月光 は舌打ちを一つ打った。

彼は男子校高等部の常任教師であり、また転成者でもある。彼の目標はネギのアンチとハーレム化であったが、その夢は既に碎かれているのと同然であった。

まず、女子校中等部の教師を志願した月光であったが、現在の勤め先に選ばれてしまった。これはもう、ハーレム化が出来ない状況を作り出されてしまったのだ。

そんなことより、大前提としてはこの麻帆良には現在多くの転成者がいる。そのほとんどの願いの中にハーレム化があるのだから、難しい。

それに、ネギのアンチ。男子ならまだ出来たであろうが、現実女子であった。しかもあの厨2がしゃしゃり出てこちらが現在睨んでいる奴に、軽々と論破されてしまったのだ。

「くそっ、あの野郎。いつか殺す」

ぎりっ、と齒軋りの音が聞こえる。いつしか、彼の姿はそこにも
う無かった。

○

「くそう、さらに離れる羽目になっちまった……」

そう愚痴をこぼしても、距離は縮まらない。そう心に言い聞かせ
ながらネギの魔力がある方向へと、足を向けた。

図書館に本を返した宮崎と俺は、歓迎会までの時間が迫っている
殊に気付き、少々挨拶を交わして別れることにした。

とはいっても、俺はネギを探さなくてはいけないから面倒なんだ
けどな。

「この方角は……校舎側か。一石二鳥じゃん、ラッキー」

鼻歌を歌いながら歩むが、どうやら周りがおかしい。

「……結果か？ 種類は人払い。かなり強力な奴、魔術師でも入れ
ないくらいに。それをここら一帯を覆っているな。ドーム状だから、
空からも警戒している、と。」

……くくっ、成る程成る程。この空間すら歪ませる禍禍しい魔力、
この濃厚で粘着質な殺気を孕んだ視線、この草々木々が泣き叫び命
を乞う存在感。

Good! いい、いいぞ。お前は、争いを望むか、闘争を望むか、戦争を望むか!？」

「違うな、餓鬼。その何れでもない」

響くように聞こえる、幼童の声。だが、そこには傲慢と嘲りがあった。

「では、何を望むんだ? 吸血鬼、『闇の福音
(ダーク・エヴァンジェリン)』、『人形遣い』、『不死の魔法使い』。奴隷か、生命か、娯楽か!」

「頸血だよ、英雄の子、『教授』、『天使喚起者』、『魔術王』。貴様と、貴様の妹が流す、その忌々しくも慾火に駆られる、真っ赤な血だ。その血、地上に散らせて、啜らせて貰うぞ」

空気は一変して、コロシアイのものへと変わり行く。

○

「と思ったんだが、生憎夜でもなく満月でもない。いくら私でも勝てない戦いには赴くほど暇ではなくなてな。残念ながら、今回は宣戦布告で止まらせて貰おう、『教授』」

「はあ、残念だ、『闇の福音』。是非とも普通の授業だけでなく、こっちの授業も受けて欲しかったんだけどなあ」

「ふん、ほざけ。教えられるどころか、教えて貰う立場だということを忘れるなよ」

結界は解け、彼女の気配も消える。全く、血の気の多い恐い奴だ。

「恐い恐い、身が竦みそうだ」

いや、結構マジで。

○

あのあと特に何もなかったので、校舎に行っている途中ネギと偶然出会い、そのまま2－Aへ行った。すると、

「「「ようこそ、ネギ先生ー、クギ君ー、アーニャちゃん!」」」

「あ、おいちょっと待て!　なんでネギには先生付けて、俺には付けない!？」

「えー、何か先生って言うよりは、友達みたいな?　子供みたいな?」

「ネギ先生よりなんか子供っぽいしねえ」

「ええい、どういうことだ!？」

何てこったい!？　信用というか、2－Aで俺への何かが失われている!

「ま、別にいいんだけどなー」

オレンジジュースを片手に、ポテチを口へ運ぶ。……うん、美味しい。これだよ、これ。オレンジジュースとポテチのコンボは最高であって、至上だ。これ以外はファ○タオレンジのみ認め、その他は認めん。

「全く、いつもポテチにはコーラだって言っているのに……」

何か言ったかね、アーニャ君？ そのコンボのカロリーはハンパないよ、極上に。

「うわー、いきなり馴染んでるよねクギ先生とアーニャちゃん。ネギちゃんなんか余所の家の猫みたいになってんのに」

「適応能力が高くなきゃ、人生損するぞ。まず美味しいもんを放っておくなんて論外だ論外」

「人生経験積んでる人みたいなこと言うね、クギ君は。でもなんか子供っぽいよねー。なんでだろう？」

「たまーに爺臭いことも言うのよ、こいつ」

まあ、中はもう二十代突入していて、精神が体に引っ張られているからな。そんなアンバランスな精神状態なんだから、何を言ってもしょうがないんじゃないのかなあ、うん。

「あ、兄さん……」

「ん、どうしたネギ？」

「ちょっと後で話があるんだけど……」

ネギが何やら怯えているように見えるが、どうしたのだろうか？
こういうのって結構珍しいんだよね。結構肝っ玉大きい方だし。

そんな、楽観的に考えていたのが間違이었다と気付かされるとは、思いも寄らなかった。

○

「そういえばヴァレリア神父、この教会には何人の神父と修道女がいるのですか？」

「ええ、神父があと2人います。修道女の数には3名に、見習いが1名。そして私の合計7名です。それに本日から綺礼神父、あなたがいらっしゃったので8名ですね。全員とても優しく、面白い人たちです。」

前は人がいなかったもので、ずいぶん広く感じていたのですが、最近はとても狭く感じてきましたよ」

だが、その顔には全く不快なものを感じさせる表情はなく、朗らかに、柔和な笑みを浮かべ喜んでいるようにも見える。それに言峰は微笑む。

「そうですか、それは楽しみですね」

カラカラとキャリーが音を立てて、動いていく。

しばらく話していると、教会が見えてくる。その玄関には、一人の神父が玄関を掃除していた。

「ああ、やっと来ましたか、ヴァレリア神父。どこに行っていたのですか？」

心配、というよりはあきれた声色でヴァレリアに問いただした。

「申し訳ございません、迷ってしまっていたものですから」

「私よりも前に来ているのですから、覚えていただかないと……こちらには？」

「ああ、彼は本日、この教会に来る予定だった神父です」

「初めまして、言峰 綺礼といいます」

言峰の眼前には、一人の神父がいる。それはあまりにも神職とはかけ離れている顔である。

頬には無精髭と、一つの太刀傷。ヴァレリアと同じく眼鏡を掛けている、がヴァレリアの人柄のいい顔とは対照的に彼の顔は恐ろしいものだ。

「初めまして、言峰神父。私はアンデルセン、アレクサンド・アンデルセンです」

ガチャリ、とアンデルセンの後ろにある教会の扉が開いた。

「アンデルセン神父、教会内の掃除が終わりました。ん？」

現れたのは、180cmの長躯の白人男子だ。

赤く染めあげた髪に、目の下のバーコードの入れ墨は神職者とは思えない。

「丁度いい。こちらは言峰 綺礼神父だ。挨拶しなさい」

「初めまして、言峰だ」

言峰が差し出した手を、この少年が握り返す。

「初めまして、言峰神父。僕はステイル・マグヌスです」

この世で、最も混沌な教会が、麻帆良の地で出来上がった瞬間である。

歓迎会だけど何か？（後書き）

教会をカオスにしちゃった★

別にヘルシングを見たから、ってわけじゃないですよ？……本当ですよ？

感想・評価をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2793u/>

ネギの兄を始めよう！

2011年10月10日13時56分発行